「日本・ロマン・ロランの友の会」と財団法人ロマン・ロラン研究所　六〇年の歩み

二〇〇九年　財団法人ロマン・ロラン研究所

「日本・ロマン・ロランの友の会」創立六〇周年を迎えて

六〇年といえばこの種の組織にとっては長い時間である。紆余曲折があったが、とにかくこれまで続いてきたのは第一にロマン・ロランに対する敬慕の念が強かったということであろう。創立に当たった方々、引き継いでこられた方々に敬意を表し、今後も一層発展するように微力ながら頑張りたい。

この記録の編纂に協力された方々に熱くお礼を申し上げる。

財団法人ロマン・ロラン研究所理事長
西成勝好

目次

巻頭言
一．ロマン・ロランの友の会の成立（一九四五）……5
二．「日本・ロマン・ロランの友の会」の設立（一九四九）……23
三．「友の会」発足時（一九四八―五一）……33
四．ロマン・ロラン没後十年（一九五四）……45
五．ロマン・ロラン生誕百年祭（一九六六）……49
六．ロマン・ロラン展（一九六八）……85
七．ロマン・ロラン全集……93
八．関係者の紹介……123
九．京都友の会と財団法人ロマン・ロラン研究所……129
十．機関誌『ユニテ』総目次……165

一、　ロマン・ロランの友の会の成立（一九四五）

一九四四年十二月三十日にロマン・ロランがこの世を去つたその翌年、一九四五年の春にロマン・ロラン夫人の発起で『ジャン・クリストフ』の著者の「精神的遺産を守る」ために、そして「フランスと諸外國との精神的な關係を拡げる」ために、「ロマン・ロラン友の会」(Association des Amis de Romain Rolland)の理事会がパリにおいて組織された。

その顔触れの主なるものは次の通りであつた。

会　長　ポール・クローデル(翰林院会員)

副会長　ジャン・リシャール・ブロック、シャルル・ヴィルドラック。

理　事　ルイ・アラゴン、ジャン・ボンヌロ(ソルボンヌ大学図書館長、ロラン評傳の著者)、ジュリアン・カン(國立図書館理事)、ジャン・カスー(雑誌「ユロープ」主筆)、ジョルジュ・デュアメル(翰林院会員)、ロベール・エスメナール(「ジャン・クリストフ」その他ロランの主要なる著作の発行所アルバン・ミシェル書店代表者)、ジャン・ゲーノ(作家)、アンリ・モンドール(翰林院会員、外科医の泰斗でマラルメの研究家)、ルネ・ラルー(文学者)レオン・ムーシナック、ロマン・ロラン夫人、マドレーヌ・ロラン(ロマン・ロラン令妹)ほか。

その時「友の会」の予定事業として次の諸項が計画された。

一、ヴェズレー(ロマン・ロラン逝去の地)に「個人博物館」を設立する。

一、クラムシー(ロマン・ロラン誕生の地)に「參考館」を開く。

一、國立図書館にロマン・ロランの日記を委托して、「ロマン・ロラン文献」をつくる。

一、定期的に「ロマン・ロラン叢書」を出版し、それから上る利益を「友の会」の費用に加える。

一、ロマン・ロランの著作と書簡とを出版する。(ロランの遺族はロランの書簡に対する著作権を「友の会」のために放棄する。)

一、講演会を開き、劇作品を上演する。

一、外國の同志の團体と情報を交換する。

一、経済的に可能になつた暁に國際大賞(文学、哲学、歴史)を設ける。

「友の会」は人種、國籍、イデオロギーを問わずおよそロマン・ロランの作品ならびに人格に関心を持ち、その作品と精神とを尊重しそれをなおよく理解してそれを拡めようと思う者は誰でも喜んで会員として迎える。「自分の情熱や思想や臆説の範囲の外にわれわれを置いて生かしてくれるほど、充分に自分の立場を離れた友はいないものか。誰でもわれわれを強いて自分に結びつけるために。われわれを歪めてしまう。われわれを愛していればいるほどわれわ

れを愛していると云えば云うほど、われわれを歪めてしまう。われわれを憎む敵に栄あれ。その憎しみは、たとえわれわれを滅そうとしているとしても、少くともわれわれに独立的な立場を認めてくれるものである。」とロランは未発表の手記の一節に述べている。故に「友の会」はたとえロマン・ロランと立場を異にする人といえども、ロランを自分の大きさだけの範囲に制限しない人を、ロランの精神のうちで自分の思想と一致しない部分を否定したり抹殺したりしない人を、眞の友として迎える。これはロランが愛していたヘラクレイトスの次の言葉の精神にも合致する。

「最も美しい和音は不協和音でつくられる。」

一九四六年六月十六日に「友の会」の第一回総会がポール・クローデル司会の下に開かれた。その席上シャルル・ヴィルドラックが「友の会」のその後の動向や計画や、外國における反響に関して詳細な報告を朗読している。「友の会」会報（ビュルタン）の第一号（一九四六年八月発行）に載つているその梗概から、主要な事項をこゝに拾つてみる。

パリにも「ロマン・ロラン館」（une Salle Romain Rolland）を設け、こゝとクラムシーの参考館とにロマン・ロランの全著作の原書と、外國における全飜訳書と、ロランに関するフランス及び外國の研究書、研究論文、新聞雑誌記事を集めて図書室をつくる。なおクラムシーにはロランの書簡と、有名無名を問わずその文通者の書簡と、ロマン・ロラン及びその友の写眞など、とくに重要な文献の複製または寫眞を集める。

「友の会」は世界に散在するロマン・ロランの書簡を蒐集している。所持者が会と連絡をとつて、それを寫眞フィルムに撮影することを希望している。それはロマン・ロラン文献の重要な部分となるものである。現に集つているものは数千通に上つている。

ロラン夫人はロマン・ロランの日記帳の写眞撮影について國立図書館と交渉をした。図書館は原文の委托を受ける代りに、その写眞撮影を無償で行うことを承諾した。ロラン夫人は万一の場合を慮つて、写眞を二部つくらせることとした。一部はスエーデン王立大学の図書館に、一部はアメリカの一図書館に保管されることになる。これによつて原本が焼失しても原文は保存される。

ロマン・ロラン叢書は近く三册が出版される。第一册はロマン・ロランがマルヴィダ・フォン・マイゼンブーク（ニイチエやワグナーの親しい女友達であつたドイツのすぐれた自由主義者）に送つた書簡の選集で、第二册はロマン・ロランとルイ・ジレーとの往復書簡書であり、第三册にはポール・クローデルの序文が載る。第三册は「リヒアルト・シュトラウスとの往復書簡。」出版所はアルバン・ミシェル書店である。

「友の会」は世界からロマン・ロランに関する研究論文や

著書の送附を求めている。

フランスの各地方や諸都市にも「友の会」に呼應してさまざまな意思表示やグループの結成が行われているが、外國における現在までの反響は次の通りである。

ベルギーではエリザベート女王がベルギーの「ロマン・ロラン友の会」の会長に推されロラン夫人に寄せられた懇切な書簡の中で、「私が会長を承諾することについて、いかなる理由もいかなる禮儀(エチケット)も、その他いかなるものも、私を妨げるものはないでしょう。」と云われ、深く敬愛するロマン・ロランの名と自分の名とが結びつけられることは自分の幸福でもあり誇りである、と述べられている。なおベルギーの「友の会」はアフリカのベルギー・コンゴーにも及ぶと報告されている。

オランダでは七十八歳の女詩人 Henriette Roland-Holst 及び Mlle Boissevain 教授が主となつて、ユトレヒトに「友の会」が結成され、ロラン書簡の写眞複影を進めている。

スイスではチュリヒの書籍同業組合(ビュヒヤーギルド)の H. Oprecht 氏の手によつてヘルマン・ヘッセ、カール・シュピテラー(詩人)、ポール・ビリューコフ(トルストイの秘書、老大なトルストイ傳の著者)へのロラン書簡の写眞複製がロラン夫人の手もとへ送られている。

チェコスロヴァキヤでも「友の会」が組織され、その偉大な父親がロマン・ロランの友であつたあの痛ましい外相ヤン・マサリックがロラン夫人によつて会長に推され、マサリックはその申し出を喜んで承諾している。

ルーマニヤではロラン書簡の複製が進められているが、とくに同國のイストラチ(始め親ソ的でやがて反ソ的立場をとつた作家)との往復書簡に期待が持たれ、これは他日ロラン叢書の一冊となるものと思われる。

イタリーでは現在の情勢から動きはまだ活潑化されないが、イタリー「友の会」の母胎となる数人の名がパリに報告されていて、ロラン夫人はベネデト・クローチェに会長となるように依頼の手紙を書いた。

イギリスからロンドンに在住するシュテファン・ツヴァイクの遺族がロランのツヴァイクへの書簡の写しをロラン夫人に送つてきた。これは近い將来ロラン叢書の一冊となる。なおロンドン大学ではフランスのドニ・ソーラ教授がロマン・ロランを研究題目とする講座を開くことになつている。

ソヴィエトは同國人へのロランのすべての書簡、とくにゴルキーへの書簡の写眞複製を作ることと、ロランの著作のロシア語版や研究論文のすべてを送ることとを、「友の会」へ申し送つてきている。

ドイツでは廿年前の「ロマン・ロランの作品に現われる悲壯な理想主義」の著者ゲッツフリート教授がヒトラーを

逃れてパリに亡命し、ドイツ軍に捕われてドイツの俘虜收容所に送られたがアメリカ軍に救出され、ドイツ「友の会」の結成の準備を始めると共に、ロランに関する新しい著述や講演に從事し、またエアランゲン大学でロラン研究の特別講座を開こうとしている。

アメリカではまずニューヨーク地方でシュテファン・ツヴァイクの第一夫人フレデリケ・ツヴァイクがアメリカ「友の会」の発起委員会をつくつたが、それには次のような人々の名が見えている。エルネスト・ブロック（作曲家）、パール・バック、アルベルト・アインシュタイン、ワルド・フランク（作家）、ロッテ・レーマン（音樂家）、ダリウス・ミロー（作曲家）、フリッツ・フォン・ウンルー（一九三八年度「ゲーテ賞」受賞者）、ブルノ・ワルター（管絃樂指揮者）など。また同じくフレデリケ夫人の手でニューヨークに國際的な「ロマン・ロラン懇話会」が三日に亙つて開催され、種々の研究主題を英語フランス語スペイン語で討論するとともに、將來ロマン・ロラン賞やロマン・ロラン博物館の設置や各種の出版を目論む「ロマン・ロラン協会」の設立準備委員会をも組織した。

インドではラビンドラナート・タゴールの令息によつてタゴールへのロラン書簡が出版された。

会報の第二号（一九四七年七月発行）によるとフランス「友の会」の会員は千名に達し、その後の入会者の中にアントワンヌ・ブールデル夫人、イレーヌ・ジョリオ・キュリー夫人、アンドレ・マルロー、高田博厚（彫刻家）などの名が見える。

イタリーではダヌンチオへのロラン書簡が発見された。

ドイツからの報告によると、フロイデンシュタットでのロマン・ロラン講演会に一人の上級將校が出席したが、その將校は一九四〇年当時パリ攻撃の際のドイツ軍に屬していてパリに侵入してもロマン・ロランの家には損傷を與えてはならぬと部下に命令を下したという。

エジプトではカイロに「友の会」が結成され、アレクサンドリヤやポートサイドからも、会員が加わつた。そしてロマン・ロラン図書館の設立が計画されている。

中國では上海の Fou-Nou-En という中國人からパリ「友の会」に便りがあり、ロランからの「非常に意味深い」書簡があるから、写眞複製の出來次第送ると申し出てきた。ロランの偉人傳三册と、「ジャン・クリストフ」との訳者で、クリストフの分を四册送つてきた。一九三四年六月のロランの日記にこの中國人から長い手紙が來たことが記されている。その手紙によると中國人は四五千年のあいだ宗教の拠り所なしに生活してきた。孔子や老子の賢い教えがあるにも拘らず精神の平衡を失つて、激しい情熱に駆られたと思うと徹底した無氣力に陥つたりしている。生の目的を見失つた彼はある日ふと「ベートーヴェン」を読み、「私

は心から泣きましたが、突然奇蹟のように立ち直りました。再び力が私に生れ、上から光が私を照しました。」そして「中國の悩む若い精神に大きな慰撫を與へようとして」ロランの偉人傳を訳したと語つている。

アメリカでは種々の大学がパリ「友の会」と連絡をとつている。ハーヴァード大学にはロマン・ロランが生前、一九一四年から一九一九年までの日記の寫しを贈つて、一九五五年以後にそれを英語で発表する許可を與えている。ロラン夫人は同大学の図書館と交渉して、アメリカ人宛のロラン書簡の全部を写眞に複製してくれるなら、その一部を同大学に寄贈すると申し出ている。エヴァンストン大学ではアメリカ発行の新聞雑誌に載つたロラン関係の記事を写眞に縮写するために、「相当多額の」費用を出している。コロンビヤ大学ではロマン・ロラン研究の一博士論文が提出される準備が進められている。

なお南米諸國、フィンランド、ユーゴースラビヤ、ルーマニヤ、オーストリヤ、その他の諸國から、ロランの著作の飜訳やロラン研究書の出版、劇作品の上演、ラジオ放送、新聞雑誌のロマン・ロラン特集号の編集、ロランに関する小團体の結成、講演会の開催、ロラン書簡の蒐集と写眞複製、ロランの未発表の日記や手記の発表などに関して、報告が続々と送られている。

アルバン・ミシェル書店からロマン・ロランが生前に原稿を整理してあつた「手記」(メモアル)(一九〇二年以前のもの)が出版される。その一部は既にローザンヌで限定出版され、「メルキュール・ド・フランス」誌にそのうちの一章が発表されることになつている。その独訳版もチューリヒから出る。ロランの一九一四年から一九一九年の「日記」の一部もチューリヒとフランスからドイツ語とフランス語で発表される。この一九一四年からの戰時日誌の序論として、一九一二年から一三年までのロランの日記が、「ジャン・クリストフよりコラ・ブルニョンまで」と題してパリのサロン・カレ書店から限定出版された。アルバン・ミシェル書店から「ベギー論」も再版される。特に期待されるのはゲッツフリート教授の経營するエヤランゲンのディバック・ス書店から、ロランが学生時代に書いた処女作で、今日まで未発表だつた戯曲「オルジノ」が、マルヴィダ・フォン・マイゼンブークの独訳によつて出版されることである。

会報の第三・四合併号(一九四八年一月発行)によると、パリ「友の会」の副会長ジャン・リシャール・ブロックが逝去したので、そのあとにジャン・カスーが選ばれ、なおルネ・アルコスが入会している。

ロラン夫人はベルギーのエリザベート女王にブラッセルへ招かれたのを始めとし、スイスのチューリッヒ、オランダのユトレヒトとアムステルダムとハーグへ行き、それぞれの会合の席上でロランの日記を朗読している。

イギリスからはH・G・ウェルズとフロイドへのロラン書簡の写眞複写が送られてきて、フロイドの息女アンナ・フロイドの入会申込を受けた。

ブルガリヤでは、ソフィアに「友の会」が正式に結成され、ロラン三週忌の大会で会長の音樂学校教授ストヤーフ氏らが「ロランの愛していた」ベートーヴェンのアパショナタと作品百三十二のイ短調クワルテットを演奏した。

オーストリアではウィーン大学とインスブルック大学とでロラン研究論文が執筆されつゝあり、「ダス・マス」誌はベートーヴェン百年祭にロランが同國を旅行した時の日記の一部を発表することになつている。

ドイツではフランス地区で発行されている雜誌「ランスロ」にパリ「友の会」に関する照会が殺到するので、ロラン夫人はポール・クローデルやヴィルドラックなどの理事の承認の下に「ドイツ人への手紙」をその回答として同誌へ書いた。ロマン・ロランはあらゆる人びとにとつて普遍的な精神である。彼はゲーテのように自國民のみならず他國民の不幸をも痛ましく感じていた。彼は常に諸民族の結合と平和とのために働き、自他民族の不正に対して男々しく戦つた。「ジャン・クリストフ」こそ独佛両國民の友愛の物語であるが、ロランはやがてその域を越えて、すべての民族が、一つの人類に結合することを目指した。一九二八年にロランはドイツをどう思うかという問に答えて、「私はフランスとドイツとの正しい人びと、偉大な精神たちを共に愛する。私は両國の、またすべての國々の、正しくない人や狂信者や無智な人々を嫌う。フランスとドイツとのまたすべての國々の國家主義者たちが、私を敵としているのはその爲である。彼等の市に別れを告げた者が敵だとすれば、彼等の云うことは尤もである。然し私はもう『神の市民』だけしか認めなくなつている。」と云つている。各自の祖國を忘れず、祖國から遊離もせずに、而もその神の市民の結合に加わろうとする「ドイツの友たち」は、われわれの人類の大きな家族へ喜んで迎えられる。ロラン夫人の「手紙」はそう述べ、ドイツにも早く「友の会」の出來る時期が來ればよいと望んでいる。フランス放送局ではドイツ向け放送でドイツ婦人たちにその「手記」を朗読するようロラン夫人に依頼してきた。ベルリン、フランクフルト、シュッツガルト、コンスタンツ、ミュンヘン、ザール地方などに幾つかのグループが出來、またエアランゲンのゲッツフリート教授と、上バヴァリアのベルタ・シュライヒュル（マルヴィーダ・フォン・マイゼンブーク一家と親懇な女性でマルヴィーダの傳記作者）とから、ロラン夫人へ入会希望の名簿を送つてきている。　なお十年ほど前にロマン・ロランとマルヴィーダ・フォン・マイゼンブークとの往復書簡の一部を出版したエンゲルホルン書店はそれを再版するとともに尙その全書簡の出版を希望している。

アメリカではハーヴァード大学がロラン書簡の写眞複製を開始し、既に作曲家エルネスト・ブロックとアルベルト・アインシュタインとポール・アマン教授との分を済ませた。ワシントンのカトリック大学のハツフェルト教授、アラバマのモントゴメリー大学のグラハム教授が入会し、アメリカに在るロラン書簡の蒐集に協力することになつた。「ジャン・クリストフ」映画の音樂を担当するというボストン管絃樂團指揮者ベンジャミン・グロスベインもパリ「友の会」に入会した。

日本に関してはパリの高田博厚宛の片山敏彦の手紙が要約されている。みすず書房がG・H・Qの許可を得て「愛と死との戯れ」はじめロランの著作を出版していること、片山の「ロマン・ロラン」その他ロランに関するエッセー集が版を更めて出ていること、一九四六年夏に東京の大劇場の一つの有樂座で「愛と死との戯れ」が上演され、その際片山が信州から上京して講演し、三大新聞の一つの読賣新聞がその戯曲を激賞したこと、片山が「婦人の友」と名古屋の全学生の組織する「さわらび会」の依頼でロランについて講演したこと、片山はロマン・ロランの作品の眞の意味とロランの眞の精神とを日本人に傳えるために今後も努めるであろうこと、そこに日本人にとつて最も必要な精神の糧があることなど報告されている。

ヴェズレーにロマン・ロラン記念碑がクラムシー郡長およびパリその他からの大勢の來賓の臨席の下に除幕された。ヴェズレー町長が感動にみちた演説をして、「われわれヴェズレーの町民たちは、平和の大詩人であるこの偉人がわれわれの古い町を選んで瞑想の場所とされ、人類に捧げつくしたその生涯をこゝで了えられたことを、誇りとしている。」と結んだ。その数日前にヴェズレーの「國際奉仕團」支部 (Service Civil Volontaire International) の会員たちがロマン・ロランの眠る墓地のあるブレーヴに行き、墓の周圍の石だらけの土を掘り取つて平坦にする作業をした。

世界各地の大学に提出されるロマン・ロラン研究論文は、目下のところ次のように報告されている。

ソルボンヌ大学に Arthur R. Levy「ロマン・ロランの理想主義」。エジプト人 Raoul Kamil の文学博士論文、主論文「ロマン・ロランの思想」、副論文ロマン・ロラン未發表原稿「眞実ナルガ故に予ハ信ズ」(Credo quia verum)について。及びその序論と註。パレルモ大学に同大学教授イタリー人 Fabiola Ferarotta「ロマン・ロランの作品における女性の性格」。フォントネ・オー・ローズ高等師範学校(エコル・ノルマル・シュペリュール)に Mlle Marcelle Shierer「ロマン・ロランとドイツとの関係」。コロンビヤ大学に Miss Bita May Hall「ロマン・ロランとアメリカ」、デューク大学に Miss Wilsie F. Bussel「ロマン・ロランの社会

政治思想」、オランダでMlle Wibina Boisservain「ロマンロランの宗教思想」。オーストリヤで、ウィーン大学にMme Marguerite Lion「ロマン・ロランの平和主義」。インスブルック大学にMlle Plahl「ジャン・クリストフ論」。南アフリカのヨハネスブルクでMlle Mira Hermelin「ロマン・ロランの作品」。以上の人びとはみなパリ「友の会」の会員で「友の会」から文献上の援助を得ている。なお「友の会」は世界からロマン・ロラン研究論文に関する報告を求めている。

パリのピエール・ヴォルム書店からロマン・ロランの「機械の反逆」(La Revolte des machines)がフランス・マーズレールの木版画三十四葉を添えて限定出版された。これはロランが一九二一年に書いたシナリオで、その年にサブリエ書店からごく少数が限定出版されたが一般には賣り出されなかつた。なおこの書はチューリヒからも佛独兩國語版が出る。ルネ・アルコスの経営するサブリエ書店からは「復活の歌」「エロイカからアパショナタ」「第九交響曲」の再版が出る。「後期の四重奏曲」と「喜劇ハ終リヌ」(Finita Comoedia)とは目下発賣中。アルバン・ミシェル書店からインディアン・ペーパーの一冊本「ジャン・クリストフ」の再版が出る。ロマン・ロラン叢書の第三冊「シュテファン・ツヴァイクとロマン・ロランとの往復書簡」がフランス語版英語版ドイツ語版で出る。パリのボルダス書店から「現代人」叢書の一冊としてルネ・アルコスの「ロマン・ロラン」が出る予定である。

パリ造幣局(Les Editions de la monnaire de Paris)では「友の会」の会員で高等工藝学校教授アンドレ・ガルティエの彫刻によるロマン・ロランのメダルを発行した。表面にはロランの肖像と竪琴が描かれ、竪琴の絃でロランの諸作品を象徴している。裏面にはヘラクレイトスの言葉「最も美しい和音は不協和音でつくられる」のギリシヤ語の銘がある。青銅製と銀製の二種。

「友の会」会員の彫刻家モーリス・ド・ビュスはフランス政府の注文によつて、二年前からロマン・ロランの胸像の製作に従事している。

ジュネーヴの出版書肆『Le milieu du monde』はロマン・ロラン文学賞として、毎年フランス語の未発表原稿に賞金を與えることを「友の会」に申し出てきた。その規約によると、種類は長編小説(ロマン)、中編小説(ヌーヴェル)、及び論文(エセー)。原稿は最低二百頁から最高三百頁までで未発表のものに限る。原稿はタイプに打ち、作者の名と住所とを入れた封書を添え、その封書に作品の題名を再記する。送り先はパリ「友の会」審査員は「友の会」理事委員会。受賞作品はジュネーヴの本社あるいはパリ又はモントリオルの支社から、最低一万部出版する。初版の一割、版を重ねた場合は、一割二分の印税を作者に支拂う。轉載や飜案や飜訳の料金は慣例によ

る。なお外の一千スイスフランの賞金をジュネーヴで授與する。該当作品のない場合は授賞を翌年に延期する。原稿は一切返送しないが、「友の会」に三ヶ月置いて作者の返却の需めに應ずる。締切までに「友の会」に届いた原稿の數は六十七通あつた。

会報第三・四合併号にはロランの重要なオリジナルが二つ発表されている。一つは「一日本人への書簡」と題する片山敏彦への長い手紙（一九二五年三月十日附）と、もう一つはガンジーの満七十歳を祝つて特別出版された「ガンヂー讃仰の書」へのロランの寄稿又「一西洋人からガンジーへの感謝状」である。

片山への書簡はスイスのヴィルヌーヴのヴィラ・オルガで書かれているが、次にその大意を紹介する。『あなたの手紙はたいへん嬉しかつた。あなたの友達の小さなグループは私の友達のグループでもあり、そのことを考えると私は幸福を感ずる。私も星の音樂の聞える武藏野のその小さな家に行きたいと思う。あなたはお國で孤独だと云われるが、私も私の名がつながつているとはいえ私の自國において孤独でいる。私は自分に誠実であろうとして多くのフランスの友を失つた。この教訓は人をしてますます自由で深い意味において「宗教的」にし、永遠なるものに愛着を覺えさせるとともに、われわれ自身の弱さを悲しいものに思わせる。私はものを書き始めた当初から私の眞実の法則に從つてきた。私自身に対して絶対に眞実であること、これが第一の務めである。やがて私は徐々に一つの使命が自分の知らぬ間に私に課せられていることを感じるようになつた。全世界の自由で眞実な魂たちを兄弟として結合するという使命である。われわれのその家族はいかに小數であろうとも、それは全世界の人びとを抱容する。そしてその家族が必ずわれわれの死後にも生き続けるであろうことを私はつきり知つている。われわれは一つの新しい人類の祖なのである。親しい片山よ。私はあなた及び私の日本の友だちに望みたいことがある。チューリッヒの、ロータプフェル書店主のエミール・ローニガーは私と同じく「汎人類主義」思想の持ち主で、自らの書店を「世界の友誼」の中心の場所にしたがつている。私の日本の友だちも同書店をヨーロッパのための出版所とし、また友誼の中心の場所とすればよいと思う。現在いちばん緊急を要する事はアジアとヨーロッパとの精神を近づけることである。私は同書店からの私の「ガンジー」を出版し、またガンジーの全著作のヨーロッパにおける出版権を同書店に得させた。またタゴールのグループやロシアのトルストイの使徒たちとも関係を結ばせた。あなた方も急いで新しい日本（永遠の日本）に関する考えをヨーロッパに知らせなければならない。大民族であなた方ぐらいヨーロッパに知られていないものはいない。あなた方は賞讃されているがその賞讃の対象が間違つ

ているのだ。賢さや勤勉さは感心されているが、内面的な若々しさや感情の深さや眞摯さは知られていない。私はあなたの信頼の溢れた心の告白によつてそれを知り、あなた方がいかに誤解されているかに驚いた。われわれがいかに努力しようともやがてヨーロッパとアジアとが相爭う日の來ることが懸念される。その不安な徴候は至る所に見られる。然し諸民族間の大きな軋轢も人類の運命の神秘的な法則に導かれて、やがてはその血に塗れた歩みを「結合」に向けずにはいないのだ。ローマ帝國と古代文明が崩壞した時も、思惟と愛との貴い宝石であるその文明の殘余は、暴力の海の只中の藝術と平和との島である若いキリスト教教会や僧院に殘つた。私のアジアの友だちよ。われわれはみなこの大きな危險に対して用意をとゝのえなければならない。われわれは脅かされた宝物を救うための、自由なる「精神の教会」にならなければならない。党派や國家を超えてわれわれの「神の市」を建てねばならない。』「ガンジーへの感謝狀」は一九三九年二月に書かれたもので、その大意は次の通りである。ガンジーはひとり印度に聖人傳中の人物として末長く傳えられる英雄であるばかりでなく、西洋人にとつても忘れられたり裏切られたりしたキリストの福音を新たに生かしてくれた人である。彼は人類の聖人賢者のなかに名を加え、その姿から発する光は全世界の至る所にまで達している。激しい四年の戰爭の直後、廃墟と遺恨とに充ちていたヨーロッパにとつてガンジーの出現は恰も奇蹟を見る思いであつた。理性と愛とだけを武器としたこの痩せて裸の小さな男。謙虛ではあるが根強いその優しさは、傳統的な西洋の暴力に対して一見逆説的な勝利をかち得たのである。印度のこの精神的な師の終始変らぬ忍耐強い行爲をよく知るに及んで、感謝と信仰との波が西洋から彼へ向つて打ち寄せた。多くの人びとにとつて彼はキリストの再來であつた。又、文明の虛僞と犯罪とを告発し、自然と素朴生活と健康とへの復帰を説く、ジャン・ジャック・ルソーとトルストイとの新しい顯現でもあつた。然しあの山上の垂訓にも比すべき、彼の叡智と愛との言葉は、たとえ多くの人びとの心を深く感動させたとしても、あのナザレの主の場合と同様に、現実的な世界の運命の方向を変えるまでには至らなかつた。世界に今や新しく君臨する独裁的全体主義の非道な振舞に対しては、あの暴力の否定も全き自己犠牲もその勝利を得るには長い年月を待たねばならないのである。たゞ人びとはその間にガンジーの信仰のような信仰の支持を必要とする。今日の西洋の大多数の人々には僅かの者を除いてこの神への信仰が欠けている。ヨーロッパの人にとつていま最も緊急なことは、ファシズムや民族主義の帝國主義に貪られる自由と独立とを守ることである。われわれはいかにガンジーの教理を崇敬しているとしても、ある場合にはそれを称えていたり実行してい

たりしてはいられないこともあるであろう。けれどもその教理は恰も中世における大きな僧院の役割を世界に於いて果しているように思われる。精神文明の最も純粋な實、平和と愛との精神が保存されていたあの僧院の役割である。なんという輝かしい神聖な役割であろう。われわれ知識階級、科学者、文学者、藝術家、あの「神の休戦」が宣せられている全人類の市を精神のために建設しようと各々微力を盡しているわれわれ、「汎人類主義」宗團に屬するわれわれは心情と行爲とによつて未來の人類の理想を実現しているわれわれの師であり兄弟であるガンジーに、われわれの衷心からの愛と尊敬との讃仰の言葉を捧げる。

パリ「友の会」の成立後、ロマン・ロラン夫人は直接片山敏彦と上田秋夫とに手紙を寄せ、入会して共に協力するよう慫慂してきた。それ以來ロラン夫人と片山との間に数十通の書簡が交換され、日本「友の会」の設立と日本にあるロラン書簡のコピー製作とについて打合せが行われている。生前ロランの信任をうけ、ロランの胸像を製作したことがあり、以前から片山も親しいパリの高田博厚も、パリ「友の会」の情勢やロラン夫人の意のあるところも傳えてきて、片山がイニシアティヴをとつて日本「友の会」をつくることを勧めてきている。

日本のロランの書簡の所持者は現在までに判明しているところでは故成瀬正一、片山敏彦、尾崎喜八、上田秋夫、故倉田百三、故野口米次郎、宮本正清、新城和一、吉村せい子、長谷川銕一郎医博の諸氏であるが、既に事故その他で喪失されたものもあるようである。このうち倉田百三の二通、新城和一の一通、片山敏彦の十通(所持書簡の半数)のコピーが片山によつてとられ、ロラン夫人と親しいアメリカの Miss Bussel を通じてパリ「友の会」に送られている。各自にコピーをとつて直接パリに送られることになつているものもある。なお片山敏彦の所持の分に対しては、日本光学株式会社の厚意によつて寫眞複製が愼重に始められている。ロラン夫人は片山への手紙のなかで、日本のロラン書簡のすべてのコピーが完成した曉には、その後フランス政府の援助の下に新たにサント・ジュヌヴィエーヴ図書館の一室に設けられたロラン文献陳列室に「日本」の一隅をつくるし、やがてはロマン・ロラン叢書の一冊として「日本人への書簡」を出す、と云つている。

ロラン夫人はなお片山に、ロランの日本に関する未発表の日記や手記を送ることを約し、すでにその一部の日記の一節が屆いている。それは雜誌「高原」一九四九年一月の「ロマン・ロラン特集号」に発表される。この外ロランの未発表のオリジナルで日本で始めて発表されたものは、高田博厚が夫人の許可を得て訳した日記「ガンヂーとの対話」(雜誌「世界文学」一九四八年六月号)がある。

戰後日本においてロマン・ロランに対する関心の頗る高まつたことは、片山敏彦が各地の需めに應じて行つたかずかずの講演に現われている、片山は前述の「婦人の友」と名古屋の「さわらび会」その外に、一九四八年のうちに、四月に長野縣教育会の主催で諏訪と坂城とで、同じ月に東京の日本光学株式会社の文化会でロランについて語り、日本光学の時には男女工員が「獅子座の流星群」中のスイスのクリスマス・カロルを四部合唱で歌つた。六月には京都市の主催の下に、結成中の「日本ロマン・ロラン友の会」と関西日佛学館と京都大学同志会との名で、京都大学講堂で「ロマン・ロラン友の会——講演と音樂会」が開催され、片山敏彦が「ロランの理想主義」を、関西日佛学館長マルセル・ロベールが「ロランと音樂」を、同学館主事の宮本正清が「ロランの演劇について」を講演し、原智惠子がベートーヴェンのアパショナタを演奏した。その直後に片山は大阪女性教養の会の主催で「ジャン・クリストフについて」を朝日会館で、十月には千葉の東大第一工学部文化会で「ロランについて」を、同じ月に第一高等学校で「ロマン・ロランのヒューマニズム」を、講演している。

「ロマン・ロラン全集」の出版も最近ロラン夫人とみすず書房との間に完全な了解が成立し、今後は夫人やパリ「友の会」の援助と協力の下に、「日本ロマン・ロラン友の会」の主要事業として、未発表原稿をも含めて着実に進められてゆくことになつた。(一九四八・一一)

※「思潮」第四巻第一号(一九四九・二)収録

会報の第五・六合併号は一九四八年十月の発行である。それによる最近の情報は次の通りである。

ロマン・ロランの日記の大部分のフィルム撮影の仕事が完成し、その三十四本がアメリカのハーヴァード大学の図書館に送られた。このフィルムはロランの遺志により三十年間公開を許されない。たゞその抜萃を遺族が公表することだけが認められている。なお日記よりもつと内面的な手記もフィルムに撮影されることになつているが、これは五十年間公開にされない。撮影を了えた日記の原本の大部分は故人の希望によつて三十年から五十年間公開されずにパリの國立図書館に委託される。残りの原本は既にバール(Bale)大学の図書館に委託されている。

日記のフィルムは四本つくられ、一本はフランスの國立図書館に、一本はパリ友の会の「ロラン文献」に、一本はハーヴァード大学に、一本はストックホルムの王立図書館に保存される。なおストックホルムの王立図書館には、ロマン・ロランがノーベル賞を授けられた際に贈つた「ジャン・クリストフ」の原稿とノートと、一九一四年から一九一九年までの間の手記のタイプライターによるコピーとが

ある。

ロランの書簡およびロラン宛の書簡の分類整理の仕事も進捗している。各書簡にはそれぞれ各種のラベルが貼られ、必要な書簡とその内容とを迅速に検出できるようになつている。

その一例

「エミール・ヴェルハーレンよりロマン・ロラン宛。

二葉、表面に記載。

日附なし。

封筒つき。

切手の消印、一九〇七年十一月廿六日。

ヴェルハーレンはロマン・ロランが『ベートーヴェン』と『ミケランジェロ』とを送つたことに禮を述べている。『貴方はプルータルクが古代人のためにした仕事を近代人のためになさつている。……貴方の著作を讀むと力が得られます。……私は『ミケランジェロ』の序文を讀み了え、感歎と喜びのあまりこのお手紙を書き、貴方に手を差しのべるのです。

引用人名

ベートーヴェン、ミケランジェロ、プルータルク、ボール・フォール、ヤブロンスキー。

大きさ　一七・八／一一・四」

その後に友の会に入会した人々の中にはH・プシカリ、ミリセント・サザーランド夫人、アルベール・カミュ、ドニ・ソーラ教授（ロンドン大学）、ジャン・マリ・カレ（ソルボンヌ大学教授）、モーリス・ノエル（「フィガロ・リテレール」編輯長）、ルネ・ド・ベルヴァル（「フランス・アジール」誌主幹）などの名が見える。

フランスでの動靜として、シャルル・ヴィルドラック夫人ほかケラーソン夫人やジェニオー夫人などがロランに関する講演をした。

クラムシー市ではロランの生家に銅板の標札を掲げることに決定した。

一九一八年十二月三十日のロラン四周忌にはラジオの記念放送があることになつており、「リリュール」の放送上演が予定され、また各國のロランの友からの短いメッセージを國際放送にかけることになつている。

ロラン・ロラン叢書の第一册（マルヴィーダ・フォン・マイセンブーク宛の書簡）の特製本は既に発行され、その普及版もアルバン・ミシェルから十一月に出ることになつているが、第二册も一九四九年三月に特製版と普及版とが発行される予定である。

アルバン・ミシェル書店はクリスマスにいよいよインディアン紙一册本の「ジャン・クリストフ」を出すが、つずいて「魅せられたる魂」の一册も計画している。なお一九四九年末にはかねて企画を発表したロランの一九一四年か

ら一九一九年までの日記の抜萃の第一册を出す。「ヘンデル」と「道伴れ」の新版を出す予定である。

サブリエ書店では「ゲーテとベートーヴェン」の新版を出した。「エロイカよりアパショナタまで」、「復活の歌」「第九交響曲」は目下発賣中である。

「トルストイの生涯」、「ミケランジェロの生涯」、「ベートーヴェンの生涯」もアシェット書店より賣り出されているが、同書店はなお「過去の音樂家」、「今日の音樂家」「過去の國への音樂の旅」の新版も計画中である。

ストック書店では「ガンジーの生涯」、「ラマクリシュナの生涯」、「ヴィヴェカナンダの生涯」を発賣中である。

サロン・カレ書店には一九一二年から一九一三年の日記の抜萃である「ジャン・クリストフよりコラ・ブルニョンまで」の準特製本が在庫している。

一九三一年のガンジーとの会見に関するロランの日記の抜萃と、一八八七年のアンドレ・シェアレスに関する日記の抜萃とが、「フィガロ・リテレール」に発表された。

「ルヴュー・ド・レリート」誌には画家ガストン・ティエッソン宛のロマン・ロランの未発表書簡が出た。「ラ・ネッフ」にはガンジーのイタリア旅行に関する日記の抜萃が出、「レ・ズーヴル・リーブル」にはロランのリヒャルト・シュトラウスに関する想い出の抜萃が発表された。

「ロマン・ロラン賞」の一九四八年度分は結局授賞されない。パリ友の会は引続き一九四九年度の應募原稿を募集する。締切は一九四九年一月一日。

ベルギーの友の会は十一月に大会を開く。パリ友の会の会長ポール・クローデルの講演、ベートーヴェンの四重奏曲の演奏。この大会にはエリザベス女王も臨席される。なおベルギーでは「愛と死との戯れ」がコメディ・フランセーズの俳優により、「狼」がベルギーの劇團によつてアンヴェールとブラッセルとで上演された。

ポール・クローデルはエリザベス女王の個人的な招聘によつて十二月四日ブラッセルで「ロマン・ロランの宗教思想」という題で講演をする。（在パリの片岡美智氏はこの講演を聽いて中央公論六月号にその報告を寄せている。）このクローデルの講演の全文は「両世界評論」に、その一部はドイツで発行される「ロマン・ロラン年鑑」第一册 (Jahrbuch Romain Rolland, Kurt Weller, Konstanz) に発表される。ヴィルドラック夫人もベルギーの一文化團体の招きに應じて「ロマン・ロランの人と作品」なる講演をする。

スイスではいよいよ友の会がチューリッヒで結成され、Charley Guyot 教授が会長に就任し、十月九日の結成式にロラン夫人が赴いた。なおスイスからリヒャルト・シュトラウス宛のロランの書簡の寫眞コピーが送られてきた。

ベルリンのラング書店からは「内面の旅」の独訳が、チューリッヒのグーテンベルヒ書籍組合からはロランの一九一四—一九一九年の日記の抜萃の第一冊、ロランの「手記（メモアール）」（一九〇二年まで）の独訳版、「ペギー」の独訳版が出版される。

イタリアでは依然として数人の人が友の会の結成に盡力しているが、政治上のいろいろな障碍のために未だ実現の運びに至つていないようである。

オランダではロラン・ホルスト夫人のロマン・ロランに関する著書が出版された。同國の誇る世界的な女流詩人であり、トルストイやルッソーの傳記作者でもあり、ロランと同様に藝術と生活とが密接に結びついている偉れたヒューマニストの著書は、社会史や精神史の背景の前にロランの人間と作品とを見事に浮彫りにしている、とアムステルダム大学のガラス教授が新聞紙上で批評している。

イギリスではドニ・ソーラ教授がロランの「ペギー」をロンドン大学の講義目録に入れたと報じている。同大学のクライン教授も「音楽と文学」誌にロランに関する論文を執筆したり、ロランの書簡を蒐集したりしている。

デンマークのオールフス大学の比較文学教授クリューガーがゲオルク・ブランデス宛のロラン書簡の写眞コピーを送つてきて、ロラン夫人はそれに対してブランデスのロラン宛の書簡の写眞を送つた。ブランデス宛のロラン書簡の実物はコペンハーゲンの王立博物館に保管されている。

ノルウェーではヨーハン・ボーエルが自己宛のロラン書簡の写眞コピーを送つてきた。

ハンガリアではロランの「七月十四日」が上演されることになり、ブダペスト大学のベネデク教授が飜譯を完了した。

ポーランドでもルブリンのカトリック大学でモラウスキ教授によるロラン講座が開かれた。

ルーマニアではブラショフでロランに関心を持つグループが結ばれ、ブカレストでは友の会を結成する準備がすゝめられている。

ブルガリアではソフィアの友の会が書簡の写眞コピーその他に活動しており、ロランの「ジャン・クリストフ」その他の著作のブルガリア語譯も着々と出版され、講演会が幾つか催されている。

ギリシヤでもロランの主だつた作品のギリシア語譯が進められ、同國の偉れた詩人コスティス・パラマス宛のロラン書簡のコピーがその息女から送られることになつている。

オーストリアでは友の会の結成委員会が組織され、ウィーン國立音樂学校の校長フィッシャー教授がその委員長になつた。なお友の会のためにロブコヴィッツ宮の一室が提供された。

ドイツではエアランゲン、ニュルンベルグ、ヴュルツブ

ルク、オルデンブルグ、ミュンヒェン、ベルリン、ビーレフエルト、ハンブルクなどにそれぞれグループが結ばれているが、政治上の情勢から来たドイツ友の会として一つに纒つていない。エアランゲンのゲッツフリート教授は相変らず各地に講演して歩き、その著「ロマン・ロランとドイツ精神の甦生」は第四版を出すに至つた。各グループは講演に、ラジオ放送に、劇作品の上演に、活動をつづけている。とくにベルリンのマックス・ラインハルト劇場で「ロベスピエール」、ソヴィエト地区のゲラで「愛と死との戯れ」独語と露語の上演の計画がすゝめられている。なおゲラではロランとの文通者であつたヴァウエル博士が民衆大学でロランに関する講演をした。ドイツでは二つのロラン評傳が出版された。リューベックのヘルヴィックとドレスデン（ソヴィエト地区）のヴァイスのもので、後者は五万部印刷された。ヴァルター・パウエルの第三の評傳も近く出ることになつている。

アメリカではその後に新しいロラン書簡がハーヴァード大学で寫眞コピーがつくられようとしている。それはリュシアン・プライス、ワルド・フランク、アプトン・シンクレア、ヘインズ・ホームズなど宛のものである。アメリカ各地の大学では依然としてロランを対象とする研究論文の作成が盛んで、研究者は國内の研究者と連絡をとつたりパリの友の会に赴いて資料の提供を受けたりしている。

ラテンアメリカのウルグアイではロランの三周忌にモンテヴィデオでラジオの記念放送が行われ、市中の書店にはどこにもロランの著作のスペイン語訳が見られるという。

アルジェンティンでは「エステュディアンティナ」誌の一九四七年二月號が全誌を挙げてロマン・ロラン特輯號であつた。パリ友の会の有力な協力者レルジス氏はブエノス・アイレスやラ・プラタやロザリオでロランに関する講演会を開いた。同氏はなおチリーのサンチヤゴやメキシコにも招かれている。ブエノス・アイレスからシュテファン・ツヴァイクの「ロマン・ロラン」も出、同國の若い詩人たちの作品を集めた「リリューリ」という題名の詩集も出版された。モンテヴィデオでは「愛と死との戯れ」が上演され、同市で発行される一雑誌は一九四八年にロラン特輯号を出している。

インドからはカリダス・ナーグ、ガンジー、ミラベンなど宛のロラン書簡のコピーが送られてきた。ラビンドラナート・タゴールの息からは父親宛のものと、サンティニケタンに在るそのほかの書簡数通との写眞コピーを、ニューデリーの外務省およびパリのインド大使館を通じて友の会に寄せた。パリ友の会ではラマクリシュナ教團やロランと交通のあつた導師（スワミ）たちと、ロラン書簡について連絡をとるとともに、なおガンジーやネール宛のものの蒐集に努めているという。「ボンベイ・クロニクル」紙、「フィガロ・

リテレール」紙の「ロマン・ロランとガンジーとの談話」の連載を懇請してきた。同紙にはロランの手記「ペリブル」も掲載される予定である。ボンベイにロランの友のグループが結成されようとしている。

インドシナではフランスアジー誌の主幹ルネ・ド・ベルヴァルがサイゴンでグループ結成に乗り出すという。

日本については片山敏彦のロラン夫人およびマドレーヌ・ロランに宛てた二通の手紙が三頁に亘つて紹介され、小尾俊人の日本におけるロランの飜譯書の実狀の報告も詳しく傳えられている。「……三月三十一日の午後、幼い娘の梨枝子（十一歳）が私のところへ來て、『ラジオが今ロマン・ロランのことを話している。』と云いました。私は急いでラジオのある部屋に行きました。そして本当にロマン・ロランとその作品を説明しているのを聽きました。それは日本の青少年のための放送でした。放送原稿の筆者は松尾邦之助です。……」と始まる片山の手紙は、彼のロマン・ロランに関する講演や新聞雜誌への原稿執筆に就いて逐一語るとともに、小尾は過去から現在までに発行されたロランの日本語譯を具体的に挙げて示している。会報のこの日本に関する頁から受ける印象は、日本ではロランに対する関心が過去も現在も非常に強いこと、個人的には誠実で深い態度なロランに接している人びとがいるが、公けの機関は世界に貴重な文化財や意義の大きい事業に対してまだ十分の理解を示していないという事である。

中國では上海の著名な文藝評論家ウー・フェン（U. Feng）氏がすこぶる興味あるロランに関する著書を出したということであるが、その著書についても評論家についても詳細は分つていない。

なお前述の片山の手紙の中で紹介されているが、朝鮮では京城大学の哲学教授趙奎東が友の会の結成を企画している。

オーストラリアでもメルボルン大学レヴィ教授がパリの友の会と連絡をとつてオーストラリアのグループを結集しつゝある。

イタリアのトロント、ポーランドのワルソーとロッヅ、アメリカのケント大学、カナダの西オンタリオ大学で、ロランの研究論文が執筆されていることが報告されている。その題目は「ロマン・ロランと音樂」、「ロマン・ロランの戯曲作品」、「ロマン、ロランの一九一四年までの文学作品」、「ロマン・ロランの戯曲」、「ロマン・ロランの傳記的研究」である。

会報の本号にはロランのオリジナルとして、ロラン叢書（カイエ）の第一册のマルヴィダ・フォン・マイゼンブーク宛の書簡のうちから七通と、「ジャン・クリストフ」第七卷の「家の中」の一節とが、掲載されている。

（蛯原德夫）

日本・ロマンロランの友の会会報第一号に全文収録（一九四九・九）

二、「日本・ロマン・ロランの友の会」の設立（一九四九）

「日本・ロマン・ロランの友の會」設立の趣意

(Association Japonaise des Amis de Romain Rolland)

ロマン・ロランの人格と仕事とに對する共感をもつ人々の集まりとして、「友の會」を設立することにしました。「ロランの友の會」の本部はフランスのパリにあります。これは、ロラン夫人が、ロラン令妹マドレーヌ・ロランと共力して作られたもので、ロランの精神的遺産をまもりひろげることを目的とし、ロランへの共感を通じての、國際的理解と友愛とに努力し、またロラン文獻圖書館を完成しようとしています。日本の「友の會」は、フランスの會の支部ではありませんが、常にフランスの會と直接の連絡を保つて、文化的世界精神や創造活動の道を獨自に歩いてゆきたいと思います。そして現實の中に人間性の明るい道をひらく仕事に協力したく思います。交響曲的存在であつたロマン・ロランに對する共感の仕方も人によつて多元的であると思います。したがつて「ロラン友の會」もおのずから善意的個性を交響曲的に調和させる「生きたユニテ」の場であらしめたいと思います。御共感下さる方々の御入會を期待しています。

昭和二十四年六月

委員長　片山敏彦

副委員長　宮本正清

○役員

委員長　片山敏彦、副委員長　宮本正清、　委員　蛯原徳夫、小尾俊人、佐々木斐夫、高田博厚、上田秋夫

顧　問　安倍能成、天野貞祐、小宮豊隆、マルセル・ロベエル、宮本百合子、武者小路實篤、野上豊一郎、谷川徹三、辰野　隆、田中耕太郎、恆籐　恭、

評議員　蘆原英了、藤原　定、原田　勇、長谷川銕一郎、猪熊兼繁、河盛好藏、木村艸太、木村太郎、呉　茂一、丸山眞男、松尾邦之助、宮島綱男、守田正義、内藤　濯、中村眞一郎、野田良之、大野正夫、尾崎喜八、坂田徳男、笹本駿二、千田是也、新城和一、新村　猛、住谷悦治、武谷三男、土屋　清、辻　清明、渡邊一夫、矢田俊隆、山本安英、山内義雄、吉田泰司（ＡＢＣ順）

1949年　ヴィルドラック家のサロン
左　マリー夫人　右　ポール・クローデル（81歳）

1949年　ヴィルドラック家のサロン
左　ポール・クローデル　右　ヴィルドラック
いずれも片岡美智氏撮影

ロマン・ロランの友の會について

片山敏彦

『ジャン・クリストフ』の作者ロマン・ロランは一九四四年の暮にフランスのヴェズレーで歿した。パリにゐる舊友高田博厚から私への手紙によれば、ロランの報を知ると「敵も味方も大騒ぎで」彼の死の瞬間から「全部が味方になつた」その數ヶ月後に未亡人マリー・ロランはロマンの妹マドレーヌ（その俤は『クリストフ』の中のアントワネットに反映している）と共に故人の精神の遺産を守りひろげるために「ロマン・ロランの友の會」をパリに設立した　既に歐米のみならずエジプトとインドにも同名の會が作られていることは、ロランの人格と仕事との影響力がいかに普遍的で深いものであるかを示す。

ロラン夫人の書簡によれば、これは絶對に政治に關らない文化サークルとして人間友愛の立場から國際理解に努める會であつて、イデオロギーや形而上觀の相違を超越して、むしろできる限り多樣な傾向を含み、但しロランへの共感を基礎として、精神的と即實的と二樣の仕事を進めて行く。

ロラン精神の基本的な幾つかのものをロラン夫人は次のように擧げていられる——

一　世界精神（ユニヴェルサリスム）

一　人間的友愛感

一　正義への信仰と寛容の心

一　或る深い理想精神の感情あるひは宗教感情

一　宗教感情にもとづく精神獨立性

フランス本部の會長はポール・クローデル、副會長はジャン・カスーとヴィルドラック。委員はアラゴン、デュアメル、ルネ・ラルー、モンドールなどである。ラルーは文學史家であり、モンドールはフランス外科醫學の泰斗で著書には『質の人々』(ヴァレリー、デュアメルらについての論文集)があり、アランやヴァレリーが著書をさゝげている人である。

會員には、フランス科學會長ジョリオ・キュリー夫妻、彫刻家ブルデル未亡人、リヨン大學總長アンドレ・アリス、小說家アンドレ・マルロー、彫刻家高田博厚(ロランの胸像を作つた)などがいる。フランス各地方には友の會ができている。私の著『ロラン』の中にも出て來るジャン・ド・サンプリ(大統領リューベの孫)の弟、ピエール・サンプリは現在フランスの或る縣の知事になつているが、その縣の文化館は「ロラン文化の家」と命名された。昨日私が受取つたマルセル・マルチネ夫人の手紙(三月一日附)によると夫人はソーミュール地方で「友の會」を作つた。

イタリーはまだそういう會が成立するような氣運になつていないが、ロラン夫人はクローチェの入會を期待している。

北米の會員は物理學者アインシュタイン、パール・バック、音樂家ダリウス・ミローとブルノー・ワルター、反ナチスのドイツ作家フリッツ・フォン・ウンルーや英國の平和主義者ノーマン・アンジェル(北米在住)などである。ニューヨークとロンドンの「友の會」のため最も盡力しているのはシュテファン・ツヴァイク未亡人である。

スイスにはヘルマン・ヘッセが居り、オーストリアではパウル・ベッカーが會を設立しつゝある。フランス軍の一婦人士官はロランを題目とする學位論文をウィンナ大學に提出した。

ドイツでは最近『ドイツ精神の再建』を著したゲッツフリートがエアランゲン大學でロランに關する特別講義をしている。また、リルケ研究で有名なフランス人アンジェロスは『ロランとドイツ』といふ題の講演をベルリンその他でしたが、これはベルリンの知識層の要求に極めて良くこたえるものであり、連合軍の中にも多くの興味を起した。

現在國際ペン・クラブ副會長ドニ・ソーラは、ロンドン大學でロランを研究課目にしていると報告している。

ベルギーのロラン友の會々長はエリザベート女王である。女王からマリー・ロランへの手紙に——

「私の名をロマン・ロランの名に結ぶことは私の幸福であり誇りです。この會長となる私の受諾を、どんな理由もどんなエチケットも妨げはしません。ロマン・ロランに對する私の讃嘆と友愛(アミティエ)とは大層大きなものでした。」

オランダの友の會の先頭には、七十八歳のアンリエット・ロラン・ホルスト夫人がいる。現在ロランに關する著述を準備しているボワスヴァンの言葉によれば「アンリエット・ホルスト夫人は『オランダのロマン・ロラン』というべ

き人であり、彼女はロランと同じような社會的宗教的なたたかいを續けた人であり全西歐の政治的・倫理的生活の中で積極的役割を演じて來た。」

南米では、フランスの評論家ジャン・ゲーノがロランについて講演をし、「ロランの友の會」のことを南米に知らせた。インドではカルカッタ大學のナーグ教授とタゴールの令息とが友の會を作つたが、タゴールの令息は、ロラン夫人の承諾のもとに、ラビンドラナートとロランとの交通を出版した。ラーマクリシュナ教團からはスワーミ・シデスワラナンダが入會した。

*

フランスの友の會は、ロランの鄉里クラムシーとパリとに「ロラン文獻博物館」を作つた、これはやがて「生きた文化機關」たる學館になる計畫である。ロランの「日記」は全部パリ國立圖書館が所藏し、萬一の原本消失に備えて全ページを寫眞フィルムに寫す。

世界に行き渡つているロランの手紙のフィルムや寫眞やコピーが夫人の手許に集められて、やがて編集された書簡集が出版されるので、既にフィルムが數千通各國からとゞけられたという。アメリカのハーヴァード大學などではフィルム作製の多額の費用を大學自身が支出している有樣である。最近コロンブス傳を書いたモリソン教授がそのために盡力している。プリンストン大學の諸教授が「友の會」に入會し、また他の大學では學生がロラン研究會をも作つた。

それでロラン夫人は、日本にあるロランの手紙のフィルムまたは寫眞またはコピーをもできるだけ完全に入手したいと書いて來られた。先日東京毎日にそのことを書いたところ、既に倉田百三氏夫人その他數人の方から懇篤な教示を得て深く感謝している。日本の人々に宛てた書簡集が一卷となつて出版されるはずである。

フランスの「友の會」は會誌を發行しており、既に第四號まで出たこの最近號に、ロランから私宛の一九二五年の長文の手紙が發表されている。

日本の「友の會」は、フランスの會誌の内容を傳えることを主にする機關誌を出すことから着手したい。そして外國の友らの仕事や作品の本質をそれぞれ紹介してゆきたい。ロランへの共感にもとづきながら、全世界の最高の文化的善意と直接に交流することによつて我々の文化的善意を眞正に育てたい。これは日本の未來にとつて重要なことであろう。フランス、アメリカ、ドイツでロラン作品集の出版が進められている。日本のロラン全集も今後は「ロランの友の會」の重要な仕事の一つとなる。

「日本・ロマン・ロランの友の會」規約

一、總　則

第一條　本會は日本・ロマン・ロランの友の會と稱する。

第二條　本會の事務所は東京都文京區春木町一丁目二二番地に置き、玆を本部とし、會員十名以上の都市には支部をおくことができる。

二、目的及事業

第三條　本會はロマン・ロランの思想、藝術、人格への共感に基づき、ロランの理想精神たる汎ユマニスムの理解と普及に關する活動を行うことを目的とする。

第四條　本會は前條の目的を達成するため左の事業を行う。

(1) 機關誌「ユニテ」を刊行する。

(2) 時に應じて講演會・音樂會・展覽會などを開催する。

(3) フランスに設立されるロラン博物館のためにパリの友の會と協力してロランに關する各種資料の蒐集を行う。

(4) 日本にロラン圖書館を設立して、ロランの著作飜譯その他ロランに關する一切の文獻、出版物を蒐集する。

(5) 世界各國のロマン・ロランの友の會との相互提携によつて、各民族文化間の理解を深めるために協力し、前述の資料蒐集に互に便宜を圖る。

(6) ロラン全集の日本語飜譯と刊行の監修を行う。

(7) その他必要と認められた仕事を行う。

三、會　員

第五條　ロマン・ロランの精神と方向に共感をもつ者で入會を希望するときは、委員會の同意を經て會員となることができる。

第六條　會員になろうとする者は別に定める入會申込書に記入の上、委員會に申込まなければならない。

第七條　會員は委員會の定めた年額二百圓の會費を納めなければならない。

第八條　本會の會員は機關誌「ユニテ」の無料配布を受け且つこれに投稿することができる。

第九條　本會の會員は本會主催の各種の會合催しに出席することができる。

第十條　會員はロマン・ロラン全集の購讀について割引その他特別の便宜を受けることができる。

四、機　關、會　計

第十一條　本會に左の役員をおく。

(1) 委員若干名委員長、副委員長を各一名づつ選出する。

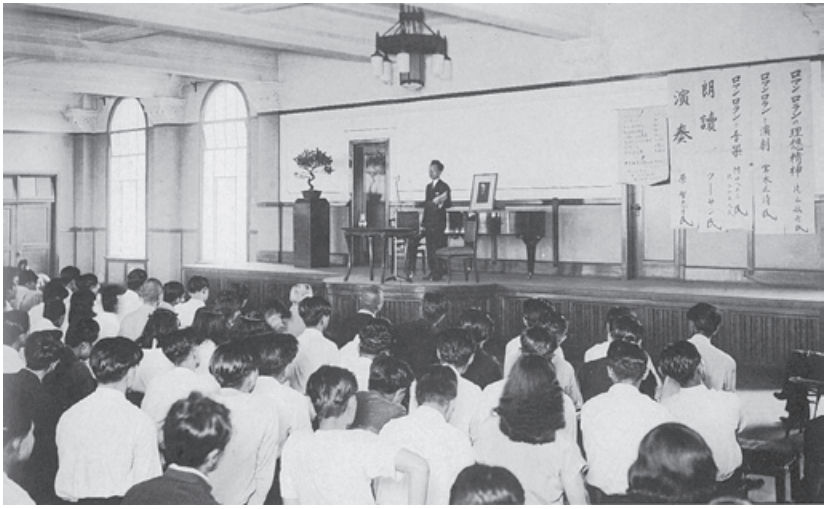
(2) 顧　問　若干名。

(3) 評議員　若干名。

第十二條　委員及び評議員は總會において選任する。

委員長副委員長は委員會において互選する。

顧問及び評議員は委員會が委囑する。



上「ロマン・ロランの友の会」（京都）第 1 回講演と音楽会（1948 年 6 月 12 日、京都大学講堂）

下「ロマン・ロランの友の会」創立記念・講演と音楽（1949 年 6 月 4 日、東京神田共立講堂）前列左より青木やよひ、清水丈男、宮本正清、植野豊子、片山敏彦、園田高弘、矢代秋雄、矢田俊隆夫人、後列左より高橋正衛、2 人おいて新村猛、1 人おいて佐々木斐夫、蛯原徳夫、1 人おいて矢田俊隆、北沢方邦、守田正義、小尾俊人

三、「友の会」発足時（一九四八―五一）

〔一九四八年の動き〕

ロマン・ロランの友の會

第一回　講演と音樂會

Ⅰ

ロマン・ロランの理想精神……　片山敏彦
ロマン・ロランと音樂……　マルセル・ロベエル
ロマン・ロランと演劇……　宮本正清

Ⅱ

演奏……　Ⅰ　バロック小品　原智惠子
Ⅱ　ベートォヴエン　ソナタ op.57 ヘ短調

一九四八年六月十二日（土）午後一時
京都大學講堂
主催　**ロマン・ロラン友の會・關西日佛學館・京大同志會・京都市**

注意　このプログラムを以て入場券に代へます

〔一九四九年の動き〕

四月十七日「敗れし人々」（宮本正清訳）脚色兼演出・兵藤正之助　主催・関西文学、後援・ロマン・ロラン友の会、関西日佛学館

六月四日　発會式　片山、宮本両氏を中心にかねて準備中のところ、漸く会の機構が整ひ、委員、顧問、評議員等の人選も終了したので、六月四日、神田、共立講堂に於いて創立記念の講演と音楽の會を開催した。設立の趣意、規約、及び役員の顔ぶれは別紙印刷物の通りである。尚、当日の参会者は委員、副委員長、役員数名の他、一般来場者は、約六百名で、ロランの偉大な思想への熱誠の下に集ったこの会は、眞摯な共感に満されて無事に終了した。

即日入会者は三十六名で、この中には東京以外の近縣各地からの参加者も数名数へられた。

（プログラムの内容）

講演

ロマン・ロランの友の會の使命　片山敏彦

メッセージ　マルセル・ロベエル

師はわれわれに語る……　渡辺一夫

ロマン・ロランと女性　宮本正清

ロマン・ロランと音楽　佐々木斐夫

音楽

Ⅰ　ヘンデル　ソナタホ長調　ヴァイオリン　植野豊子

ピアノ　矢代秋雄

Ⅱ　ベートオヴェン　ソナタ　op.78　嬰ヘ長調

ソナタ op.111　ハ短調

ピアノ　園田高弘

Ⅲ　ベートオヴェン　ソナタ op.24（春）ヘ長調

ヴァイオリン　植野豊子

ピアノ　矢代秋雄

尚、この発会式に関して、朝日、讀賣、讀書各新聞がそれぞれの立場からとり上げ、記事を掲載した。

九月　會報第一号発刊　世界各國の友の會の状況を詳細に報告した、B6、二十二頁のパンフレットを発行、会員に頒布した。

十月二十二日　朝日新聞主催「ゲーテ二百年祭記念講演会」

朝日新聞社講堂に於いて催された本講演會第一日に片山敏彦氏は「ゲーテとロマン・ロラン」と題する講演を行い多大の反響をよんだ。

〃支部の動き〃

仙台　東北大学英文学部の尽力により九月二十四日同校講堂に於て、講演と音楽の会を催した。

講演

支部の思想的意義

支部長、法学部教授　木村亀二

ロラン友の會の世界的動静　蛯原徳夫
愛と死との戯れについて　有永弘人
ロマン・ロランの交響曲的精神　片山敏彦

この他、土居光知氏は自発的に演壇に立たれ、英文学生の努力でロランの精神が普及されてゐる事実は、日本の文化的視野が世界的になった事であると感激的な挨拶をされた。

音楽

ショパン　前奏曲変ニ長調　ポロネーズ op.26 ノ1
スケルツォ op.31
ピアノ　石浜妙子

ハイドン　絃楽四重奏ニ長調 op.76（ラルゴ）
ベートオヴェン　絃楽四重奏ニ長調 op.8（セレナーデ）　仙台室内楽協會

散会後、片山氏の宿舎針久旅舘に土居、木村、有永、蛯原、諸氏及び支部会員が集り和やかな懇談会がなされた。

その他　会員十名以上を擁する長野縣では支部結成の動きがあった。

〔一九五〇年の動き〕

一月八日　東京日佛会舘

片山、宮本、蛯原、小尾、田内、木村、藤原諸氏等御出席の下に、会員約五十名と共に和やかに懇談した。

小尾氏の開会のことばで始り、マルセル・ロベエル氏の興味深い挨拶があり（宮本正清氏通訳）片山氏から、世界友の會のその後の動き及びこの会を親しみ深いものにしたい旨、お話があり、次に宮本氏は、御自身の経験からこの会を、各々のかくれた善意の触発の場であらしめたいと感動的に述べられた。蛯原氏からは「ユニテ」の刊行のおくれてゐる理由を述べ会員に諒承を求めるお話があり、つづいて木村艸太氏は、ロランの作品がはじめて訳された当時の回想談を語られた。後、宮本氏の名司会で会員の自己紹介があり、各自、はじめてロランを知った当時の感激等を語り合い、なごやかな午後を過した。最後に筧潤二氏によりベートオヴェンの一〇六番のソナタが演奏された。

一月十一日　関西日佛学舘（第四回）

講演と報告　宮本　正清

朗読「愛と死とのたわむれ」　会員有志

三月四日　名古屋金城学園講堂

名古屋日佛協会、日本ロマン・ロランの友の会主催、講演と音楽の會

一、會長挨拶　勝沼精蔵

二、創立経過報告　太田三郎

三、メッセージ　マルセル・ロベエル

四、ロマン・ロランの思想芸術　宮本正清

音楽　ピアノ独奏　園田高弘

Ⅰ　ベートォヴェン　ソナタ op.78 嬰ヘ長調

Ⅱ　ベートォヴェン　ソナタ op.57 ヘ短調（アパショナータ）

その他

三月十六日　十八、於高知大学

「ロランについて」「フランス文学について」

宮本正清

〔一九五一年の動き〕

五月七日　会の発展と会員相互の交流のための懇談と討論の会

会員中の一部有志によって自発的にこの会が企画され、五月七日一時半より大井町、都大附属工高で会員その他約四十名が参集した。

片山、守田、蛯原、大久保氏等の出席があり、会の運営につき活溌な意見の交換があった。最後に各自の簡単な自己紹介があり、終ってベートオヴェンの op.110 をレコードで観賞した。

七月

会員名簿作製

かねて待望されていた全国会員の住所録をかねた名簿を作製、各会員に送附した。整理の都合上六月末現在をもって記録したが、それによると、全会員数は委員長、副委員長各一名、委員六名、顧問十二名、評議員三十名、及び一般会員二百六十一名、計三百十一名となってゐる。

府縣別では東京が最も多く八十九名で、京都、大阪、長野がこれに次いでゐる。

七月二十三日　友の会の集い、日仏学舘において。

京都　宮本正清氏を中心に活溌にロランの精神の普及が行はれてゐる。主なる催しは次の通りである。

四月十七日　日佛学舘

関西大学主催、友の会、日佛学舘後援「敗れし人々」上演。

十二月十日　日佛学舘

講演　新村　猛、宮本正清

ピアノ　玉城嘉子

ロラン関係文献展覧

現在までに出た文献

世界一月号「平和のためのたたかい」新村　猛

ゴルゴダ第二集「冬の薔薇」片山敏彦

日本評論三、四月号「過去よさらば」（闘争の十五年より）新村　猛訳

世界四月号「ロマン・ロランの民衆演劇論」宮本正清

婦人公論三月号

人間四月号「友愛のための格闘」シュテファン・ツヴァイク（片山敏彦訳）

中央公論六月号「ロマン・ロランの最後の日々」ルネ・アルコス

女性改造二月号「生きているロマン・ロラン」加藤周一

増補版「ロマン・ロラン」片山敏彦

現代フランス文学論（改造社）吉江喬松

國際反ファッシズム文化運動フランス篇（三一書房）新村　猛

反戦作家群像　内山　敏

現代フランス文学論（学生書房）　加藤周一
現代フランス演劇論第二揖（新月社）
ロマン・ロランと「七月十四日」　片山敏彦
働く婦人二十九号、三十号（二回）「魅せられたる魂物語」林小枝子
新小説「聖職者と黒い土」ロランとコンミュニズム　内山　敏
婦人の友　四、五、六、七、八号　「母」「愛・平和」内面の旅路より　（片山敏彦訳）
世界文学二十二号　日記「ガンヂーとの対話」　髙田博厚
高原第九輯　ロマン・ロラン特輯
思潮第四巻　ロマン・ロラン特集号

〔友の会以外の動き〕

一九四六年七月　「愛と死との戯れ」（片山敏彦訳）三幕
俳優座公演、青山杉作演出
小沢　栄、村瀬幸子、千田是也他　東京有楽座
一九五〇年　映画「また逢う日まで」（「ピエールとリュース」翻案）
今井　正監督、久我美子、岡田英次主演　東宝株式会社
一九五一年五月十八・十九日　「愛と死との戯れ」（片山敏彦訳）
劇団自由舞台、坪松　裕演習　早稲田大隈講堂
一九五一年八月一日～三日　「愛と死との戯れ」（片山敏彦訳）三幕

俳優座公演、青山杉作演出
小沢　栄、村瀬幸子、信　欣三他　大阪朝日会館
一九五三年四月十九日「時は来らん」（片山敏彦訳）三幕
はちの会公演、神津晁生演出　ロマン・ロランの友の会後援
東京芝中労委会館

映画「また逢う日まで」ガラス越しのキスシーン

「愛と死との戯れ」俳優座公演

會員住所錄

1950年6月

日本・ロマン・ロランの友の會
東京都文京區泰木町1丁目22
(83) 0928

99 青木 崇 會社員 千葉市本町ノ二四六（九六二）

91 大崎 尚子 能楽師 能楽研究所 能楽師市川静町ノ八〇

92 村松 章 學生 市川市鬼高四五五

東京都

100 青井 雅和 學生 杉並區天沼ノ六二

101 青木やよひ 詩人 ヴァンヌ駅 豐島區巣鴨ノ六

102 安部 幸綾 詩人 杉並區天沼ノ一五五

103 天野 恒雄 學生 藤井方 目黒區碑文谷川奥澤町五ノ八

104 新井 潤子 ナシ 穂田孫寺島町五五

105 荒木 澄子 ナシ 目黒區中根町五五（四二八八）

106 飯島 和男 學生 杉並區井荻 東京女子大（西寮）

107 井口 正子 學生 杉並區井荻町五五（四二八八）

108 石 不 欣 學生 中野區鷺宮ノ六

109 石田 幸枝 教師 世田谷區下馬町ノ八

110 稲葉 嘉雄 公務員 世業復興局公園内 日本橋區小網町ノ四

111 井原 美徐子 學生 矢板方 玉川奥澤町ノ八一

112 内山 敏 新聞記者 大田區田園調布ノ一四（四二八五）

113 平治山 鶴岡 會社重役 杉並區天沼ノ一五五

114 眞田 武夫 東大講師 文京區湯島新花町八

115 大久保和郎 書評員 豐島區雑司ヶ谷二丁目一〇六

116 大谷 鳴翠 學生 大田區碑文谷一ノ二八五（東邦寮四〇五）

117 大槻金之助 一ツ橋大學教授 武蔵野市吉祥寺一〇〇

119 大橋 篤西郎 學生 豐島區巣鴨宮前町三五六 **根本方**

368 深城 嘉子 ピアニスト 同

337 土屋 美智子 上京區出水曾根光院内

368 辻 和子 學生 左京區日ヶ内（知恩寺）
學生寮内（上京区）

369 鳥井 晴子 歌集家 左京區大黒町石町六 **鳥居方**

370 鳥井 張三 京都放送局 同

371 中瀬 吉和 管楽家 上京區堀川通出水上ル（北区二）

372 西井 暎夫 會社員 東山區山科北花山西ノ野町四

373 藤島 良子 聲楽家 左京區大黒町石町六

374 堀江 千代 時事社（文） 上京區竹の内（沙門町）
研究室 岩倉方 大和郡山市本町六（奈良西三三）

375 松浦 ヨシエ 左京區下鴨本町六

376 松下 富士子 ナシ 上京區平野殿本町六（北区一）

377 鈴田 豊 上京區上賀茂雨大路町

378 雨大路 換一 學生 伏見區深草鍋武町六

379 奥野 正春 學生 上京區平野殿本町四（北区一）

380 桃谷 厳 下京區木屋町四條下ル

381 森川 猛 詩人 學生

東都府

390 足立 光子 官吏 國際山市岡ノ上岡ノ上
貴使館内

391 磯貝 勇 高校教師 何思路 麻布町上野

392 稲葉 俊夫 會社員 青山郵便局 郵便局長殺害事件
會社寮 男子寮

393 横田 勝俊 教師 同 田町

394 河野良太郎 會社員 同 青山郵便局宿舎

Tokyo, le 19 déc. 1954.

Les amis de R. R. se sont réunis ce soir autour de Katayama qui a achevé la traduction de Jean-Christophe.

et en souvenir de
„L'Ame enchantée"
par Miyamoto

Masakiyo Miyamoto

Toshihiko Katayama

Toshito Obi

Seizo Janouchi

Masayoshi Morita

Setsu Kawahara.

Ayao Sasaki.

Minoru Mita.

Mitsuo Yamaguchi

Yoshiko Shimizu

Shigeru Shimizu

Mitsuhiko Murakami

Hasegawa Sizo

Fujiwara Sane

Kihachi Ozaki

Yayoki Aoki

Mme Takahashi

Hiroko Tominaga

ロマン・ロラン夫人のための寄せ書き　1954 年

四、ロマン・ロラン没後十年（一九五四）、昭和二十九年

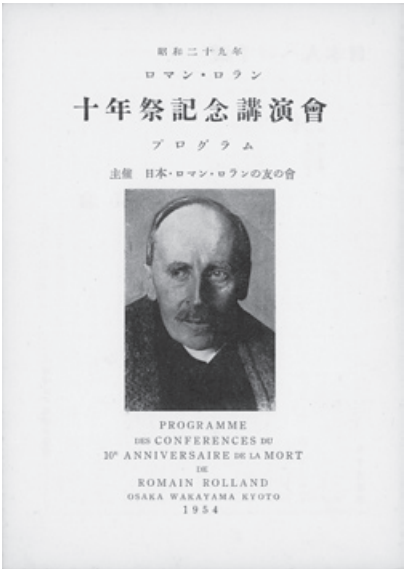
ロマン・ロラン十年祭記念講演会は、友の会主催で行われました。（大阪、和歌山）

平　安

長い旅を終ったロマン・ロランは故郷の思い出のふかい地に、静かで明るいブレーヴの村の小さい會堂の横で心安く眠っている。長さ二メートル二〇センチ、巾一メートル一〇センチの一枚の石が土に直接におかれて、中央にROMAIN ROLLANDの二字だけが刻まれている。何という床しい簡素さだろう！　側には赤いジェラニウムが三輪咲いていた、九月二十五日、澄みきった秋の光のもとに。

右手に並んだ三つの石がロマン・ロランの會祖父母たちである。ロランはこの小村を、とくに鄙びたこの墓地を好んだ。マロニエの大木が茂っている。ロマン・ロランはここに眠り、人々の精神と心情のなかに生きる。

宮本正清


昭和二十九年
ロマン・ロラン
十年祭記念講演會
プログラム
主催　日本・ロマン・ロランの友の會

PROGRAMME
DES CONFERENCES DU
30e ANNIVERSAIRE DE LA MORT
DE
ROMAIN ROLLAND
OSAKA WAKAYAMA KYOTO
1954

大阪　朝日新聞社講堂
十一月二十一日（日）午後一時半

挨拶　大阪市立大學助教授　蛯原徳夫

メッセージ　ロマン・ロラン夫人

ロマン・ロランとブルゴーニュ　關西日佛學館館長　シャルル・グロボワ

世界平和の理想と現實　大阪市立大學學長　恆籐恭

ロマン・ロランとヘルマン・ヘッセ　日本・ロマン・ロランの友の會委員長　片山敏彦

ロマン・ロランが與えるもの　大阪市立大學教授　宮本正清

主催日本・ロマン・ロランの友の會
大阪支部
後援朝日新聞大阪本社

和歌山　商工會議所講堂
十一月二十二日（月）午後六時半

メッセージ　ロマン・ロラン夫人

「ジャン・クリストフ」の思想的構造　大阪市立大學助教授　蛯原徳夫

ロマン・ロランとヘルマン・ヘッセ　日本・ロマン・ロランの友の會委員長　片山敏彦

ロマン・ロランが與えるもの　大阪市立大學教授　宮本正清

主催日本・ロマン・ロランの友の會
和歌山支部
後援朝日新聞社和歌山支局

五、　ロマン・ロラン生誕百年祭（一九六六）

ロマン・ロラン（一八六六年一月二十九日クラムシー―一九四四年十二月三十日ヴェズレー）生誕百年祭は、講演会、音楽会、劇の上演など、が行われました。なお、このとき、マリー・ロマン・ロラン夫人も参加されております。

ロマン・ロラン生誕百年祭委員会

名誉会長　ルイ・ド・ギランゴー　（駐日フランス大使）

名誉委員　荒　正人

ジャン＝クロード・クルディ

土居光知

ベルトラン・デュフールク

日高六郎

平沢　興

寿岳しづ

加藤周一

木村亀二

木村　毅

木村太郎

久野　収

ジャン＝ミシェル・ルクレール
丸山真男
松田道雄
森　恭三
野上弥生子
大仏次郎
大塚金之助
モーリス・パンゲ
ジャック・ロベール
千田是也
芹沢光治良
杉　捷夫
住谷悦治
谷川徹三
フランソワ・トゥーサン
アンドレ・トラベール
恆籐　恭
宇野重吉
宮本正清

実行委員長

（ＡＢＣ順）

実行委員

青木やよひ
蛯原徳夫
波多野茂弥
北沢方邦
野田良之
小尾俊人
佐々木斐夫
新村　猛
高田博厚
上田秋夫
山口三夫
吉田秀和

後援

フランス大使館
外務省
文部省
ＮＨＫ
中央公論社

協賛

河出書房
劇団民芸

（ＡＢＣ順）

みすず書房
新潮社

連絡先
東京都文京区本郷三
みすず書房内
Tel 八一四–〇一三一

本年はロマン・ロランの生誕百年の年にあたります。この年を記念して世界各国で盛大な祝賀行事が行なわれつつあり、とくにフランスでは、アンドレ・マルロー文化相の主宰のもとに、アラゴン、モーロワ、モーリャック、モンテルラン、カスー、ゲーノその他各界を代表する人々を委員としていろいろの催しが行なわれています。

ロランは、日本の読者にもっとも親しまれている作家の一人であるばかりでなく、一九一〇年に故高村光太郎によって紹介されて以来、つねに日本の若い世代にとって親しい伴侶であり、人生への励ましでありました。

私どもはこの年を意義深いものにすべく、講演会、音楽会、劇の上演などの記念行事を催して、ロランの精神の高揚につとめたいと存じております。たんに過去への回想ではなく、未来への窓として、日本の将来のための一つの記念碑たらしめたいと願うものであります。

皆様の御協賛・御参加を得られますならば幸いでございます。一九六六年八月

ロマン・ロラン生誕百年祭委員会

（東京都文京区本郷三–十七　みすず書房内　Tel 八一四–〇一三一）

§記念行事§

Ⅰ　講演会

（a）十一月二十一日（月）六時半より　朝日生命ホール（東京・新宿西口）
挨拶：宮本正清
講演者：大仏次郎、高田博厚、加藤周一、宮本正清

（b）十一月二十五日（金）五時半より　大阪府立図書館（中ノ島）

（c）十一月二十六日（土）一時半より　京都会館会議室（岡崎）
講演者：住谷悦治、宮本正清他

Ⅱ　劇の上演

（a）劇団民芸によるロマン・ロラン「狼」の上演
十一月二十五日（金）六時十五分より農協ホール（大手町）
演出　早川昭二、訳　波多野茂弥
配役　ケネル　鈴木瑞穂　　ツーリエ　波多野憲　　ヴェラ　佐野浅夫
ドアロン　芦田伸介　　シャプラ　嵯峨善兵　　ヴィダロ　石森武雄

ビュケ　梅野泰靖　　J・アマブル　小野文彦　　農民　鶴丸睦彦他

（b）京都ドラマ劇場による「ピエールとリュース」の上演

十月中の毎金曜日　京都山一証券ホール（四条通り）

宮本正清訳　波多野茂弥・小島達雄脚色

Ⅲ　記念音楽会

ベルリオーズ　劇的交響曲「ロメオとジュリエット」全曲（日本初演）

十一月二十七日（日）六時半より　東京文化会館大ホール（上野）

出演　管弦楽　　ＮＨＫ交響楽団

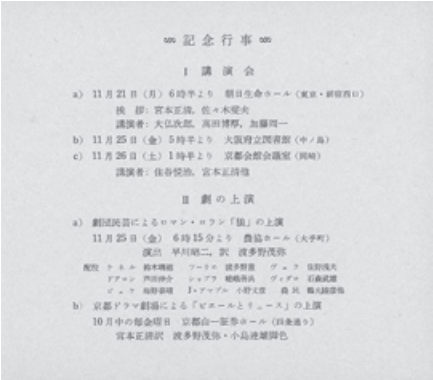
指揮　　若杉　弘

合唱　　東京混成合唱団、二期会合唱団

独唱者　　戸田敏子、中村健、高橋修一（交渉中）

フランスの作曲家の中でロランが最も愛したベルリオーズ、そしてその最高傑作と讃えた「ロメオとジュリエット」――あまりのスケールの大きさゆえに上演の折をえなかったこの劇的交響曲を、ＮＨＫ交響楽団をはじめ日本における最高のスタッフで初めて上演する機会を得ました。

『ロマン・ロラン誕生百年祭』プログラム



記念行事

Ⅰ 講演会

a) 11月21日（月）6時半より　朝日生命ホール（東京・銀座西口）
挨拶：宮本正清，佐々木愛夫
講演者：大仏次郎，高田博厚，加藤周一

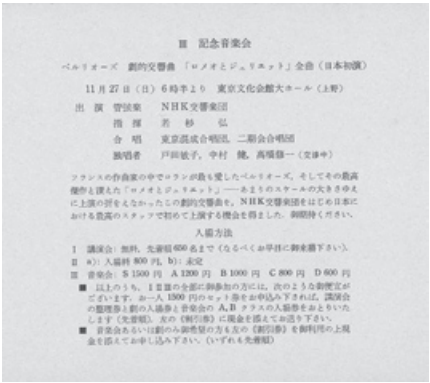
b) 11月25日（金）5時半より　大阪府立図書館（中ノ島）

c) 11月26日（土）1時半より　京都会館会議室（岡崎）
講演者：佐谷悦治，宮本正清他

Ⅱ 劇の上演

a) 劇団民芸によるロマン・ロラン「狼」の上演
11月25日（金）6時15分より　農協ホール（大手町）
演出　早川昭二，訳　波多野茂弥
配役　ケネル　鈴木瑞穂　ブーラン　波多野茂　ヴェック　佐野浅夫
ドアロン　内田静夫　シュプラ　蟻崎英治　ヴィゴー　石森武雄
ビュテ　福野泰明　ドゥマルル　小野文雄　森氏　梅本錦彦他

b) 京都ドラマ劇場による「ピエールとリュース」の上演
10月中の都合良日　京都会一至善ホール（四条通り）
宮本正清訳　波多野茂弥・小島迷雄演色



Ⅲ 記念音楽会

ベルリオーズ　劇的交響曲「ロメオとジュリエット」全曲（日本初演）

11月27日（日）6時半より　東京文化会館大ホール（上野）

出　演　管弦楽　NHK交響楽団
指　揮　若　杉　弘
合　唱　東京混成合唱団，二期会合唱団
独唱者　戸田敏子，中村　健，高橋修一（文学座）

フランスの作曲家の中でロランが最も愛したベルリオーズ，そしてその最高傑作と讃えた「ロメオとジュリエット」――あまりのスケールの大きさゆえに上演の許せなかったこの劇的交響曲を，NHK交響楽団をはじめ日本における最高のスタッフで初めて上演する機会を得ました。御期待ください。

入場方法

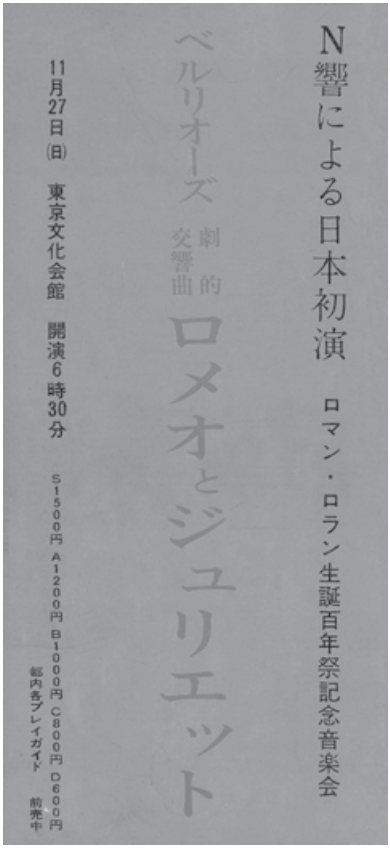
Ⅰ　講演会：無料，先着順600名まで（なるべくお早目に御来場下さい）。
Ⅱ　a)：入場料 800 円，b)：未定
Ⅲ　音楽会：S 1500 円　A 1200 円　B 1000 円　C 800 円　D 600 円
■ 以上のうち，Ⅰ Ⅱ 第の全部に御参加の方には，次のような割安がございます。お一人 1500 円のセット券をお申込み下されば，講演会の聴理券と劇の入場券と音楽会の A,B クラスの入場券をおとりいたします（先着順）。左の《例引券》に現金を添えてお送り下さい。
■ 音楽会あるいは劇のみ御希望の方も左の《割引券》を御利用の上現金を添えてお申し込み下さい。（いずれも先着順）

ロマン・ロラン生誕百年記念　講演風景

演劇「狼」のプログラム

「狼」の上演風景

「ロメオとジュリエット」
チラシ



驚くべき作品

ロマン・ロラン

もし天才というものが創造力だとするならば、ベルリオーズほどの天才は、世界じゅうを探しても、私は四人か五人を超えるとは思わない。そして、ベートーヴェン、モーツァルト、バッハ、ヘンデル、ワーグナーという名を挙げた場合、私は音楽芸術という点で、ベルリオーズを凌ぐものは一人としてない。いな、彼に匹敵するものすら、一人としてない、と認める。かれは音楽家ではない。かれは音楽そのものなのだ。

「ロメオ」――まことに驚くべき作品。「純粋芸術の神殿が聳え立つ不思議の島」と自らいう。この音楽のすばらしい自由さ、情熱的に生き生きした一個の魂の透明で滑らかなヴェエルは、〈有名な〈ロメオの悲しみ〉や〈カピュレットの祭り〉のような頁のみに限られない。リズムの自由さ。メロディの自由さ。この音楽の深い独創性を捉えれば、この音楽の受けた陀然たる敵意も、理解できるだろう。

主催 ロマン・ロラン生誕百年祭委員会
東京都文京区本郷3－17 みすず書房内 Tel. 814－0131

後援 フランス大使館／外務省／文部省／NHK

協賛 中央公論社／河出書房／みすず書房／新潮社

マネージメント 東京混声合唱団
東京都新宿区須賀町14 Tel. 359－9755

「ロメオとジュリエット」 音楽会風景

出演　指揮　若杉　弘　歌唱監修　古沢淑子
独唱　戸田敏子　中村　健　高橋修一
合唱　東京混声合唱団　二期会合唱団　日本合唱協会
管弦楽　NHK交響楽団

「ロメオとジュリエット」について

これは劇的交響曲と銘され、大編成のオーケストラ、一〇〇人以上の合唱団、三人の独唱者など合計二七〇名を要するという大規模なものであり、そのスケールの大きさはベートーヴェンの「第九交響曲」を思わせるものである。最高の傑作とされながら日本で全曲上演が実現しなかったのはもっとも大きな理由にもう一つ、かつて私自身したフランスの名指揮者ジャン・マルセルとその夫人が、かなり来きなかったという、今回、ロラン百年祭に当り、各り曲の協力をえてNHK交響楽団をはじめ、最高のキャストによって実現されることになったものである。

テーマは言葉の通り、レネイクスピアの同名の名作によっているが、宝石のごとき管弦楽法、情熱的な旋律、壮大な構成を特徴とするベルリオーズにこれほどふさわしいテーマはない。しかもオペラでは表現できない音楽の純粋さと、交響曲ではまだ表現できない劇的迫力を結びつけるという画期的な成功によって、ベルリオーズはこの曲において音楽に新しいジャンルを打ちたてたのである。

全体はプロローグと四つの部分からなる。プロローグではオーケストラと合唱と独唱者が劇的雰囲気と筋物語り。次の三つの部分ではオーケストラだけが合唱者が若い恋人たちの「愛の夢」を物語る。最後の部分にいたり再び合唱と独唱者が加わり、悲劇的な結局をうたう。共に相思ローレンスがモンタギュ家とキャプレット家の間に憎しみを越えた和解を結ばせる。これはベートーヴェンが「第九」において実現した「人類の友愛と結合」を、形を変えて再現しようとしたものである。

一時間四〇分にわたるこの大曲は、その美しさと壮大さによって聞く人を圧倒し魅了せずにはいないであろう。

私のもっとも好きな曲　吉田　秀和

大分昔のことになるが、その頃日本にいたローゼンルトックがベルリオズのジュリエットを、もちろんNHKでやったが、なんといい天上的な美しさだろうと感嘆したことがある。それも聞いて、なんとすばらしい天上的なそれ自身、これはベルリオズの曲のなかでも、私の最も好きな曲となった。ロランのいう「愛の夢」の美しさ、これほどまでに表現されている曲はほとんどないと言ってもよいのに、日本ではこんなすばらしい曲がなぜ演奏されないのか、ということが、ここ、どうの全曲の演奏はとていうので、私は待ち遠しい思いでいるのである。

指揮者として念願の曲　若杉　弘

指揮者になって演奏に一度は振ってみたい、と念願していた曲なので、お話がかかったときは、喜びとつつしみ深かったときは、喜びとつつしみ深かったが、自分の全力をかけてやってみたい。

11月27日(日)　東京文化会館　P.M. 6時30分　入場料　S1500円　A1200円　B1000円　C800円　D600円

指揮　若杉　弘
古典音楽作家、現在活発な指揮活動を行なっている。

アルト　戸田敏子
オペラ・オラトリオを得意とし、モンテサンセティ「ポッペアの戴冠」で主演するなど、アルトの第一人者として知られる。現在桐朋学園大助教授。

テノール　中村　健
古典声楽科卒。国際音楽コンクール第3位受賞。オーケストラの作品をはじめ「ボエーム」など多数のオペラに出演。現在若手で最も信頼の厚い歌手。

バス　高橋修一
現在古典声楽科大学院に在学中。ドイツ、ベルリン国立オペラ劇場専属として、オペラのソリストに抜擢され、「ボッペアの戴冠」などにも出演している。

記念講演会挨拶

本年はロマン・ロランの生誕百年にあたります。ロランは『ジャン＝クリストフ』『魅せられたる魂』などの長篇小説によって、日本の読者にもっとも親しまれている作家の一人であり、また、ミケランジェロやベートーヴェンなどの美術史的・音楽史的研究によって、専門の領域においても深い影響をあたえ、また、レーニンやペギーなどの親友であり、現代の進歩に人間的・精神的なかかわりをもったことはよく知られております。

日本ロマン・ロランの友の会は、その主要事業として、ロマン・ロランの日本訳全集の完成に全力を注いでまいりましたが、浩瀚な全三十五巻もようやく本年の夏に完成いたしました。

ロマン・ロランの生誕百年の祝賀は全世界にわたって大規模に行なわれつつあり、なかんずく本国フランスにおいては、アンドレ・マルロー文化相の主宰のもとに、アラゴン、モーロワ、モーリヤック、モンテルラン、カスー、ゲーノ、その他、芸術、思想、学界を代表する人々を委員として、記念行事が行なわれております。

一九一〇年（明治四十四年）に故高村光太郎によって、ロマン・ロランの音楽論の一つ「クロード・ドビュッシイ」が日本に紹介されてから半世紀を越える年月、ロマン・ロランの名は、つねに日本の若い世代にとって親しい伴侶であり、人生への励ましでありました。

私どもロランの紹介に微力をつくしてまいった者は、彼の生誕を祝うことによって、この年を意味ふかいものにしたいと考えた次第であります。たんに過去への回想ではなく、未来への窓として日本の希望多き将来のための一つの記念碑たらしめたいと願うものであります。

ここに、ロランが愛してやまなかったベルリオーズの最大傑作『ロメオとジュリエット』を、日本最初の公演とし

て実現することができましたことは、私どもの大きな喜びとするところであります。
この記念行事に御協賛御参加下さいましたことを、御来場の皆さまに、心から感謝申上げる次第でございます。

一九六六年十一月二十七日

日本ロマン・ロラン生誕百年祭委員会
実行委員長　宮本正清

ロラン百年祭に

ロマン・ロランが最後の日まで、その運命について心に問うことをやめなかった世界のすみずみにおいて、かれの無数の読者のつねに忠実な思いが、こんにち、ロマン・ロランにむけられております。

特別にかがやかしく、これまでよりもずっと意味ぶかい輝きのもとに、どうあっても忘れるべきではない人間の百年祭を、どうして記念しないでいられるでしょうか？

こういった機会に、私は、かつて「師」に私をいっそう近づけてくれたもののことを、思い出さなければなりませんが、そのとき以来われわれは、いくたの理由で、かれの作品や行動を評価し、そのかれの作品と行動はそれまでよりもいっそう本質的なものでありつづけているのです。そして私は、ことに、パリの民衆がただならぬ熱誠をこめて、当時上演されていたかれの『七月十四日』に喝采を送るために駈けつけていた、あの美しい夕べを思いおこすことを

許されたいと願います。この上演では、パブロ・ピカソのすばらしい幕が、劇のプレリュードともいうべき役割をはたし、私はシャルル・ケクラン、アルベール・ルーセル、ダリュス・ミヨー、アルテュール・オネゲル、ジャック・イベール、ダニエル・ラザリュスとともに、舞台音楽の一部を作曲したのでした……

したがって私は、一九六六年にもわれわれみんなの非常に近くにいる『ジャン・クリストフ』の作者にたいして、日本の友人たちが表わす熱烈な讃仰に、こうして加わる最良の機会を得たことを、よろこびとするものであります。

一九六六年十一月三日

ジョルジュ・オーリック（作曲家）

講演

加藤周一

ロマン・ロランとおよそ同じ年頃の詩人ポール・ヴァレリーが「文明をはかる尺度は、一人の人間の頭の中にどのくらい多くの考えが共存しているかという度合による」と言ったことがありますが、もしそれが文明の定義であるとするなら、ロマン・ロランは文明の化身のような人だったと思います。小説家であって劇作家であって、ひじょうにたくさんの伝記を書きましたし、また多くのエッセイを、音楽について、あるいは政治・社会問題についてたくさん書いたわけです。触れている問題はまさにヨーロッパ文明の全体にわたっていて、中世のカテドラルからロマン主義の音楽まで、それから文学と歴史と、政治・社会、ほとんどすべての問題に触れているわけです。しかし、たくさんのことに興味を持ちいろんなことに手を出したということでなしに、ロランの場合、世界と社会のいろんな面の全体

をとらえ、単に羅列的でなくそこに一つの統一を見出して全体としての世界と歴史の像を持っていたということになると思います。こうした全体としての像を持つためには、統一の原理が必要なんで、ロマン・ロランの場合それがどういうものであったかということが、その次の問題であるわけです。

これは、大きくいえば、人間とか精神とかいう言葉でいわれる一種のユマニスムですね。ロランにとっては、人間あるいは精神という観念を洗練して高めることで、これは「ロマン・ロラン全集」のあらゆるところに、あらゆる機会に出てくるわけです。この考えをもとにして音楽も政治も、あるいはフランス革命もみんなその一つの統一的な世界の中に持ちこんで、それを一つの全体として把握することに、ロマン・ロランは成功したといえると思います。

しかしそういう大ざっぱな定義といいますか、人間という観念で全体的な世界像を持つということは、ロマン・ロランに限ったことではないのです。こういう考えがもっとも典型的に大規模にヨーロッパの歴史に現われたのは十八世紀だと思いますが、その意味でロマン・ロランという人は十八世紀以来のヨーロッパ人で、おそらくその最後の人だったんじゃないかと思います。それ以後には、そういう人はヨーロッパでも出にくくなった、年代的にも、あと三十年若いと、こういう形で全体的に世界像を作りあげ、それを体現して、その化身となっているというような人は少ないんじゃないかと思います。そういう意味でロランは、ヴォルテールやゲーテの子孫ともいえるし、あるいはモンテスキュー、レッシングなどの広い意味でのヒューマニストの子孫だと思います。

しかし私が今日お話するのは、ロランの全体についてではなくてその中の一面、戦争と平和に関することです。ロマン・ロランを通して戦争と平和の問題を見るということは、二重のパースペクティヴのもとに見るということになると思います。ロマン・ロランが戦争と平和の問題を主として考え、主として行動したのは第一次大戦です。ところが、私どもは第二次大戦の最中に、ロランが第一次大戦について書いたものを読んで、その中にたくさんの教訓を見出して、そのめがねを通して現実にわれわれの前にある第二次大戦を見る見方を学んだわけです。ですから、単に興味と

か知的好奇心といったものではなく、もっと切実なものがあったわけです。今は第二次大戦がまた歴史になりましたから、ロマン・ロランを通して戦争と平和を考えるということは、第一次大戦について書かれたことが第二次大戦とかさなって、第二次大戦とかさなることがまた、今の戦争とかさなるわけです。私がはじめてロマン・ロランに触れて強い衝撃を受けたのは、第二次大戦中です。日本はその前から戦争してましたから大変長く続いた戦争です。日本国は明治以来十年に一度は戦争してたから、日清戦争以来平和が十年以上続いたことは一度もない、今はそういう意味で開闢以来長い平和が続いているわけですけど、世界そのものは戦争がないわけじゃなくて、再びわれわれの身近に戦争が迫りつつあるわけです。もしかするとかなり切迫してるかもしれませんから、いまロマン・ロランを――とくに戦争と平和の問題を通して――ふり返って見るということは、意味のあることだろうと思います。

まず、第一次大戦についてどういう人が戦争反対のことを書いたかと言いますと、戦争賛成については世論がじつに一致してたわけです。作家・思想家といった知識層のほとんどが、九九パーセントが戦争の圧倒的支持だったわけです。フランスではたとえばアンリ・ベルグソン、ドイツではトーマス・マン、第二次大戦ではあれだけ激しくナチに反対して亡命して戦ったマンですが、そのマンが熱狂的に戦争を支持してたわけです。ですから、ほとんど反対なんてないわけです。第一次大戦に対する批判の声としては、文学では戦後に現われたアンリ・バルビュスの『砲火』、エーリッヒ・レマルクの『西部戦線異状なし』などがありますが、これらは兵隊の戦場における体験を通しての反戦文学です。しかしそうでなくて戦争の全体を見通した上での批判を加えた人の、代表的な一人はジャン・ジョーレスです。これは第二インターナショナルの指導者で社会主義者です。そして戦争が近づいてきた時、それをくい止めるために各国の労働者の団結、ゼネラルストライキを考えた人なんです。簡単に言いますと、彼なんかは平和主義者ですが、一九一四年の戦争がはじまる年にパリで暗殺されちゃって、その志は実現しなかったわけです。もう一人反戦運動をもっとも行動的に効果的にやった人間といえば、やはりレーニンということになります。ツァーのロシアを倒

し革命をなしとげることによってロシアに平和をつくった。ジョーレスとレーニンとこの二人の社会主義者がじっさいに組織を通して、戦争に対して戦った。前者は失敗し、後者はある意味で成功したわけです。

つぎに組織を通じないで反対した人、これには、私の考えでは二人あると思うんです、その一人はオーストリア人でヴィーンに住んでいたカール・クラウスです。この人は戦争の最中もヴィーンを離れず、書いたものも主な作品は発表することができず、戦争がすんでから出されました。彼はパンフレットのようなものもたくさん書きましたが、戦争の全体を観察し描き分析し、そして反戦思想を鼓吹した彼のもっとも代表的な著作は『人間最後の日』という、芝居の形でかいた大変長い作品です。そして、もう一人は、もっと有名で影響力の大きかったロマン・ロランです。ロマン・ロランはスイスにいてスイスの新聞に反戦の文章を発表したわけで――これはフランスには住むことが困難だし発表できなかったからですが――これらはのちに有名な『戦いを超えて』とか『先駆者たち』という本にまとめられました。この二人の間にどういうちがいがあったか考えてみたいと思います。

まずロマン・ロランが書いたことは、だいたい三つあると思うんです。第一には戦争の情況の描写と分析――つまり戦争がどれほど非人間的な気違いじみたことをひき起すか、そして、戦争支持の議論がどれほどばからしく間違っているかということの暴露――です。その次には、そういう現象をひき起した実態の追求。それから第三に、戦争を起したものがおかしければそれに対してどういう価値を対立させることで平和の立場が守れるかという積極的な価値の主張ですね。これはカール・クラウスとも共通している三つの点です。

第一の点ですが、当時の戦争支持者たち――トーマス・マンもグンドルフもそうだったんですが――が挙げている三つの点があるわけです。その一つに「戦争は戦争だ」というのがあります。これは「戦争になったから、平和の時の言葉は通用しない」という意味です。ロランの言葉を要約していえば――みすず書房の全集版の訳によりますが――「戦争にはほかの物事と共通の尺度はない」ということ、つまり、人殺しはいけない、掠奪してはいけない、子供

を殺してはいけない、といった平和時の尺度は、戦争には適用されない、戦争目的のためならなんでも許されるということです。二番目は「ドイツはドイツである」という考え方、これは日本語でいうと「万邦無比」というやつです。他の国で通用する尺度が自国では通用しない、自分の国だけが文化を代表するもので、自分の国だけが特別でなければならない。三番目には「戦争の必要は法を認めない」、これは言葉を変えれば、力が十分強ければどんなことでも相手に押しつけられる、ロランが指摘したドイツの戦争支持の考え方はこの三つです。第二次大戦の時とそんなにちがわないんですね。ヒトラーの言ったこととまったく同じです。ロマン・ロランを読んで今も深く感心させられるのはこういうこと、つまりロマン・ロランが第一次大戦について言ったことを通じて第二次大戦をほとんどそのまま見ることができるという点です。しかし、これはおそらく第二次大戦だけじゃないんです。今ベトナムでやってる戦争も、その仕掛けは同じなんですね。それほど先見の明があり、それほど戦争の本質を衝いてるわけです。

しかし今申上げたようなことを第一次大戦の時言ったのは、ロマン・ロランただ一人なんです。ほかのたくさんのフランス人は誰も言わなかった、ベルグソンさえもそうなんです。今になってみると、ロランの言ったことは、ある意味ではきわめて当り前できわめて人間的なことなのに、どうしてほかの人間は誰も言わなかったのかと皆さんお考えになるでしょう。この程度のことならそうたいしたことじゃないと思いがちなんです。ところが、ロマン・ロランがそれを言ったのは戦争の最中だったということ、われわれが自分の国が戦争やってる最中に、その戦争についてそれだけのことを言うのはいかに大変かということなんです。歴史の本を見てもそれはわかりません。ロランの偉大さをはかるには、今ちょうどベトナムで戦争やってますが、もし日本中の新聞が、日本中の弁士が、哲学者が、何々大学の学長が、どれほどなんと言っても、ベトナム戦争について自分だけの意見があって、それがロマン・ロランの意見に酷似していたら、その時にはじめて、ロランがしたことがどれほどむつかしいかわかるんです。これが出発だと思うんです。

ロマン・ロランは『戦いを超えて』の中で「最悪の敵は国境の彼方にはなく、各国の内部にいる、ドイツの中にもあるし、フランスの中にもある。しかしどこの国でもそれを攻撃する勇気を持たない。百の頭を持った帝国主義というこの怪物……」といっています。ただここで帝国主義という言葉のこまかい分析をしているわけではないです。（この当時にはレーニンが一つの仕方で帝国主義のもっとも包括的で綿密な分析をしています。）しかし事の本体は帝国主義的権力だとロマン・ロランも考えたわけです。そしてそれに対立させるものとして、階級とか国境を越えた、そしていかなる偏見からも自由な、真理の概念、とくに人類という考え、人間一般という普遍的な理想を考えたわけです。これはモンテスキュー以来のフランス的伝統です。しかもこれはただ考えだけではなく、ロマン・ロランの中で血肉と化していたために、戦争のさ中でその立場を変えず、たった一人で戦争を弾劾しつづけたんです。

カール・クラウスは、ここからもう一歩進めて、戦争の本質をこまかく考えたんです。今の言葉でいえば軍国主義の政治学的な分析をやるわけです。第一には文化的背景によって軍国主義の現われ方がちがうということです。彼によれば、ヨーロッパにおける最初の軍国主義としてカイザーのドイツが現われたというんです。平時から徴兵制を敷いて、権力政治の伝統と工業技術が結びついたタイプである、英国の方は第二のタイプで、ドイツへの対抗として現われた軍国体制だというんです。平時には徴兵制は布いてないんですね。三番目にクラウスは中国の例を引いてるんですが、中国は将来、日本の方式をまねることで近代化をなしとげるが、ヨーロッパ列強の道はとらないでアジア的精神主義を残すだろうと言っているのです。当時は情報も少なかったでしょうし、根拠のあることではなく、単なる予感にすぎなかったと思いますが、今から見るとじつによく当っているわけです。クラウスが述べたもう一つの大事なことは、軍国主義は建て前としては自衛のためであっても、軍隊が大きくなると自己目的化し、軍隊の官僚組織と武器生産の工業力とが結びついて強力な力になって、その国で一個の政治的な発言力を持って作用するようになる。こうなるとその国は戦争の方へ傾くわけです。これは現在のベトナム戦争でもある程度そうですが、一九三六年のス

ペイン戦争とか朝鮮戦争なんかその典型的な例ですね。新しい武器の実験場としての戦争です。軍隊と産業との結びつきがその国の政策に大きな影響を与えるということでは、アイゼンハワー大統領が言ったことと同じです。こういう点をクラウスという人は第一次大戦を観察して見ぬいて、はっきりした言葉で言ったわけです。

こういうふうに強調した点は、クラウスとロマン・ロランでは多少ちがうけれども、分析の方法は酷似していますし、周囲からまったく孤立して、たった一人で戦いぬいたという点で共通しています。

それならば、こういう人たちのやったことは戦争をやめさせるためにどういう効果があったかといいますと、これはまったくなかったと思います。戦争をやめさせることは個人の力ではできないのです。戦争反対というとき、私は三つの面で考えることができると思います。第一には、情報と知識の問題——どういうことが起っているかということを、戦争の渦中で知ることはひじょうに困難です——これは戦争中だけでなく、戦争のはじまる前にも情報は一方的になります。戦争はしなきゃならないんだという情報だけ受けていてはなんにもならないんで、客観的な情報をうるということは大変むつかしい。第二には、たとえ情況がわかってもどっちでもよいという立場も理論上はありうる。ですから、単に知識だけでなく、そこになんらかの理想がなければならない。これは良心の問題でもありますが——。それから三番目に、行動の問題があります。どういう行動がじっさいに効果があるか、ということです。

ロランの場合で言いますと、第一の情報の問題ですが、個人としては驚くべき勤勉さで情報を集めています。当時住んでいたスイスが中立国であったせいもありますが、その努力は敬服すべきものです。この点、ぼくらもベトナム戦争について意見を作る場合大いに学ばなければならないと思います。次に良心の問題ですが、それについてのロランに対するフランス人の批判というのは、当時はほとんど全部の人がそうであり、今でも多少残っているわけです。ロランはフランスも批判し、ドイツも批判する、またドイツ側の良いところも強く言ったわけです。これは国に対する裏切りだというんですね。日本でも「鬼畜米英」ということがさかんに言われましたが、どこの国でも戦争中には

敵は鬼畜だったわけです。ところがロランは鬼畜でないということをたえず言ったので、これは非愛国的なこととされたんです。ロランは大切な価値は戦争中といえども貫徹するという立場ですから、たとえ戦争中といえども悪いことは悪い、また悪いことがあれば自国といえども容赦しないという、これは要ですよ。価値を保持することに確信をもって試練に耐えるということは、精神の独立とか、自由ということにほかならないと私は思うのです。私はロランの考えとはちがいますがそれをやりとげたロマン・ロランというのは今でも古くなってないと思う。私は二十年ぶりくらいでロランの文章をよみ直したところですが、じつに強く感動しました。

それからロランに対するもう一つの批判というのは、アンリ・バルビュスとの論争にも現われてますが、「組織に属してないと有効でないではないか」つまり「いくら一人でしゃべっていても結局戦争は起るんだからなんの足しにもならないではないか」ということです。これは、私はそのとおりだと思います、しかしそれならば、ロマン・ロランがしたこと、あるいはもっと小さな人が一人一人でしたことが無意味であるか、というと私はけっしてそうではないと思います。それはなぜかといいますと、組織の中に入ると、組織はそれ自体の法則で動きますから、いろんな技術的な内部の問題、運動の惰性、またとくに組織のエゴイズムのために、はじめの理想から離れてゆくんです。これが第一の問題、それから第二は中に入った個人が規律に従わなければならないため、個人が組織の中に埋没して、自由な批判精神と生き生きした理想観をだんだんに磨滅させてしまいがちなんです。組織がなければ効果はないんですけれども、組織だけがあると組織自身が堕落し変質する可能性がひじょうに強いんです。それをくい止めるためには、社会の中に、ひじょうに純粋な形ではっきり表明された理想の声があることが必要なんです。ですから、ロマン・ロランが組織を持ってなくて組織の中に入らなかったのは、彼自身の個人主義とかちゅうちょとか勇気の問題とか、あるいは偶然に入らなかったというのではなくて、入らなかったからこそ、その役割を十分に果すことができたのだと思います。組織の中にいる人が、こういう人を攻撃するのはまったく意味がない、むしろ大切にしてその意見を傾聴

しなければならないんで、もしその声が聞えないようなら、組織の側にすでに堕落現象が起っているのだと思います。これは戦後のバートランド・ラッセルの場合も同じなんで、彼一人では戦争はやめられないにしても、社会全体、とくに平和のための組織を健全に維持して行くために必要なんだと思います。料理に対する塩、さしみのわさびみたいなもんですね。そういう意味では、有効でなかったどころか、じつに有効だったと思います。

それからもう一つ、ロマン・ロランの平和について書かれた文章だけを読んで、たとえわれわれが批判したくなるようなことがあっても、彼の作品とか生涯とかを辿って行きますと、ああいう立場の人が個人としての最大のできることの、ほとんど極限までを完全にやりとげた人としての偉大さというものに打たれざるをえませんね。すべてが人格の全体の中から必然に出てきているんです。簡単に批判できるようなものじゃない。われわれとしては学ぶべきものが、現在といえどもかぎりなくあると思います。

（雑誌「みすず」（一九六七・二）に掲載）

ロランの生誕百年祭に思う

深い日本との関係　改めて再研究が必要

荒　正人

ロラン・ロランは、一九〇八年（明治四十一年）、日本流に数えて四十三歳であった。

最初の妻クロチルドとは、生活態度や信念の違いから別れ、独身生活を送っていた。ロランは、モンパルナス大通り一六二番地にあった小さいアパルトマンで、『ジャン・クリストフ』に取り組んでいた。恐らく第七巻「家の中」を書き続けていたものと思われる。

光太郎と同じ所に住む

アパルトマンの窓は、僧院の庭に面していた。青葉が繁り、小鳥が歌った。都会の一隅とは思えぬほどひっそりしていた。この庭をながめ、思いにふけっていた詩人がいた。ライナー・マリア・リルケである。リルケは三十四歳、経済的事情から数年まえに家族と別居し、崇拝するロダンからは絶縁されていた。

リルケのアパルトマンは、カンパーニュ・プルミエル街十七番地であった。同番地に、高村光太郎が住んでいた。かれはまだ二十六歳であった。彫刻、絵画、音楽と、芸術的衝動に駆られながら勉強を続けていた。当時のパリには、有島生馬、安井曽太郎をはじめ、日本人の絵かきたちが大勢いた。光太郎は、一九〇八年春から翌年春までパリに住んだ。パリを去る少し前に、与謝野鉄幹の紹介状を持って、梅原竜三郎が現れた。光太郎は、この絵かきに、自分が使っていたアトリエの契約を引き継いで、やがて日本に帰った。

高村光太郎は、リルケ、ロラン――以上の三人は、一九〇八年に、パリの一点に集ったのである。三人は、年齢が異なるだけでない。故郷、家系、資質が全く別々である。仕事の性質も異なっている。だが、三者が一つの場所に集っ

たのは、必ずしも偶然ではない。三人は、不思議な饗宴に招かれたのだ。招待状を出したのは、だれであろうか。

パリ大学で芸術史講義

ロランはそのころ、パリ大学（ソルボンヌ）で、芸術史を講義していたはずである。講義に赴く姿を、高村光太郎がみとめたことがなかったであろうか。

高村光太郎は、ロダンに熱中し、第一次大戦後、『白樺』に『ロダンの言葉』を翻訳し、連載した。だが、その前に、彼の主催する「フュウザン会」の雑誌『フュウザン』に、大正二年二月から、『ジャン・クリストフ』が連載されはじめたともいえる。私は、この雑誌をまだ見ていないので、少し心もとない気もする。光太郎が翻訳し、単行本にまとめたのは、戯曲『リリュリ』一編があるだけである。

白樺派の人たちは、ロランを理解することができなかった。だが、白樺派のまわりの若い世代には、影響を与えている。――倉田百三、宮本百合子、尾崎喜八、片山敏彦、高田博厚その他をあげることができる。

「出家とその弟子」を激賞

倉田百三は、『出家とその弟子』（英訳）を、ロマン・ロランから激賞された。宮本百合子は、ロランに関して余り書いてはいないけれども、西欧作家のなかで最も敬愛していたように思われる。

尾崎喜八は、一九二六年（大正十五年）一月二十九日、ロランの六十回誕辰を記念して刊行された『ユーロープ』二月号（記念特集号）に、「新しい風」という一編の詩を寄稿している。それは、「ほがらかな、新鮮な、慕わしい、自由の風が吹いて来た」で始まり、次の言葉で結ばれている。「人々よ、窓を開こう！／このたとえようのない爽やかな風を戸口から屋根裏まで導き入れ、／僕等の民族の気質と僕等の自由な精神とを揺りおこさせて、／緑の円球を

めぐるこの友愛のそよかぜに、／悦びと誇りと希望とにみちた僕等の声を合わせよう！」

片山敏彦は、ロランと最も親しかった日本人である。かれは、ロランの精神を最も深い地点で理解している。その一例として、ロランの青年時代の手記『手帖』で（第二次大戦後に発表）のなかから、つぎの個所を抜きだしてみたい。

「自我への愛は良く、且つ聖だ。その愛は、実在の大きな自愛の一部だ。これは、もろもろの魂の集落での中での、神の光線であり、大きな愛の火花の一つだ。『彼』への愛が、他人への愛だ。『彼』は実在する。『彼』の外には何もない。『彼』の愛は、『彼』の生の充実の表現だ」

片山敏彦の仮定によれば、この言葉は、ロランがスピノザの閃光にふれた体験の後に書いたものである。片山敏彦は、この個所に、民主主義の形而上的根拠をみとめる。と同時に、私は、スピノザの閃光こそ、ロランのすべてを解くカギではないかと想像する。

大洋に注ぐ大河に似て

高田博厚は、高村光太郎に彫刻を学んだが、『白樺』の後期に寄稿した。後にフランスに渡り、帰国したが、一九三一年から、ロランと会い、戦うロランの姿を実際に見ている。フランス時代の回想の中で、ロランにふれたものは、文章としても美しい。

ロランは、ジードの『ソビエト紀行』（一九三六）を激しく論難したけれど、晩年は、スターリンの粛清に心を痛め、やがてカトリックに帰依したといわれる。私の見当をいえば、ロランとカトリシズムは、スピノザの閃光の最後の輝きのように思える。

ロランと日本文学、芸術の関係でいえば、大杉栄訳『民衆芸術論』（大正六年）などを含む、大正時代の民主芸術論争や今井正監督「また逢う日まで」（昭和二十五年、『ピエールとリュース』をもとにしたもの）蜷川譲たちの「ロマン・ロラ

ン協会」運動なども改めて検討する必要がある。

ロランは、『ジャン・クリストフ』や『魅せられたる魂』の作者であるが、両大戦を激しく生きてきたその長い生涯は、無数の支流を集めて大洋にそそぐ大河の姿に似ている。

（文芸評論家）

ロマン・ロランは一八六六年生まれ、一九四四年に没したフランスの作家。一九一五年『ジャン・クリストフ』に対し、ノーベル文学賞を授与された。一月二十九日は生誕百年にあたる。

（「朝日新聞」）

ロマン・ロランの「狼」

民芸が初めて上演

ことしは、ロマン・ロラン生誕百年に当たるので、いろいろと記念行事が多かったが、その一環として、劇団民芸では、本年最後の公演として二十五日から大手町・農協ホール（十二月十二日から平河町・砂防会館ホール）で、ロマン・ロランの「狼」を上演することになった。

今年の新劇各劇団では〝中堅層の充実〟というのが大きな課題の一つだったが、民芸の場合も例外ではなく、来年の上演作品について俳優のライン・アップをきめるためにも、この公演が一つの足がかりになりそうだ。

ロマン・ロランといえばフランス革命に材をとった「愛と死との戯れ」が有名で、さきごろ劇団「三期会」でも上演された。民芸でも〝生誕百年記念公演〟のレパートリーをきめる際に候補にあげられたが、結局は日本で戦後上演されていないこの「狼」を取り上げることにきまった。演出の早川昭二は「じみな作品ではあるが、突っこんでいけばいくほど、表面にはそれほど見えなかった〝深さ〟とでもいったものが感じられる作品だけに、ロランの作風を代表する作品の一つといえる」といっている。

この作品は、フランス革命を主題にした、八編にわたる彼の〝革命連作劇〟の口火を切ったもので、一七九三年、フランス大革命が起って四年後の革命軍が舞台。

労働者や学生が主力の革命軍の中にあって、貴族の出身ということだけで、スパイの容疑をかけられた一人の青年将校をめぐる軍隊内の〝正義論〟を描いている。

結局、正義のために彼の無実と真実を立証しようとする人々も〝祖国のために〟という言葉で押し切られてしまう

のだが、ロランはこの作品を通して個人の〝正義〟がどんなふうに国家のために押しつぶされてしまうか、その姿を描き出そうと試みている。

この作品は〝ドレフュス事件〟を契機に書かれたものだが、その弁論に立ったエミール・ゾラの立場と異なり、作者自身が、どれが正しいかという結論を与えないのが、ロマン・ロランの考え方でもあるようだ。

それだけに、上演に当たっては、若手の多い出演者たちに、作品をはっきり掌握させるため、演出の早川は〝作文戦術〟をとった。

つまり、この主人公の青年将校を弁護する側、攻撃する側に立つ各俳優に、その〝役〟の立場からの主張を、宿題として書かせたもので、いかにも民芸らしい納得主義の作戦ともいえる。

こういう作戦をとった理由の一つに、この作品の出演者の大半が中堅、若手クラスであることがあげられる。主演の鈴木瑞穂、波多野憲、梅野泰晴はじめ、石森武雄、安田正利など、佐野浅夫、嵯峨善兵を除いて、新人群の大挙出演ということで、新しい作劇術といったものが強く要求されてきている。

これは、単にこの公演だけにとどまらない。

さきごろ発表された民芸の来年度公演スケジュールについても、宇野重吉は「昨年までは、どうしても自分で演出をしなければならないことが多かったが、来年からは、役者としての本業に力を入れられる。それは一つには若手演出家が、どうやら育ってきたことと、俳優もまたバラエテェーに富んだ若手が育ってきて、劇団のスケジュールがどうにか消化できるようになったからだ」と語っている。

現実に、来年のスケジュールの配役できまった分だけを見ても「アンネの日記」で、主役アンネに笹森みち子、日色ともゑ、「瀬戸内海の子供ら」で草間靖子が、「ヴィシーでの出来事」でも鈴木瑞穂が、それぞれ主要な役についている。

（読売新聞、一九六六・二・十六）

記念音楽会

N響によるベルリオーズの劇的交響曲「ロメオとジュリエット」

全曲日本初演

十一月二十七日（日）六時半より　東京文化会館大ホール（上野）

ロランとベルリオーズ

ロマン・ロランといえばベートーヴェンを連想するのが普通だが、彼が同じフランス人であるベルリオーズに生涯にわたって深い愛情を抱きつづけていたことも忘れられてはならない。ロランのベルリオーズ論（「ありし日の音楽家たち」所収）は、その数々の音楽家研究の中でもとくに傑出している。しかもその中でロランは「ロメオとジュリエット」をベルリオーズの最高傑作としているばかりでなく、フランス音楽の中の最高の作品と評価している。また晩年のベートーヴェン研究の中でも、しばしばベートーヴェンのある頁とこの曲を比較しながらベルリオーズの〈愛の夢〉の美しさを回想している。

「ロメオとジュリエット」について

これは劇的交響曲と題され、大編成のオーケストラ、一〇〇人以上の合唱団、三人の独唱者など合計二七〇名を要するという大規模なものであり、そのスケールの大きさはベートーヴェンの「第九交響曲」を上廻るものである。最高の傑作とされながら日本で全曲上演が実現しなかったのはこうした理由による。仄聞するところでは、かつて来日したフランスの名指揮者ジャン・フルネもその実現を強くのぞみながら果さなかったという。今回、ロラン百年祭に当り、各方面の協力をえてＮＨＫ交響楽団をはじめ、最高のキャストによって実現されることになったもの。

テーマは周知の通り、シェイクスピアの同名の名作によっているが、宝石のごとき管弦楽法、情熱的な旋律、壮大な構成を得意とするベルリオーズにこれほどふさわしいテーマはない。しかもオペラでは表現できない音楽の純粋さと、交響曲では表現できない劇的迫力を結びつけるという画期的な成功によって、ベルリオーズはこの曲において音楽に新しいジャンルを打ちたてたのである。

全体はプロローグと四つの部分からなる。プロローグではオーケストラと合唱と独唱者が劇の雰囲気と筋を物語り、次の三つの部分ではそれを受けて、オーケストラだけが若い恋人たちの〈愛の夢〉を物語る。最後の部分にいたり再び合唱と独唱者が加わり、悲劇的な破局をうたうと共に僧正ローレンスがモンターギュ家とキャブレット家の間に憎しみを越えた和解を結ばせる。これはベートーヴェンが「第九」において実現した〈人類の友愛と結合〉を、形を変えて再現しようとしたものである。

一時間四十分にわたるこの大曲は、その美しさと壮大さによって聴く人を圧倒し魅了せずにはいないであろう。

（この音楽会はＮＨＫテレビにより中継録画され、全国放送される予定）

出演　管弦楽　ＮＨＫ交響楽団
指揮　若杉　弘
独唱　戸田　敏子、中村　健、高橋　修一
合唱　東京混声合唱団、二期会合唱団

なお音楽会の開始に先立って、ルイ・ド・ギランゴー駐日フランス大使のあいさつがある予定。

「ロメオとジュリエット」上演によせて（談）

大分昔のことになるが、その頃日本にいたローゼンシュトックが「ロメオとジュリエット」を、もちろん抜萃だったが、振ったことがある。それを聞いて、なんという天上的な美しさだろうと驚歎した覚えがある。それ以来これはベルリオーズの曲の中でも私の最も好きな曲となった。ロランのいう〈愛の夢〉の美しさがこれほど深く表現されている曲はほかにない。こんなすばらしい曲がどうして日本でやられないのかと不思議に思っていたが、こんどその全曲が聞けるというので、私は待ち遠しい思いである。

吉田　秀和（音楽評論家）

指揮者になって生涯に一度は振ってみたいと念願していた曲なので、お話があった時には飛び立つ思いだった。自分の全力をかけてやってみたい。

若杉　弘（指揮者）

ロマン・ロラン全集の二十年

今年の一月二十九日はロマン・ロランの生誕百年にあたっていた。だが、新聞・雑誌は、奇妙にロラン生誕百年に冷やかだった。ロランは、私たちの手にとりもどす必要もない過去の人物となってしまったのだろうか。

今日、知識人の無力がささやかれている。知識人の役割は終わった、今は無思想の時代であると説く人もいた。来日したサルトルが、日本での講演のテーマを知識人の問題にしぼったのも、このような気流をいちはやく感じとったからに違いない。とすれば、今こそロマン・ロランの再評価が必要ではないだろうか。

集団的憎悪がヨーロッパをおおいつくした第一次大戦中、帝国主義を告発して反戦を訴えたロラン、「〝精神〟には世界を更新させる〝行動〟の偉大な兵士となること以上に高い役割はない」と宣言し、反ファシズム運動の先頭に立って戦ったロラン、精神労働者＝知識人と肉体労働者＝プロレタリアートの連帯というヴィジョンをたて、世界最初の社会主義国家ソ連を一貫して擁護したロラン……「行動する知識人」という課題は、今日こそ問いなおされねばならぬテーマではなかろうか。

ロランの政治・社会的発言には、くりかえしクリストフ（『ジャン・クリストフ』）が、アンネットやマルク（『魅せられたる魂』）が登場している。彼ら小説の主人公たちは、ロランとともに生きつづけていたのだ。戦争中に出た岩波文庫版『魅せられたる魂』は検閲でズタズタにされ、伏字だらけで世に出た。ロランの文学は単なる青春文学ではない。社会変革の思想が脈脈と生きているが故に、当局の忌避するところとなったのである。

この十一月にはロマン・ロラン生誕百年祭が開催される。フランス大使館その他の後援により講演会、革命劇の上

演、音楽会などが行われるが、中心になるのはロマン・ロラン全集を刊行しているみすず書房である。全集三十五巻は八年がかりでこの八月に完結した。以下、しばらくこのロラン全集の歩みを辿ってみることにしよう。

終戦翌年の春まだ浅い頃、信州塩名田に疎開していた片山敏彦氏を訪れた復員服装の一青年がいた。瓦礫とヤミ市の喧騒にあけくれる東京から、混雑列車でやっとたどりついた信州の山里は別の天地のような静けさだった。そして、片山氏の周囲にも孤高の精神の息づく世界があった。復員服装の青年は小尾俊人氏、数人の人たちと出版社みすず書房を設立したばかりであった。

社はつくったものの、何を出版したものかなかなか方針がきまらなかった。小尾氏は出版企画のことを、よく佐々木斐夫氏（現成蹊大教授）と話し合っていたが、ある日、たまたまロマン・ロランのことが話題に上った。佐々木氏は少年の頃、ロマン・ロランの作品を読んで、感動し、それまで直接には面識のなかった片山敏彦氏の門を叩いて師弟関係を結んだことがあった。ロランの本を出したいものですね、と小尾氏がいい、佐々木氏も、そうだ、ぜひロランの本を出しなさい、といっているうちに、どうだろう、いっそ全集を出したら、と佐々木氏がいった。すると小尾氏も、そうですね、全集がいいですね、と賛成した。――以来二十年に及ぶみすず書房とロランのつながりは、こんな風な二人の雑談から生まれ、いかにもささやかな雰囲気から始まったのである。

小尾氏の訪問を受けた片山氏は、創立したばかりのみすず書房がロマン・ロラン全集を出したい、という希望をたずさえたことを喜び、快諾した。片山氏はロランから生前、全著作の翻訳・出版の許可を得ている。氏はかねてからロマン・ロラン全集刊行を念願し、いくつかの出版社にはかったことがあった。しかし、たいていは『ジャン・クリストフ』と『魅せられたる魂』だけならという返事で、全集計画は実らなかった。まだ一冊も本をだしていない小出版社の、初対面の青年にロラン全集を託すという、一見無謀な行動を片山氏がとったのも、最初から、全集を出したいという壮大な夢を抱いてやってきた編集者の熱に動かされたからかもしれない。

ついで、京都に宮本氏を訪ねた小尾氏は、ここでも激励と支持を受け、ここに全集のおよその計画が立てられた。『ジャン・クリストフ』『魅せられたる魂』の二長編に短編小説、戯曲、伝説、音楽研究…など、むりのないページ数をあてはめていくと、およそ七十巻に達することがわかった。尨大な量である。用紙・印刷事情からも到底、定期刊行は望めないが、たとえ十年かかってもやりぬこう、と関係者は決意を新たにした。新聞に小さな広告をのせたらすぐに反響があった。予約申込金は広告料金を上回り、全集の刊行に期待する、という投書が相ついだ。

二十一年夏、みすず書房の処女出版として片山敏彦『詩心の風光』が出、ついで全集の第一回配本『獅子座の流星群』が出た。『獅子座の流星群』は一万部ほど売れた。当時の出版物は割合部数が多かったから、一万部ではとくに多い方ではなかった。新生社が派手な出版活動で話題をさらい、一方ではマルクス・レーニンなど左翼文献がせきをきったように出廻っていたから、ロマン・ロラン全集の出発は目立たぬ、地味なものだった。しかし、みすず書房の人たちは、心の革命こそ大切だ、とロラン全集の意義を自負していた。ロランの本によって戦後の荒廃した人心に理想の灯をともすのだというのが、その信念だった。

二十四年十月『ジャン・クリストフ』の第一巻が、二十五年には評論集『戦いを超えて』が出た。ロランの著作は乾いた砂にしみこむ水のように浸透し、影響力をもつようであった。愛すべき小品『ピエールとリュース』が「また逢う日まで」というタイトルで映画化された時も、その新鮮な感動が反戦平和の運動にと結集していった。

しかし二十七年四月、講和条約が発効すると、占領軍によってはめられていた翻訳出版の手かせが外され、新しい作品がどっとではじめた。新潮社の「現代世界文学全集」で豊島与志雄『ジャン・クリストフ』が出たのもこの頃である。『ジャン・クリストフ』はベルヌ条約によって、どの出版社でも自由に出せることになったのだ。やがて文庫版でも新訳が出はじめた。ロラン全集の苦難時代がはじまったのだ。

みすず書房は全集と並行して「ロマン・ロラン作品集」二十巻を、二十八年十一月から出しはじめた。コンパクトな普及版選集である。また、文庫合戦にも対抗して「ロマン・ロラン文庫」を三十二点出した。

一方、全集の方は本国で刊行された新資料を次々に加えていったため、七十九点になっていた。いつまでたっても完結しない感じもした。五十三回配本を出したところでとうとう全集計画は再検討を迫られた。初期の頃にくらべて紙質こそ向上したが、造本の点では見劣りがするようだったし、不定期の刊行ペースも先行き不安定であった。

結局、全集は再出発することになり、あらためて決定版三十五巻が編成された。一冊平均二千枚、旧版の三冊分を一巻に収録する方針である。三十三年十一月、再出発の第一回配本には本邦初訳『インド』を出した。この時は、まだ全集の三分の一ほどが訳されていなかった。ロランの著作は多岐にわたり、しかも各分野に高度にわたって専門的なため、少人数ではカヴァーしきれない、という反響から、訳者の陣容もひろげられた。この十年の間に若いロラン研究者も育ちつつあった。それでも計画は難航し、完結までに八年を要したのである。

生誕百年を期して全集は完結したが、ロラン全集の象徴ともいうべき片山敏彦氏は、ついに全集の完成をみずに亡くなった。佐々木斐夫氏は最終回配本の訳を担当したが「あとがき」に全集の支柱として片山氏、宮本氏、小尾氏の名をあげたあと、とくに「第四の柱」として青木やよひさんの献身的な尽力をたたえた。青木さんは旧版の全集以来、一貫して全集を担当したみすず書房の編集者。すべての巻の校正をやりとげ、全作品を前後三回以上目を通したという。いま全集の仕事を終わって、あらためてロランの人間の資質、その芸術の偉大さを感じ、この仕事に参加したことに光栄を感じる、という。

ロラン全集は終わったが、ロランの全著作が邦訳されたわけではない。初期の音楽・芸術論文、おびただしい書簡

類、未発表の日記がある。書簡は宛てた人との往復書簡のかたちで編集されている。ツヴァイク、ヘッセを初め有数の知識人との往復書簡は、ロランの活動に新しい照明をあてるものだろう。死後五十年は公表されない日記もロラン夫人によって部分的に編集されている。人民戦線内閣の崩壊後、一切の社会的活動を絶ってヴェズレーに隠棲、第二次世界大戦中も思索と執筆に沈潜したロランの秘密も明らかにされねばならない。それまでの時事評論、アピールの類で単行本に収録されなかったものを集めるのもこれからの仕事である。スペイン革命に寄せたロランの関心も、今日的な視覚から検討されねばならないだろう。

「つねに前進している人たちのために、人類の大河に道を開く諸国の民衆や諸階級と共にある」と書いたロランは、また「行動こそ人間そのもの」であると書き、はっきりと自己の党派性を明らかにした。ロラン生誕百年はこれらの民衆のものでなければならない。ロランの遺産を今日に生かすものは抑圧された諸国の民衆だからである。

（図書新聞　一九六六・十・八日）

六、　ロマン・ロラン展（一九六八）

ロマン・ロラン展　一九六八年

主　催　読売新聞社
後　援　外務省・文部省・フランス文化省・フランス大使館
協　力　日本・ロマン・ロランの友の会
会期会場　八月十三日～八月十八日　東京銀座　松坂屋
九月十日～九月十五日　大阪　松坂屋
九月十七日～九月二十二日　名古屋　松坂屋

人間ロマン・ロラン

私たちと共に生きる芸術家

宮本正清

生涯を行動の中で、行動のために生きたレーニンは「夢みるべし」といった。「ロシア帝政の最も暗黒な時代に彼は夢みていた。彼の夢は行動だった」とロマン・ロランは書いている。レーニンの夢は厳しい現実からの離脱でも逃避でもなく、より大きな行動への源泉であったにちがいない。すべての偉大な芸術家は、激しい動乱の現実の中に生

きつつ、想像し、創造する。ロマン・ロランもその一人であった。彼の多くの作品が特に日本の若い世代に訴えるのは、夢と現実が深くからみあい、激しく衝突し、発展していくからである。それは若人たちの生命を揺さぶり、生きるための戦いに彼らを参加させるからである。

――若い女性の人生の戦友にも――

日本では、もう半世紀以上にわたって、ロマン・ロランがつねに青春の友であるのも、この理由からである。彼の最初の大作『ジャン・クリストフ』が、いわば「人生の悩みと歓び、疑いと信念」の書であるのに対して、後年の傑作で、女性を主人公として、波乱の多いその生涯をえがいた『魅せられたる魂』が、若い女性の共感をよび、彼女たちに力強い激励を与え、人生の戦友となるのはおもしろいことである。この小説は、恋愛について、結婚について、母と子との関係について、新しい多くの問題を提出する。また、女性の独立と職業について、男性と女性との対立について、さらにまた現代の社会が抱いている、経済的、政治的、道徳的問題に、否応なしに私たちを直面させる。

私たちが、今日特にこの作家を身近に感じるのは、いま世界のすべての人間を不安にし、怖れさせている戦争と平和の問題に、ロマン・ロランが生涯をかけたことを知っているからである。この点で、彼ほど私たちの中に生き、私たちと共に生きている芸術家はまれである。彼の作品の人物たちは、この信念と理想のために生きたのであり、また数多くの論文も同じ精神につらぬかれている。

――いかなる差別的偏見も持たぬ――

ロマン・ロランは、人種、民族、文化、国家などいかなる差別的偏見をも持たなかった。そして、それらの相違は、お互いの愛や理解の支障になるべきではなく、むしろ、一つの目的のために、人体のあらゆる器官が一致協力してい

るように、或いはまた、種々さまざまの違った音色や楽器の組み合わせが美しい音楽を創り出すように、人間の社会もすべての人間の幸福のために、平和のために、より高い〝精神生活〟のために協調すべきだとロランは信じていた。

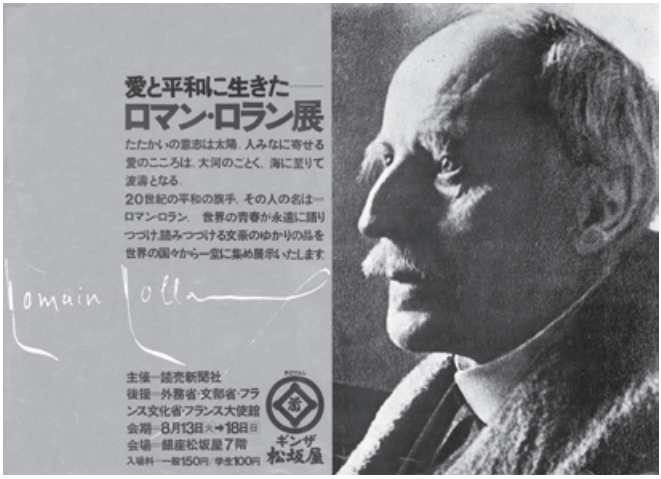
そして、この理想のために生きた。西洋が東洋にとって必要なように、西洋もまた東洋を必要とし、その協力によってのみ、過去にまさる、高い、美しい人類の文明が創造されることを彼は念願した。ロランはアジアを信じ、日本を愛した。

――愛用の品々をまのあたり――

そのロランがこんにち、はからずも、私たちのところにきた。ロマン・ロラン展によって、多面的な、長い彼の生涯の活動のおもむきと、彼の清純で簡素だった生活の一端にも親しくふれることができることは、まったく望外のしあわせである。このたび、フランス政府とロマン・ロラン夫人の好意ある配慮によって、門外不出の貴重な資料文献をはじめ、ロランの原稿、手紙、或いは、若き日のロランが、孤独と清貧の中にこもって、十年の歳月を費やして『ジャン・クリストフ』を書きあげた机や椅子、彼が常に愛用したマント、帽子、ペン、ナイフにいたるまで、目の当たりに見ることによって、いっそう身近に、親しみ深く人間ロマン・ロランを感ずることができるであろう。

（フランス文学者）

（読売新聞収録）



ロマン・ロラン展ポスター

ロラン未亡人 遺品展へ

感慨深げに遺品を見る未亡人（松坂屋で）

反戦、反ファシズムのために生涯をささげたフランスの世界的文豪ロマン・ロランの未亡人マリさんもきが十三日朝、大阪・天満橋の松坂屋百貨店で開催中の「ロマン・ロラン展」（大阪読売新聞社主催）へ日本ロマン・ロラン友の会の宮本清会長といっしょに姿を見せ机、外とうなど六百数十点におよぶ夫の遺品を感慨深げに見入っていた。マリ夫人は十二日羽田着のエールフランス機で来日、京都に一泊したあときっそく同展を訪れた。

この日は朝からあいにくの雨だったが学生、主婦など熱烈な"ロラン・ファン"が多数つめかけた。午前十一時前に薄ねずみ色のハーフコートを着た貴婦人夫人にたまたま新質中の大阪市立大学文学部道宗照夫助教授（フランス文学）が気づき、三年前フランスで会って以来の再会に夫人もニコニコ顔で握手をかわし、いっしょに展示場を回った。

謹啓、新秋の候　ご清祥のこととお慶び申し上げます。
さて、フランスの文豪ロマン・ロランの生誕百年を記念して、今回大阪で開催されますロマン・ロラン展に出席のため来日されますロマン・ロラン夫人をお招きして晩餐会を催したく存じます。なにとぞお繰り合せご来会くださいますよう、ご案内申し上げます。　敬具

一九六八年九月七日

京都日仏協会々長
高山義三

日本ロマン・ロランの友の会々長
宮本正清

とき　一九六八年九月十五日（日）午後七時
ところ　京都市左京区岡崎京都会館西　ルレ・オカザキ
会費　一、五〇〇円

追て準備の都合もありますので折りかえしご返事たまわりたく存じます。

ロラン夫人への花束
　永田和子　永田道子（8歳）

京都のレストランにてロラン夫人を囲んで
宮本　　稲畑太郎

1968 年　宮本家の応接間　　宮本正清氏とロラン夫人

七、ロマン・ロラン全集

「ロマン・ロラン全集」の出発の頃

――敗戦、占領、著作権、そして読者――

小尾　俊人

私は昭和十五年（一九四〇年）に十八歳でありましたが信州の田舎から東京に出まして、出版社につとめることとなりました。その出版社は羽田書店といいまして、当時、「宮沢賢治名作選」とか小穴隆一のさしえ入りの賢治「風の又三郎」などを出版していたのでありまして、私はここでいわゆる単行本出版のメチエを覚えたのであります。この書店主は羽田武嗣郎といいまして、当時政友会前田米蔵派の代議士であり、岩波茂雄に私淑してその助力によって昭和十二、三年の開業であったと存じます。この羽田さんという方は、只今民主党の代議士の羽田孜（つとむ）という方のお父さんであります。

その後、兵隊にまいりまして、足掛け三年軍隊生活をいたしました。敗戦後、東京に戻りまして、一九四五年の暮れから、新しい出版社の準備にとりかかりました。

そのさいは、出版の編集技術や、印刷所や広告関係などは人間関係をもっておりましたから戦前からの連続として、充分の準備があったわけであります。そういう点ではカケダシではなかったのであります。

なぜ元の出版社に戻らないで、新しい出版社を興そうとしたのか？　それを考えてみますと、まず、戦争下で経験したいわゆる出版社の「時局便乗」、当時のことばでいえば、「バスにのりおくれるな」という、刹那的なキワ物商売がつくづく厭だったことがあります。そして店主の羽田さんの政治家としてのビヘイビア、いわゆる大政翼賛会の代

議士としてのオポチュニズムを痛感して、これでよいのかという疑問が大きくのしかかっており、それが強烈な記憶として意識を支配していたからだと思います。

そのとき、偶然だったのですが、私の弟の先生がいまのロマン・ロラン研究所の専務理事の佐々木先生でありまして、そのつながりから片山先生、宮本先生の知遇を得ることができました。「ロマン・ロラン全集」という仕事を生涯の事業として荷うという道に入った、こういう次第でございます。

出版社というのは一つの企業であります。出版社はふつう編集部と営業部に分れております。言葉をかえていえば、前者は文化活動を目標とし、後者は利潤追求活動に専念しています。それはいわばギリシア神話の「ミノトール」（牛頭人身）または「ケンタウロス」（半人半鳥）のような怪物にたとえられましょう。なかなか生存のむつかしい、または存続のむつかしい存在でありますが、しかし、これなくしては、文化または文明は成り立たないのであります。文化の流通を可能にしたのは、本あってのこと、本屋あってのことであり、いわば文明の城、文明の城砦であるといってもよいでしょう。これがなかったならば、「文化」のコミュニケーション、考えること、熟慮すること、さらに感情の洗練というレベルへの向上はなかったのであり、人間という、人の間という言葉が大体成り立ちません。これほどの意味はある存在ではあるのですが、仲々、その存続はむつかしいのであります。

大体、事業家、企業家など、利潤追求の目からは本屋など見向きもされません。三井財閥の基礎をおいた中上川彦次郎は、福沢諭吉の甥でありまして、はじめ、福沢のはじめた「時事新報」の社長になったのですが、この文字を売る商売が、いかに合理的計算がむつかしいか、将来の展望が利かないかを嘆いております。

さて、それはさておき、出版社を他の企業と比較すれば編集部門こそ出版業を特徴づける固有的な役割を担っております。ですから、よく言われますように、「椅子と机さえあれば」これは、重工業のように目に見える物質はなくとも精神的な「何か」quelque chose があれば、といういみですが、いつでも出版ははじめられる、とも、また一面、

伝統とか風格を重んずる出版社、かつての岩波書店のような存在においては、独得の編集スタッフの養成に異常な努力を払った理由でもある、のであります。

そこで、実務的に申しますと、著者の「原稿入手」といういわば「原料仕入れ」でありますが、これが、仲々複雑でありまして、著者はその生存理由をかけた精神的半身を商品化するためには、ハーフの半ばの商人となり、出版業者の方は逆にハーフの半ばの文化人であらねばならないということになります。つまり、編集者は著作、すなわち原稿内容の意義への共感、その精神的側面を理解しつつ、一方、その現実化に伴う経済的展望を持たねばならない。それは、ひっきりなしに活動する社会のなかで、本のもつ経済的側面を厳密に決定し実行に移さなければならないのです。そして、著者に対する出版条件、長期的には印税、部数、定価についてのとりきめを行わねばなりません。また、「本」という一つの「もの」、芸術品としてのオブジェを創る創造の行為を出版者は著者と読者に対して、実現せねばなりません。これは編集者の美的感覚を限られた資材をつかいながらその本の内容に即して表現せねばならぬということでもあります。

こうした諸条件を充分に貫徹できるのは、大変むつかしいので、古来、外国でも、ミルトン、ジョンソン、ヴォルテール、ベートーヴェン、バルザック、ハイネ、バイロンら著者の側からの出版者への苦情が述べられている、と同時に、出版者の側からいえば、著者の我侭や、世間知らずや、過大な自己評価のために悩まされるということになります。

しかし、著者対出版者の関係がうまくゆけば、交渉が円滑にゆけば、相互の好意と思いやりのうちに進められれば、そのときはじめて、一つの「出版文化」の形というものがつくられる、と考えられます。

みすず書房の場合でいいますと、このロマン・ロランとの結びつきによって、そのスタートの時期に一つの出版文化の形への努力、方向づけがすばらしい形で行われた、ということができます。

*

さて、片山、宮本、佐々木など諸先生の御協力を得て、ロマン・ロラン全集刊行のプランが現実にうつされることになり、その広告ははじめ予告として、戦争の終った翌年朝日新聞、一九四六年四月二日版にはじめて掲載されました。

内容見本の請求と予約注文で、広告代が回収できるほどの反響がありました。ちょうどその頃、新居格（ニイイネル）氏（一八八八―一九五一）、もともとアナーキスト運動や日本フェビアン協会の結成にも加わった著名な評論家ですが、この方が「ロランを想起する」という短文を東京新聞に寄せられまして、つぎのように述べられました。

「「ロマン・ロラン全集」の予告を新聞広告でみたわたしは、丁度、アンリ・ギルボーの「ロマン・ロランのために」を読んでいた際とて、注意が深く注がれた。……戦時中すべての文化人がロラン的な理想や感想を否定し、少なくとも曖昧に迷彩を施し、もっとも大切にしていなければならなかった、もっとも内奥の思想を、「紙屑同然に扱った」ことが日本の知識人にはなかったかと思うとき、ロランの態度を、戦後と雖も十分に再考察してみてよいのではあるまいか。わたしはギルボーの小冊子がわたしにとって反省の糧となったことを否めないのであった。わたしは、その意味からロランを想起した。が、時たまたまロラン全集の予告を見て、これこそ機宜に適した出版だと思わざるを得なかった。ロランは想起されねばならない。」（「東京新聞」昭和二十一・六・二十八）

この頃のスクラップブックを見ますと、同じ年、二十一年七月にはロランの「愛と死との戯れ」（俳優座第二回公演）の評が出ております。

「フランス革命を背景としてこの戯曲に描かれる、自由に根差した人生に対する問題は、現在的にも甚だわが国に通うものを持つ。小沢栄太郎、千田是也、村瀬幸子の三者三態にパーソナリティ濃き、しかも非凡な演技力が青山杉作の演出でみごとなみごとな諧調（ハーモニー）を保ちつつ、ロマン・ロランらしいある精神を伝えている。

一七九四年三月末にパリの一老革命議員とその年若な妻が、近づく死の跫音を聞きながら、自由が呼んだ情熱をのりこえ、自由の中にはじめて達しられた清冽な愛情を通して、われわれの心に「真実」が窓を開く。名作はいつの世にも名作であり、これを傷つけなかった成功を認める。殊に幕切れ十数分のうちに凝集した人間性の描出に拍手したい。干乾らび、吼え立て、醜悪なエロチズムに占據されたわが国の舞台が、久しぶりに好もしく、清らかな演劇をつくったよろこびに浸るのは、果たして記者一人のみであろうか。」（「読売新聞」昭和二十一・七・二十九）

また、その頃の本のおかれた状態を思わせる読書界概観の記事もあります。それを読んでみますと、

「用紙も不足しているし、電力や石炭をはじめ、必要な資材が乏しいためでもあろうが、最近は大型の書物の出版が余りなく大抵はB六判二〇〇―三〇〇頁のいわゆる「手ごろのもの」になった。しかし針金の製本がようやく糸のカガリに代わってきたのはよろこぶべきことであろう。装幀も、一時は随分ひどかったが、輓近ではともかくうまくなった。乏しい資材をたくみに使いこなしたものが多い。この点ではとくに、東京のみすず書房の出版物は一頭地を抜いている。ロマン・ロラン全集も、片山敏彦氏の「ロマン・ロラン」も、しばらく前に出た恒藤、下村、出口諸氏の合著「ヒューマニズム論」もしょうしゃとした立派な装幀である……」（長沢信寿「荒天に星を拾う」「京大新聞」（昭和二十二・九・十五）

一九四五年八月十五日が日本降伏の日でありますが、マックァーサーが占領総司令官として着任直後、日本の出版物について「日本出版法」というものが九月二十一日に公布されました。これがいわゆるプレス・コードといわれているものですが、その趣旨説明に「連合国最高司令官は日本に言論の自由を確立せんが為茲に日本出版法を発令す」と書いてあるのですが、全十ケ条のうち第一条は、報道は厳に真実に即するを旨とすべし、とあるのですが、二条から十条まで、ことごとく文章の末尾は「べからず」となっており、これは、趣旨説明とも、第一条とも、矛盾するものでありまして、まことに軍事占領とはかくの如きものか、の感を深くいたしました。

*

一九九八年から九九年にかけて、アメリカのメリーランド大学所蔵の「プランゲ文庫」の展覧会が東京と京都で開かれまして（早稲田大学、立命館大学主催）、私も見る機会を持ちまして、改めて、開業時代の出来事を思い出しました。

その展示品のなかに（カタログには写真も載っておりました）、私たちの「ロマン・ロラン全集」の第一回配本として準備していた戯曲「時は来らん」（片山敏彦訳）のゲラ刷一通がありました。検閲官による線引きやチェックがありました。そして表に supressed と書かれています。不許可です。この本は、出版不許可の刻印を押されたのです。

この作品は、イギリス帝国主義の、例のボーア戦争をテーマとして、そのときの将軍の心の内面における精神の葛藤ですね。つまり、自由とか正義・良心というもの――これは人間の心の奥底から絶対のものとして迫ってくるものですが――と、自分が社会から職業としての義務、軍人では殺人、暴力、虚偽などですが、この二つの対立と葛藤をえがいたものであります。アメリカの日本占領とは直接には関連しないのですが、検閲はこれを問題とし、読者には与えるべきでない、と判断したのです。ヒューマニティは、国内的にも、国際的にも迫害される、という一例です。

しかし、問題をもたないものについては、R・Rの著作が伏字もなく遠慮もなく出版できる可能性のある社会となったのです。翻訳書につきましては検閲と用紙制限のため戦争中殆ど刊行不能でありましたから、それらが堰を切ったように印刷出版されました。統制下のいわゆる表スベスベと裏ザラザラの仙花紙の本が多く出ました。そして出版社も二千社とか三千社とか云われました。この状況が約一年二ケ月ほどつづいたあと、一九四六年十一月一日占領軍の新しい命令が出ました。翻訳出版は翻訳権所有の確認の行われない限り、不可能となったのです。そして、外国の出版社に対し、新しく著作権契約を結ぼうとする商業取引は一切禁止されており、一ドル公定三六〇円で、ヤミ

で四〇〇円以上といわれましたが、その送金手段もなかったのであります。そういう意味で大変鎖国的になった、占領の実態が強化されたともいえます。

われわれはすでに、全集にとりかかっており、その時までに出版されたものは「時は来らん」に替って出たフランス革命劇の「獅子座の流星群」「コラ・ブルニヨン」の二冊でした。そこで思い出されたのが、片山先生あてのロマン・ロランの手紙（一九二六年八月一日）であります。

「私の友であるあなた方（尾崎喜八と、あなたと、倉田百三と、高田博厚と吉田泰司、それから、あなた（片山）の親友たち）に一般的にこれら新しい友愛のグループに私のどの本であってもあなた方の望まれる本を自由に日本語に翻訳し出版する許可を与えます」

この手紙が一九四七年十月二十三日、占領軍によってアプルーブされまして、我々の出版活動は継続できることになりました。しかしこの許可書には条件がつけられておりまして、版権所有者のありうべき異議申し立てに対しては、あえてアクセプトすべしということでありました。そして、ゲラ刷は許可番号をそえて司令部に提出しなければならぬこととなっておりました。

こうして、われわれは一応R・R全集の出版の継続ができることになり、ひきつづいて「愛と死との戯れ」「トルストイの生涯」「エンペドグレース」「ジャン・クリストフ」「ピエールとリュース」「魅せられたる魂」「ベートーヴェンの生涯」……の日本訳が刊行されていったのであります。

なぜR・Rがこのように戦後の日本社会に迎え入れられたのか？　ということを考えてみますと、ロマン・ロランの紹介はすでに明治末年からはじまるわけでありますが、それは「日露戦争」以後のロマンティシズムの高揚、デモクラシーへの方向づけに副って、主として雑誌「白樺」を中心にヨーロッパ文化の紹介がすすんでまいります。大正七年（一九一八）に第一次大戦が終ります。その前年からの大きな変化として、「中央公論」による吉野作造や「我

等」による長谷川如是閑（大正八）、「種蒔く人」（大正十）による小牧近江などの雑誌の主張にみられるような社会的自由を求める批判がつよまってまいりますが、なかんずく、この小牧近江の「種蒔く人」は、R・Rとアンリ・バルビュスの有名な論争（大正十一・八）を連載いたします。またロランのフランス革命劇「ダントン」の上演なども計画されています。「夢と死との戯れ」またロマン・ロランの親友マルセル・マルチネの「夜」なども築地小劇場で上演されました。問題は、そのあと芸術家R・Rを尊敬する人と、革命思想家として考えられたロマン・ロランを尊敬する人々とが、それぞれ分れて、または社会的にひきさかれて別陣営となってしまうのであります。こうした状況が敗戦時までつづきます。また敗戦後もずっとつづきます。

そしてR・Rの全体を知るためにはロランをその両側面を含む大きなシンフォニーまたはオーケストラとして理解しなければならない、オーケストラでは、それぞれのパートはピアノもヴァイオリン etc はそれぞれ別の役割ですが、音楽は一つなので、このオーケストラと同じようにロラン理解はロランの様々の層をふくむ全体の理解でなければならないのです。

そのためにはR・Rの個々の作品をすべて含む全集として刊行せねばならない、というのが、その頃の友の会や私共の動機でありました。

当時をふりかえってみますと、「ベートーヴェンの生涯」の序文の「窓をひらけ Rouvrons les fenêtres. Faisons rentrer l'air libre. そして自然の風、野の香り、澄んだ空気を入れよ、」という感動を今なお胸のトキメキで思い出すのであります。

そして、新しい日本が作られるとすれば、まさにこの思想家がその核心を示しているのではないか、と思いました。

そして、これは敗戦国なればこその素晴らしさ、ともいえるものであったのです。若きR・Rの友人であったマルヴィーダ・フォン・マイゼンブークはつぎのように申しております。

マルヴィーダは、一八七〇年の普仏戦争でフランスで敗れたことから、フランスの青年たちが汲みとった教訓、若い学生たちの熱意と真面目さ、から、一般的に歴史上にしばしば見られる教訓の一つとして、

「戦争の惨禍を経験すると、敗けた方が精神的に勝者であるようになることがしばしばある。なぜかというと、敗けた方は自分自身の中に沈潜していって、そこに自分たちの敗北の原因を求め、自分たちの欠点を矯正しようとするからである。ドイツもナポレオン戦争後において同様であった。不幸が英知の学校となる民族は幸なるかな」と。

＊

そして、敗戦の二年後の一九四七年に旧い憲法が廃止され、新しい憲法が日本に出来ました。憲法の前文と第九条の武力廃止の条項は、人類普遍の原理たるべきものとして高らかに掲げられたのであります。

一九四五年以前には政治は「国家理性（レーゾン・デタ）」の表現にすぎず理念イデーをふくむ文化ではありませんでした。新憲法によって初めて日本に「政治文化」が意識化されたのであります。

「文化」というカテゴリーのなかに「政治」を含める、何というすばらしいことでしょう。R・Rの思想と重なるものであったのです。

citoyenという国家の公民と、hommeという個人の人間が、ここではじめて同一のものとなるのです。その点で世界の現実に先がけたすばらしい宣言でありました。

それは現実の世界には実現されてはいないのですが、日本国を先頭としてキッカケとして、世界がそうなってゆく希望の表現として、われわれは考えたのであります。

＊

プラトンの対話「国家」のなかに、人間をつまり、皮膚で周囲をかこまれた存在なのですが、これを皮袋にたとえてその皮の中に三匹の動物が住んでいて、ふしぎな社会をつくっている、というお話があります。

その動物の第一は、まず頭の部分です。これは、記憶し、計算し、予測し、それらを結びつける部分で、つまり全体的展望をもつ部分、いわば知恵の部分が第一の動物です。しかし、この精神部分はしばしば身体のことを忘れ勝ちである。しかし、もう二匹の怪物が彼の自己陶酔の夢をぶちこわすので、忘れてもおれない。

二番目の怪物とは、心臓の場所に住みついて、感情、激情の場所であり、力や怒り、豊かさなどで充ちている。勇気というのも、ここに住んでいる。それは愛の一つの形である。しかし逆転して怒りにもなる。その姿は中腔（チュウコウ）になった筋骨がその「力」を表示している。呼吸のたびに刻一刻自分で目覚める作用をもつ。この力によって一切を決する怪物を、かりにライオンと名付ける。

第三番目の怪物、それは横隔膜の下部に住んでいる。これはヒドラ、七つの頭をもった蛇にたとえられる。これは無数の欲望がねそべっている場所であり、欲望とか欠乏とか卑屈とか臆病とかはこの部分にある。こうした三匹の動物が運命的に一緒に住む、いわば社会というものの原始的な型（カタチ）であります。

その頭脳部にある知恵が、この三者の間に平和をつくらなかったならば、この人間という皮で包んだ袋は、破れ去ってしまう。

この人間と社会との対比は大変面白いのですが、やはり、知恵が、人間社会の自然的側面を統御するということが問題のキーをなしている。

憲法問題に戻りますと、これはあるべき規準を示しているわけであって、日常の現実生活はこれとは全くちがうと

いうことに外ならない。

ですから上部にある精神の、魂の、知恵の力と、社会の下部にある、横隔膜の下部—にあるような無限の欲望との緊張と戦争、ということがまず現実的な、在るものとして前提とされております。

こうした自覚を持った平和憲法はすばらしいと思います。

*

さきに申し上げましたように、ロラン自身片山あての手紙によって、日本のR・Rの友らは、ロランの著作を自由に翻訳・出版できる許可を与えられておりましたし、またそれは、それとして占領軍によってapproveされ出版可能となった訳でありますが、経済的には、未決定のまま持ち越されたのであります。

そうしたところへ、一九四七年六月、昭和二十二年春ですが、R・Rの妹さんであるマドレーヌ・ロランから片山あての手紙が——ヨーロッパから初めての便りが届き、ヨーロッパと同じように、日本でもロランの友の会の設立についての希望がのべられたのであります。ヨーロッパでは、第二次大戦の終結後、一九四五年春から、ポール・クローデルを会長とする友の会の活動が始まっていたのです。

これをきっかけに、つづいてマリー・ロマン・ロラン夫人からの手紙で、ロマン・ロランの著作権はすべて彼女がひきついでいること、日本の出版事情についての問い合わせがまいりました。

日本のR・R友の会の結成は一九四九年六月ですが、これとともに、友の会のもっとも重要な事業として、ロマン・ロラン全集の刊行は考えられることとなりました。

ロランの本はひきつづきみすずから出版されており、当然のこととして、版権料は積立てられていましたが、しか

し定価に対する版権者への支払うべき金額の％は未定で、R・R夫人あるいはフランス出版社との契約まで、正確に定めることはできなかったのであります。

そのときまでは、一般的な著作権契約の慣習例についての知識がなく、ただ占領軍による翻訳書入札が一九四八年五月からはじまっており、これは入札ですから自由競争と、新刊書の枯渇状況という条件下で、最高の印税率は、ジョゼフ・グルー「滞日十年」36％に達するという過熱ぶりでした。

そのためR・Rについては先方の意向尊重ということのために、フランスの出版社はアルバン・ミシェルほか、10％からスタートして、15％に達するという要求となりました。

しかし、これは、ロランの本のような場合には、つまり長期的に売る本の場合にはきわめて非現実的であります。つまり、率が高すぎるのであります。

宮本先生は一九五〇年十一月にフランス政府招聘で渡仏されました。このとき、ロラン全集の永続とその完成のための先生のたいへんな御努力をいただきました。それは、ロマン・ロラン夫人やAlbin Michelとの交渉であります。

先生はパリのArchives R.R.（R・R研究所）でも自らR・Rの書簡草稿などの調査研究をなさいました。

先生の私あてのお手紙を直接つぎに紹介することにより先生の御努力の様子、当時の雰囲気を知っていただけたらと存じます。

＊

一九五一年一月廿日（土）午后　　パリ　　宮本正清

小尾俊人様　高田気附の第一便、写真、ありがとう。すぐ、最初の訪問にロラン夫人に渡しました。第二便は一昨、十八日朝つきました。廉子の病気のこと、家庭のことまで、あなたに御心配をかけてすみません。あなたのお手紙にあるとおり、快方に向ったと、本人からも二度便りがあり、ぼくも安心しました。同時に、ぼくの風邪（気管支カタル）も、九分通りぬけて、十七日から、ロラン夫人のところに、毎日通って、文献の研究をはじめました。ぼくの研究の対象は、「ロランの芸術における生命の高揚の精神」という角度から、資料をしらべたいと思っています。今、マルヴィダへの手紙をしらべています。カイエIに収めたのは、全体の四分の一くらい、全部は、七〇〇通にも達するものです。カナダ人、インド人、アメリカ人、ニュージーランド人、フランス人と、各国の研究者といっしょに、夫人のスクレテールたちもいっしょに、せまい室にいっぱいになって、実に和気にみち、一つの家族のように仕事をします。夫人は、ぼくに対しては、特に親切に、何でも特別にしてくれます。

アルバン・ミシェルの支配人の一人に、月曜（廿二日）の午前十時に、ロラン夫人のところで会う約束です。契約のことについて、ぼくとして、できるだけ努力して、交渉します。こっちの誠意をひれきしてみます。先方が、好意をもって理解してくれれば、よい解決がつくかと思います。もちろん、先方次第で、何とも予測はできませんが、ぼくとしてはベストをつくします。（中略）

ロラン夫人の家、つまり友の会の本部については、いろいろお話したいのですが、ロラン研究の文献整理の仕事は大したもの、驚くべきものです。各国の翻訳の多いのもおどろきます。数量、書物の外観体裁からいっても、ドイツと英米が第一でしょう。その点では、われわれの本は、ヨーロッパにくると、色と線が弱く、細く、とかく圧倒されます。これは、西洋と東洋との、精神、文化全般の問題とつながっているが、しかし、ぼくたちの本のことだけでも、

今後考えて、「世界」の中に、内容はもちろん、外的にも重圧を加えうるようにしたいものです。色や線についても。

アルコスの本が出ました。高田自身も、内容はつまらないので、がっかりしたと云っていました。しかし、高田の批判とは別に、ロラン夫人は、アルコスの本は、実に誤りだらけで、問題にもならないとふんがいしています。たとえば、ロランの生れた日も死んだ日もちがっている。ベルギーのドワジイ（ドワジーは文学者ではなく実業家だそうです）の書いた誤りをそのまま写している。ロラン夫人は、かねて、アルコスに、本を書くなら、印刷する前に、ちょっと見せてくれと云ったが、決して見せなかった、自尊心から。そして、いよいよ本が出てから、さんざんロラン夫人から、実際の誤りを示して叱られたので、すっかり、しょげて帰ったよしです。ロラン夫人は、アルコスの本の誤を一々、ページ毎の訂正表をタイプして、同書を贈られた人々に与えるそうです。したがって、高田が訳することも、みすずが出すことも、自由だが、ロランを愛する人々のためには、あんな、づさんな、内容のない本は出版しない方がいいと主張します。高田やアルコスとの約束もあって、みすずとしても困るかも知れないが、その点御一考片山とも話してください。（中略）

さて、昨廿二日、アルバン・ミシェルの支配人と、ロラン夫人の室で会いました。話は大分長く、私としてできるだけの努力をしましたが、手紙を短くするために、要点だけ述べます。A・Mの云分では、日本の他の出版者からは、数ケ月来送金がある。みすずから送金がないのは、ミッションとプルーを通じた正式の契約ができていないからで、右の順序を経ない契約は全部無効であると、プルーからA・Mへの手紙を持っています。A・Mとしては、いずれにしても、筋の通った（今日の出版関係における）契約をもつことと、送金を受けることが重要問題です。それで、次の点を大至急御研究の上御返事下さい。

一、プルーを通じて、契約を新にすれば、金銭の上でどの位損になるか。

二、従来の契約のままで、法規（日仏の出版関係）的に有効であるか。

三、今の契約のままで、プルーの手をへずに送金した方が有効か。送金の方法があるか。

次に、コピーライトの漸進率ですが、これは、日本の今の経済事情、出版事情、みすずの立場などについて、大いに説明に努めました。この数年の経済界の悪事情のため、大多数の新出版者が倒れたのに、みすずが倒れないし、今後も決して倒れないのは、みすずが、店として事業としての信用と、読者側の信頼支持を受けているからで、片山も私も、小尾氏の事業ではなく、知的協力者として絶対に支持しているから……と。しかし、率が高いことは、非常な困難を、今日では、生ずるので、今少し下げてほしいと。A・M。でもそれは原則的に承知しました。では、どの程度に下げるかときかれたので、それは私には、わからないので、すぐ小尾氏に手紙で照会して、返事を待とうということになりました。

右の会談を綜合的に見ると、私の見通しでは、率を下げてもらって、プルーの手を経る以外に正式の途がないなら、その途をへて、契約をしても、送金をはじめる方がよいと思われます。しかし金のことと、具体的問題については、あなたの方で、判断して、決定して下さい。プルーに金をとられることは、いささか不愉快でも、これは感情を超越して、実際的な問題ですから、実利を求めればいいと思います。シャゼル氏は、二月出版のマルセイエーズでフランスに帰省する由で、A・Mは、シャゼルの出発前に会って、シャゼルの手をへて、プルーに会い、（必要があるなら）契約のことを運んでほしいと云っています。しかし、シャゼルに会う必要があるかどうか、プルーとどんな交渉をすればいいかは、あなたの方でよくおわかりでしょう。シャゼルのような人間に交渉をもつことは全く不快ですが。

次に、コピーライトの率ですが、A・Mに対して、私は、「他の例もあるだろうから、もちろん法外な低率を要求するのではない。合理的な率でいいから」と云いました。A・Mは、最初の五〇〇〇以上というのを、一〇〇〇〇以上はいくらという風に、変えてもいいと云っていましたが、そういうテクニックのことは、どっちがみすずにとって

有利だか、私には判断ができないので、それは小尾氏から希望をきくことにしようと、私は答えました。それで、あなたの希望通りの表をつくって送って下さい。それによって、交渉します。これは私の希望的観測で、そうは、問屋や降ろさいかも知れないが、過去の出版物全体にわたって、新率を適用して、なるべく多額（みすずとしてできる限り）を第一回に払い、漸次送金することにしてはどうでしょう。その点で、プルーの手をへて、新契約をすることが、みすずにとって有利にはなりませんか。しかし、これは、数字的に私には判断できないので、私の言葉に重きをおかないで下さい。

＊

一九五一年六月一日　午后　　**パリ**　　宮本正清

五月廿七日に、二週間の旅を終って、パリに戻り、翌廿八日（月）にロマン・ロラン夫人の研究室に行ったら、夫人が「小尾氏がA・Mに送金してきた。これで、小尾氏を信用できる」と、うれしそうに云われたので、私も、ほっとし、心からうれしくなりました。A・MにしてもR・R夫人にしても、われわれを疑っていたというよりも、仕事のなり行きを気にしていたのです。そして、ロランが生存中も、外国の、R・R翻訳書によって出版者は巨万の富をえているのに、R・R自身には、一文の収入にもならないということを、R・Rの記録の中で、たびたび読んでみると、R・R夫人の心配も、たんに私が、サンチマンタルマンに説明し、保証するだけでは、足りなかったわけです。今後は、われわれの云うことにも、いっそう信用があたえられると思います。

＊

一九五一年八月三十一日　午后　　**パリ**　　宮本正清

小尾俊人様　八月十四日消印のお手紙、旅先のベルギーで受けとりました。つい、落かぬ、慌しい日々のためにと、なほよく考えてからと、パリに戻ってから御返事をするわけです。十五万円ずつ払うことについては、ロラン夫人に、折を見て話します。形勢のよい時に。私の考では、承諾すると思います。もししなければ、日記の草稿をもらわなくてもいいでしょう。今すぐは。あまり御心配なさらないように。とにかく、あなたも、ぼくも、こうした、商売人の掛引はいやですが。ヨーロッパ人の、ねばりづよい外交には叶いません。しかし、こちらも少し、ずるく、かまえてもいいかもしれません。いずれにしても、A・M、プルーの、細工なら仕方がないが、ロラン夫人が、ほんとに、主張することだったら、悲しい、情けないことです。ただ、あなたも、ぼくも、もっとあつかましく、づ太くなったがいいでしょうが、それができないのが、苦しい原因です。しかし、他の人々の性格も変えることができない以上、また、ベストをつくして対処しましょう。ベルギー旅行中、私はいろいろ考え、私が原稿をかいて、片山君に署名してもらって（或はあなたと連名で）、ロラン夫人に出してはとも、思っているのです。いずれにしても、よい方法を考えましょう。こうした、掛引を離れてみると、ロマン・ロランが、もし生きていて、彼に話すのだったら、どんなに、紳士的に、フランス人としては例外的に清純な気持で、ぼくたちの希望を快諾してくれたことでしょう。しかし、こういう、サンチマンタリテは、事業に混じてはならないのですが。」

（以下略）

＊

（この初稿は一九七〇年研究所の講演のためのもの、二〇〇一年二月加筆。）

参考資料

ロマン・ロラン邦訳：出版年表

（一九一四―一九四二）

一、ロラン作品（単行本）邦訳の一九四五年以前のものを年次順に収めた。

一、訳者名の表示で、植村宗一は、直木三十五と同一人であり、野尻清彦は大仏次郎の本名である。

一、ロランに直接手紙を書いて、序文をのせたのは市谷信義である。「マハトマ・ガンヂー」の訳は市谷、福永、住谷穆、宮本の四点が出た。（このうち住谷訳のみ未見）

発行年	書名・題名	訳者	出版社
一九一四	闇を破って〔J・C、1・2〕	三浦関造	警醒社
一九一五	ベートーフェン竝にミレー	加藤一夫	洛陽堂
〃	ミケランジェロ	木村荘八	洛陽堂
一九一六	トルストイ	成瀬正一	新潮社
〃	近代音楽家評伝	尾崎喜八	洛陽堂
一九一七	ジャン・クリストフ（1）（2）（3）	後藤末雄	国民文庫刊行会

一九一七	民衆芸術論（新演劇の美学）	大杉　栄	阿蘭陀書房
〃	争いの上にあれ	木村荘太	天弦堂
一九一八	ジャン・クリストフ（4）（5）（6）	後藤末雄	国民文庫刊行会
一九二〇	ロマン・ロラン全集（1） 信仰の悲劇 リルリ	新城和一 植村宗一	人間社 出版部
〃	ロマン・ロラン全集（2） 七月十四日、ダントン、ミレー、民衆劇論	木村荘太	人間社出版部
一九二一	トルストイの生涯	宮島新三郎	杜翁全集刊行会（春秋社）
〃	ジャン・クリストフ（1）～（4）	豊島与志雄（豊島訳は一九二三年、全四巻で完結）	新潮社
〃	信仰の悲劇	新城和一	人間社出版部
〃	ロマン・ロラン全集（3） 現代の音楽家、ベートーヴェン、戦ひを超絶して	木村荘太	人間社出版部
〃	先駆者	細木盛枝	世界思潮研究会

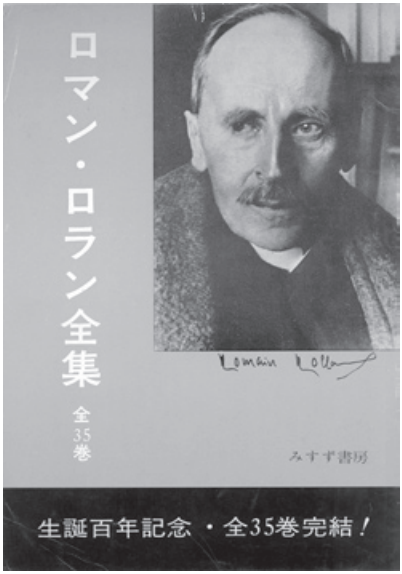
〃	先駆者	野尻清彦	洛陽堂
〃	トルストイ論、先駆者	植村宗一	人間社出版部
〃	リルリ	植村宗一	人間社出版部
一九二二	現代の音楽家	木村荘太	二松堂書店
〃	革命劇三部作（狼・七月十四日、ダントン）	木村荘太	二松堂書店
〃	民衆劇論	木村荘太	二松堂書店
一九二二	ミケランゼロ評伝、狼	植村宗一	人間社出版部
〃	コラス　ブルーニヨン	植村宗一	人間社出版部
〃	クルランボオ	野尻清彦	叢文閣
一九二二	戦争進化之生物学的批判の序文（一九一八年八月）	山本宣治	内外出版社
〃	信仰の悲劇	新城和一	冬夏社
一九二三	先駆者	木村荘太	元泉社
〃	聖王ルイ	新城和一	第一書房
〃	ガンヂー論	福永渙	アルス
〃	トルストイ、ベートーヴェン、ミレー	木村荘太	元泉社
一九二四	リリュリ	高村光太郎	叢文閣
〃	天支（トルストイ論・ベートーヴェン論・ミレー論）	木村荘太	元泉社
〃	ピエールとリュス	野尻清彦	叢文閣
〃	先立ちて来る者	大沢章	改造社

一九二五	ミケルアンジェロ及びミレー	木村荘太	新生堂
〃	魅せられたるたましひ第一巻（アンネットとシルヴィ）	布施延雄	至上社
〃	狼	高橋邦太郎	新潮社
一九二六	近世音楽の黎明（過去の国への音楽の旅）	大田黒元雄	第一書房
〃	愛と死との戯れ	片山敏彦	叢文閣
〃	ミーレー　その生活及び芸術	森口多里	弘文館
一九二七	ベートオベン	高田博厚	叢文閣
〃	ヘンデル	高田博厚	叢文閣
〃	花の復活祭	尾崎喜八	叢文閣
〃	時は来らん	片山敏彦	叢文閣
〃	マハトマ・ガンヂ	市谷信義	叢文閣
〃	愛と死との戯れ	片山敏彦	岩波文庫
一九二八	群狼	小川泰三	新潮社
〃	狼、リリュリ	高橋邦太郎	近代社
〃	過去の音楽家	大田黒元雄	第一書房
一九三〇	ベートーヴェン・偉大な創造の時期	高田博厚	春秋社
一九三二	獅子座の流星群	片山敏彦	岩波文庫
〃	信仰の悲劇	新城和一	春陽堂文庫

一九三五	ジャン・クリストフ(1)〜(7)	豊島与志雄	岩波文庫
一九三六	ジャン・クリストフ(8)	豊島与志雄	岩波文庫
一九三七	敗れし人々	宮本正清	弘文堂
〃	闘争の十五年	石井友幸	白揚社
一九三八	ベートーヴェンの生涯	片山敏彦	岩波文庫
一九三九	ミレー	蛯原徳夫	岩波文庫
一九四〇	魅せられたる魂(1)	宮本正清	岩波文庫
一九四一	〃(2)(3)(4)	〃	〃
〃	ゲーテと音楽?	柿沼太郎	高山書院
〃	過去の音楽家	大田黒元雄	第一書房
〃	姉と妹(アンネットとシルヴィ)	高橋広江	今日の問題社
〃	今日の音楽家たち	大田黒元雄	第一書房
〃	新生印度の預言者(ヴィヴェカーナンダの生涯)	近藤宗男 森本恒夫	日新書院
〃	ミケランジェロの生涯	古川達雄	二見書房
一九四二	ゲーテとベートーヴェン	新庄嘉章	二見書房
〃	聖雄ガンディ	宮本正清	東和出版社
〃	魅せられたる魂(5)(6)(7)	宮本正清	岩波文庫

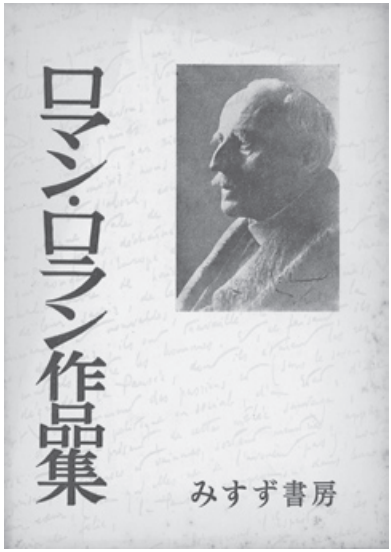
(「ユニテ」28号二〇〇一・四収録)

「ロマン・ロラン全集」（第一次）全七十巻
1947 年 1 月～ 1954 年 10 月　美篶書房



「ロマン・ロラン全集」（第二次）全三十五巻
1958 年 11 月～ 1966 年 8 月　みすず書房

「ロマン・ロラン日記」 みすず書房



「ロマン・ロラン作品集」 みすず書房

「ロマン・ロラン全集」（第三次）四十三巻
1979 年 11 月～ 1985 年 12 月　みすず書房

ロマン・ロラン全集（第三次）43巻内容　みすず書房

巻数	分類	収録作品
1	小説Ⅰ	ジャン・クリストフ　Ⅰ
2	Ⅱ	ジャン・クリストフ　Ⅱ
3	Ⅲ	ジャン・クリストフ　Ⅲ
4	Ⅳ	ジャン・クリストフ　Ⅳ
5	Ⅴ	コラ・ブルニョン、ピエールとリュース、クレランボー
6	Ⅵ	魅せられたる魂　Ⅰ
7	Ⅶ	魅せられたる魂　Ⅱ
8	Ⅷ	魅せられたる魂　Ⅲ
9	戯曲Ⅰ	聖王ルイ、アエルト、時は来らん、ロラン／リュニェ＝ポー往復書簡
10	Ⅱ	〔フランス革命劇1〕花の復活祭、七月十四日、狼、理性の勝利、愛と死との戯れ
11	Ⅲ	〔フランス革命劇2〕ダントン、ロベスピエール、獅子座の流星群、民衆劇論
12	Ⅳ	敗れし人々、モンテスパン夫人、リリュリ、機械の反抗、三人の恋する女
13	Ⅴ	〔初期戯曲〕オルシーノ、バリオーニ一族、カリグラ、ニオベ、マントーヴァの包囲、ジャンヌ・ド・ピエンヌ
14	伝記Ⅰ	ベートーヴェンの生涯、ミケランジェロの生涯、ミレー、マハトマ・ガンジー

15 Ⅱ 〔生けるインドの神秘と行動〕 ラーマクリシュナの生涯、ヴィヴェカーナンダの生涯と普遍的福音

16 Ⅲ ペギー

17 自伝 回想記、内面の旅路、幼児の思い出

18 エセー 〔政治論集1〕 戦いを超えて、先駆者たち、闘争の十五年、革命によって平和を

19 Ⅱ 〔芸術論・政治論集2〕 いかにして戦争を妨げるか？ 新聞・雑誌掲載論文、メッセージ、アピール等。演劇について、真であるがゆえに私は信じる、アグリゲンツムのエンペドクレス、道づれたち、ジャン＝ジャック・ルソー、ガブリエレ・ダヌンツィオとドゥーゼ

20 芸術研究 Ⅰ 近代音楽劇の起源、ミケランジェロ、十六世紀イタリア絵画の凋落

21 Ⅱ ありし日の音楽家たち、今日の音楽家たち

22 Ⅲ 過去の国への音楽の旅、ヘンデル、ベートーヴェンの「不滅の恋人」、スタンダールと音楽、ブリュニエール『新音楽史』のための序文

23 Ⅳ 〔ベートーヴェン：偉大な創造の時期1〕 エロイカからアパッショナータまで、ゲーテとベートーヴェン

24 Ⅴ 〔ベートーヴェン：偉大な創造の時期2〕 復活の歌、ベートーヴェンの恋人たち、ベートーヴェンへの感謝、ベートーヴェンが好きでない一女性への手紙

25 〔ベートーヴェン：偉大な創造の時期3〕 第九交響曲、後期の四重奏曲、フィニタ・コメディア

26	日記Ⅰ	ユルム街の僧院、『ジャン＝クリストフ』から『コラ・ブルニョン』へ、ユゴーの死ほか、ドイツ旅行・イギリス旅行ほか、スペイン旅行
27	Ⅱ	戦時の日記　Ⅰ　一九一四―一九一九
28	Ⅲ	戦時の日記　Ⅱ　一九一四―一九一九
29	Ⅳ	戦時の日記　Ⅲ　一九一四―一九一九
30	Ⅴ	戦時の日記　Ⅳ　一九一四―一九一九
31	Ⅵ	インド（日記、一九一五―一九四三）、インド補遺（日記、一九一五―一九四三）、日記抄1 一九一九―一九二〇の日記、2　ベートーヴェン百年祭のためのウィーンへの旅（一九二七）、3　ゴーリキー邸滞在記（一九三五）
32	書簡Ⅰ	マルヴィーダ・フォン・マイゼンブークへの手紙　一八九〇―一九〇三、ルイ・ジレ＝ロマン・ロラン往復書簡　一八九七―一九四三
33	書簡Ⅱ	ローマの春、ファルネーゼ宮へ還る
34	Ⅲ	母あての手紙、私は危険になりはじめた
35	Ⅳ	したしいソフィーア　一九〇一―一九三二
36	Ⅴ	どこから見ても美しい顔、日本人への手紙、レジスタンス闘士への手紙
37	Ⅵ	二人が出会う―J・R・ブロックとの往復書簡　一九一〇―一九一八、フロイライン・エルザ―エルザ・ヴォルフ宛て書簡　一九〇六―一九一六

38	Ⅶ	往復書簡〔ツヴァイク、シャトーブリアン、フェリエール、シュピッテラー、「ユロップ」編集委員、ヘーベルリン〕、手紙〔セシェ、ベルトー、「ラ・ヴォーチェ」、ブーヴィア、ラミュ、サン＝プリ、オードゥー、ボダン、パッシュ、ボードゥアン、マンデール〕
39	Ⅷ	挨拶と友情〔アランとロラン　一九〇七―一九三八〕、岸から岸へ〔ヘッセとロラン　一九一四―一九五一〕、伯爵様〔ロランとトルストイ　一八八六―一九三六〕
40	Ⅸ	R・シュトラウスとロマン・ロラン　一八八九―一九二七、R・シュトラウスの思い出、善き隣人〔ブリヴァとロマン・ロラン〕
41	Ⅹ	精神の独立〔ジャン・ゲーノ＝ロマン・ロラン往復書簡〕
42	Ⅺ	タゴールとロマン・ロラン　一九一九―一九二二、ガンジーとロマン・ロラン　一九二三―一九三九
43	雑纂・評伝	エンペドクレース、サヴォナローラ、ルイ・ド・ベルカンの最終裁判　一五二七―一五二九、フィレンツェ日記抄　一九一〇―一九一一、他の著作への序文評伝：ロマン・ロラン（ジャック・ロビシェ著）

ロマン・ロラン全集（第三次）翻訳者（五十音順、数字は巻数を示します）

上田秋夫	20
蛯原徳夫	10、12、14、17—19、22、24—31、34、36、39、42、43
小笠原佳治	12
片岡美智	23
片山敏彦	1—4、9—11、14、17、24、27、29、30
加藤行立	13
片山　昇	40
片山寿昭	40
北沢方邦	25
玄　善允	13、19
小島達雄	9、13
佐々木斐夫	20、23、25
清水　茂	29、32、39
新村　猛	18
高田博厚	22
戸口幸策	20
西村太一	9、43
野田良之	21
波多野茂弥	9—13、19、22、26、27、29—31、43
原田熙史	25
三木原　浩	13、19
美田　稔	29
道宗照夫	27、29、30
三野博司	13
宮本正清	5、6—8、10—15、17—19、27—37
村上光彦	12、16、28、30、31
森　孝子	13
山上千枝子	32、33、35、37
山口三夫	18—20、26—29、37、38、41、43
山崎庸一郎	16、39
山本顕一	25
吉田秀和	24、25

八、　関係者の紹介

関係者の紹介

友の会・研究所の運営実務にあたった人々は、一九四九年の創立以来、多数に至る。主要な貢献者を記しておく。著書・訳書はロマン・ロラン関係にほぼ限定する。

片山敏彦（一八九八―一九六一）

高知市に生まれる。一九二四年三月、東京帝国大学ドイツ文学科卒業。同年四月法政大学予科ドイツ語専任教授となる。大正九年『ジャン・クリストフ』に感動。大正十四年（二十七歳）ロランに手紙を送る。高村光太郎、尾崎喜八、高田博厚らと第一期「ロマン・ロラン友の会」を作る。大正一五年『愛と死との戯れ』を訳す（叢文閣）。同時に築地小劇場で上演。昭和二年『時は来らん』出版。昭和四年―六年、ヨーロッパに滞在。ロラン・マルチネ、ヴィルドラック、ヂュアメルらと親交。一九三八年第一高等学校教授、一九四七年東京大学ドイツ文学科講師も歴任する。『獅子座の流星群』出版。昭和十二年評伝『ロマン・ロラン』出版（六芸社）。『ベートーヴェンの生涯』出版。昭和二十一年『ロマン・ロラン全集出版』（みすず書房）発足。第一回配本は片山訳『時は来らん』占領軍検閲で禁止され『獅子座の流星群に』差し替え、同年出版。昭和二十四年、フランスでの「ロマン・ロランの友の会」設立に呼応して宮本正清らと「日本・ロマン・ロランの友の会」が発足、その委員長となる。昭和二十九年、五年がかりの全集版『ジャン・クリストフ』完訳出版。一九六一年肺がんのため死去。

『片山敏彦著作集』全十巻（みすず書房）出版。一九九三年より年刊の「片山敏彦文庫だより」（片山敏彦文庫の会・

代表朝長梨枝子）出版。一九九八年六号で終刊。一九九八年、『片山敏彦の世界　アルバム　生涯と仕事』（小尾俊人）編　生誕百年記念出版とした。なお、文庫は「近代文学館」へ寄贈された。

宮本正清（一八九八―一九八二）

高知県長岡郡上倉村〈南国市〉に生まれる。一九二一年早稲田大学文学部フランス文学部入学、近代フランス文学を学ぶ。『ジャン・クリストフ』に感動、一九二四年、わが国で初めて卒業論文にロマン・ロランを取り上げる。一九二六年まで大学院で研究、在籍の傍ら早稲田フランス文学会及び同大学専門部で仏語仏文学を講ずる。一九二五年「曙」を中心とした子供向け『ジャン・クリストフ』の抄訳出版。一九二六年、ヴィルドラック、来日の折、片山敏彦に出会う。一九二七年関西日仏学館（財団法人日仏文化協会）設立に参画する。書記長（のち主事）兼教授となる。立命館大学予科教授を経て、一九四二年立命館大学教授。戦時下、昭和二十年六月十五日、関西日仏学館勤務中、京都市中立売署へ強制連行，拘禁される。敗戦後八月十六日に釈放される。昭和二十四年六月日本ロマン・ロラン友の会設立に加わる。片山敏彦委員長、副委員長に就任。昭和二十五年（一九五〇）大阪市立大学教授（仏語・仏文学）。仏国政府に戦後最初の大学教授として招聘され、ロラン未発表文献調査、米国経由で昭和二十七年帰国。ロマン・ロランのインド研究によりインド政府から招待される。昭和三十六年、日本ロマン・ロラン友の会委員長。昭和三十七年大阪市立大学定年退職。昭和四十四年京都精華短期大学教授。昭和四十六年（一九七一）私財を投じて財団法人ロマン・ロラン研究所を設立して理事長。『ロマン・ロラン全集』（一九四七年―一九八五）（翻訳、十八作品、共訳五作品）大作『魅せられたる魂』は戦前岩波文庫で刊行。五年の闘病ののち肺結核のため死去。

小尾俊人

一九二二年長野県に生まれる。昭和十五年、一九四十年十九歳で上京、羽田書店に入る。昭和十八年、学徒出陣で入隊、暁部隊通信部隊に属す。明治学院大学英文科卒業。敗戦後「みすず書房」の創業の責任編集者となり、佐々木斐夫を通じ、片山敏彦を知る。その友、宮本正清とともに共同で、日本語の完全なロマン・ロラン全集の出版を計画、努力した。平成二年に退職。

著書『本が生まれるまで』『本は生まれる。そして、それから』ほか。

佐々木斐夫

一九一三年、横浜山手に生まれる。上智大学予科を経て一九三八年法政大学文学部卒業。成蹊大学教授。翻訳にロマン・ロラン全集『ベートーヴェン研究』第一巻ほか。一一九頁参照。

蛯原徳夫

（一九〇四―一九八八）大阪市立大学教授、青山学院大学教授，聖徳学園短期大学教授を歴任。著書『ロマン・ロラン研究』訳書　ロマン・ロラン全集　『過去の国への音楽の旅』ほか。一一九頁参照。

波多野茂弥

一九二四年京都府に生まれる。京都大学文学部卒業。大阪市立大学教授を経て帝塚山大学教授。訳書　ロマン・ロラン全集　フランス革命劇　『ダントン』ほか。一二〇頁参照。

山口三夫

（一九二八年―一九九七）奈良県に生まれる。東京大学文学部卒業。静岡大学教授。著書『歴史のなかのロマン・ロラン』『ロマン・ロランの生涯』『ロマン・ロランとともに』『青春のたたかい：ロマン・ロランをめぐって』訳書ロマン・ロラン全集『先駆者たち』『闘争の十五年』ほか。一二〇頁参照。

村上光彦

一九二九年佐世保に生まれる。東京大学文学部卒業。成蹊大学文学部教授。訳書ロマン・ロラン全集『モンテスパン夫人』ほか。一二〇頁参照。

青木やよひ

一九二七年静岡生まれ。東京薬科専門学校卒業。みすず書房に勤務。ロマン・ロラン全集編集事務に携わりつつ「友の会」の実務担当。片山敏彦の知遇を得て文筆活動をはじめる。ベートーヴェン研究に取り組み著書多数。

九、　京都友の会と財団法人ロマン・ロラン研究所

日本・ロマン・ロランの友の会　京都支部

日本・ロマン・ロランの友の会京都支部は一九四九年七月に会員数約五〇人、東京本部約九〇人に次ぐ規模で発足した。

その第一回会合は、「日本・ロマン・ロランの友の会」京都支部、一九四九年七月三十日〈土〉午後五時―七時と第一ページに中心となる宮本正清の字で大学ノートに記され、見開きの次のページには参加者各自による姓名、住所が記されている。同志社総長になった住谷悦治など二七名の参加者でスタートしたこの会合は、毎回大学ノートに詳細に記録され今日まで絶えることなくつづきノートが十二冊、二〇〇九年八月二十五日、現在で四五三回になっている。

日本・ロマン・ロランの友の会発足時、東京、京都のほか東北、富山、長野、神奈川、静岡、名古屋、三重、和歌山、宇部、高知、福岡、大阪の各支部が誕生し、活動してきたが、東京本部が一九六〇年前後に活動を終え、存続しているのは京都支部だけとなり、日本・ロマン・ロランの友の会を継続して活動を続けている。活動状況を伝える主な資料は機関誌『ユニテ』である。

活動のあらまし

会合場所

第一回から一九六二年五月まで関西日仏学館、ときには百万遍の喫茶店　進々堂なども。

一九六二年六月以降は宮本正清宅（京都市左京区田中大久保町）。

一九七一年以降は財団法人ロマン・ロラン研究所（京都市左京区銀閣寺前町）。
一九七九年から一九八三年三月まで京都大学楽友会館、京都府、京都市の公的施設の使用。
一九八三年四月以降は財団法人ロマン・ロラン研究所にて開催され現在に至っている。

会合、輪読、読書会の内容

ロマン・ロランの著作として取り上げられた主なものは『ジャン・クリストフ』一一七回、『魅せられたる魂』八十回、『ベートーヴェン』四十回。『コラ・ブルニョン』二十二回。『クレランボー』十七回、その他の著作七十四回。さまざまな視点で、音楽、女性、戦争などのテーマ別が八十回、その他ロランの誕生、命日などを記念するお茶会、ピクニックなどの親睦会が二十三回となっている。参加者の延べ人数は約六三五〇人。

財団法人ロマン・ロラン研究所

これまでの友の会活動を基盤にして、ロマン・ロランの精神を恒久化するため一九七一年三月、宮本正清は印税を基に財団法人ロマン・ロラン研究所を設立した。

活動はこれまでの例会であるロランの作品を読んで学習する伝統の輪読、読書会に公開講演を加え二本立てにしてあわせてロマン・ロランセミナーとした。読書会はロマン・ロラン研究所で、公開講演は講師を招き関西日仏学館で開催した。その他、音楽会なども定期的に催している。

財団法人ロマン・ロラン研究所設立趣意書

ロマン・ロラン（一八六六―一九四四）は、日本人にもっとも強く深い、精神的、道徳的影響を与えたヨーロッパの芸術家の一人であります。武者小路実篤、志賀直哉等の白樺派の人々をはじめ、高村光太郎、尾崎喜八、大仏次郎、小島政二郎その他の作家、音楽家、画家、彫刻家、さらに科学者、実業各方面にいたるまで、その青春時代をロマン・ロランの思想、芸術の光に照らされ、人格的感化陶冶を受けた者は枚挙にいとまないのであります。

しかし、ロマン・ロランの真の偉大さと、存在価値は、たんに文学的分野にとどまるのではなく、むしろその博大な人間愛にあります。人種、文化、文明等のあらゆる国境を超えて、真に世界的、人類的である彼の愛の精神は、『ジャン・クリストフ』『魅せられたる魂』その他の小説、戯曲、伝記、文学的、音楽的、歴史的研究のみならず、現代社会のあらゆる不正と戦うために、人権と自由を擁護するために、多くの政治的、社会的論争を生涯つづけました。

さらに、ロランは、東洋と西洋、ヨーロッパとアジアとの相互理解、信頼、尊敬と両者の協力が、人類の進歩と平和のために、いかに必要であるかを説き、われわれの文明を堕落と頽廃から救いうる唯一の道は、アジアとヨーロッパが、あたかも車の両輪のように支持し合い、各人種、各国民がユニークな文明、固有の伝統を尊重、保存して、人類全体の偉大な共有財産として、現在のそれに勝る大文明を創造すべきだと言っております。ロランはインドの哲学、宗教を研究した数巻にわたる著述の中で、東洋の精神のもっとも深遠で高邁なものは、西洋のそれと本質的に異なるものでないばかりか、両者がほとんど完全に一致していることを実証しております。

このような思想家、芸術家、偉大な人間が、わが日本において、半世紀以上にわたって、変わることなく、今もなお、青年層に親しまれ、愛読され、尊敬されていることは、日本のために、喜ぶべきことと信ずるのであります。

一九七〇年十二月（設立者・初代理事長　宮本正清）

理事・監事

理事（理事長）　宮本　正清
理事（常務理事）　佐々木昌義
理事（常務理事）　波多野茂弥
理事　末川　博
理事　住谷　悦治
理事　岡本　清一
理事　山田　忠男
理事　野田　良之
理事　小尾　俊人
理事　片山　治彦
監事　南大路振一
監事　尾埜　善司

読書会については一三一ページに報告。

講演会、音楽会、映画会

関西日仏学館などの公開講演会は六十八回、参加者は約一四〇〇人。音楽会は関西日仏学館を中心としながら、京都市コンサートホール、国際交流会館、京都府民ホールアルティー、さらにはヴェズレーの教会を含め十四回、約

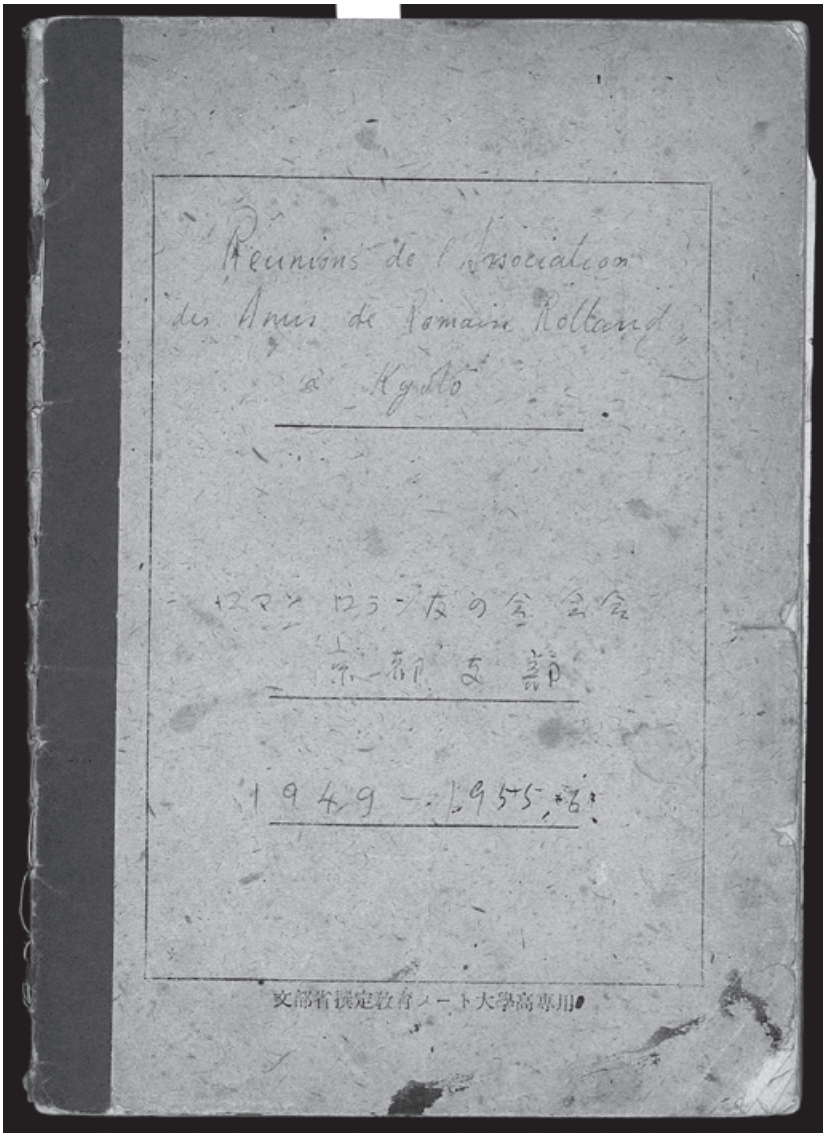
二五〇〇人。映画会は京都文化博物館で二五〇名ほど。朗読会は関西日仏学館、京大時計台記念ホールなど五回、約二〇〇人。

財団法人化以降の活動はすべてユニテに紹介され、ホームページに掲載されている。

一九四九年から一九六〇年代のユニテも順次ホームページに掲載できるように計画中である。

機関誌『ユニテ』について

第一期　一号―一五号（一九五〇年十一月―一九五八年一月）
　事務所　みすず書房気付、東京都文京区春木町一丁目二二番地
第二期　一号―四号（一九六四年一月―一九六六年十二月）
　発行　一―三号　大阪市北区中ノ島三、朝日ビル九〇五号　発行人　石田喜枝子、
　四号　京都市左京区北白川東小倉町五〇番地、波多野茂弥方
第三期　一号―三六号（一九七三年十一月―二〇〇九年四月）以後刊行予定
　発行　財団法人ロマン・ロラン研究所　京都市左京区銀閣寺前町三二



1949 年　友の会読書会記録ノート　第 1 冊

1958 年　　蛯原　徳夫　　片山　敏彦　　宮本　正清

1958 年・大阪支部　　二番目

波多野　　石田喜枝子

1958 年・高知支部
片山　　宮本　　上田

1959 年・津支部

1965 年・京都支部　宮本正清宅

南大路　　大橋

1966 年・京都支部　無鄰庵　お茶会

1971 年 4 月　ロマン・ロラン研究所設立パーティ
末川　博

1998 年　ロマン・ロランを偲んで　忘年会　　中央　尾埜理事長
ロマン・ロラン研究所

ロマン・ロランの友の会京都支部の活動

一九四九
7・30　ロマン・ロランの友の会京都支部第一回会合
一九五〇
11・15　宮本正清渡仏
一九五二
2　宮本正清アメリカを経て帰国
一九五三
4・20　公開講演
ロマン・ロランと真理　蛯原徳夫
ロマン・ロランの宗教性　片山敏彦
ロマン・ロランの文学　宮本正清
一九五四
12・4　ロマン・ロランの没後十年祭記念講演会
ロマン・ロランとブルゴーニュ　グロボワ
『ジャン・クリストフ』の思想構造　蛯原徳夫
ロマン・ロランが与えるもの　宮本正清

一九五五
1・29　ロマン・ロランとヘルマン・ヘッセ　蛯原徳夫
一九六〇
1・1　宮本正清インドへ出張
3・22　インドを旅して(1)　宮本正清
5・14　インドを旅して(2)　宮本正清
一九六一
4・29　「タゴール百年祭」に出席して
10・28　片山敏彦追悼会（十月十一日死去）　森本達雄
一九六六
1・29　ロマン・ロラン生誕百年記念の集い
一九六八
8・13～9・22　ロマン・ロラン展　東京、大阪、名古屋巡回
マリー・ロラン夫人来日

ロマン・ロラン研究所の活動

一九七一

5・15　ロマン・ロランと日本の青年（映画『ロマン・ロラン』上映）　宮本正清

11・27　苦悩のなかのインド　森本達雄

一九七二

6・24　ロマン・ロランとフランス革命　波多野茂弥

一九七三

5・26　ロマネスク美術　ブルゴーニュ地方の教会を中心にして　高井博子

12・18　私の人間観　末川博

一九七四

6・29　私の通った芝居の道　毛利菊枝

12・5　ロマン・ロラン没後三十周年記念―講演と音楽の夕べ　佐々木斐夫

ロマン・ロランと美術　演奏　玉城嘉子

一九七六

7・11　ロマン・ロランとゲーテ　南大路振一

ユダヤ民族と西洋文明　岡本清一

一九七七

2・10　中国文学とロマン・ロラン　相浦杲

一九八二
11・16　宮本正清死去
一九八三
3・15　追悼・宮本正清「みすず」三月号
一九八九
4・20　ロマン・ロランの反戦思想と現代　加藤周一
6・9　ロマン・ロラン全集と私　小尾俊人
9・29　ロマン・ロランの革命劇から―フランス革命二〇〇周年の記念に　中川久定
11・17　ロマン・ロランとの出会いから　尾埜善司・今江祥智
一九九〇
1・27　ロマン・ロランに負うもの―平和と音楽　新村猛
5　ロマン・ロランの足跡を訪ねる旅
6・2　ロマン・ロランとガンディー　森本達雄
9・26　『魅せられたる魂』と私　樋口茂子
10・26　占領時代における日本社会とロマン・ロラン　小尾俊人
11・30　ロラン・片山・ヘッセ　宇佐見英治
一九九一
3・1　ロマン・ロランと私　松居直

4・19　（財）ロマン・ロラン研究所設立二十周年記念
杉田谷道レクチャーリサイタル
ベートーヴェン後期ピアノソナタの夕べ　杉田谷道

6・4　ロマン・ロランとベートーヴェン　青木やよひ

9・27　ロマン・ロランとデュアメル　村上光彦

10・25　ロマン・ロランの思想の二面性　兵藤正之助

11・29　初めにロマン・ロランあり　岡田節人

一九九二

6・26　〈大洋感情〉と宗教の発端　岩田慶治

9・25　ロマン・ロランとイタリア　戸口幸策

10・30　ロマン・ロランの革命劇をめぐって　鶴見俊輔

11・27　宮本正清　没後十年記念追悼会
静かにやさしき顔
不思議な静けさ―宮本正清の世界
ピアノ演奏　山田　忍　佐々木斐夫　小尾俊人

一九九三

1・29　自伝的諸作品について　佐々木斐夫

1・29　ロマン・ロランの演劇的世界　石田和男

5・24　ガンディーとロマン・ロラン　山折哲雄

6・23　『魅せられたる魂』を語る（前）　重本恵津子

10・15　『魅せられたる魂』を語る（後）　重本恵津子

一九九四

1・28　いま、ロマン・ロランを語る　尾埜善司・今江祥智

9・9　ロマン・ロランと音楽　中野　雄

ロマン・ロラン没後五十年記念

10・14　神秘と政治　ロマン・ロラン、その思索と行動のあいだ　B・デュシャトレ

ロランとフランス革命　河野健二

自然科学とゲーテ　岡田節人

12・3　ロマン・ロランとドイツ音楽　岡田暁生

―ベートーヴェン、デュカ他作品　ピアノ演奏　小坂圭太

12・24　おはなし「ピエールとリュス」と「また逢う日まで」　今江祥智

映画上映「また逢う日まで」（監督　今井　正）

一九九五

1・27　ロマン・ロランと日本人たち　小尾俊人

6・2　私の歩んだフランス文学の道　片岡美智

11・10　ロマン・ロランとR・シュトラウスの周辺　岡田暁生

一九九六

6・14　ロマン・ロランとの出会いから　鄭　承姫

11・16　レクチャーコンサート　岡田暁生

ベートーヴェン：ピアノソナタ　第21番、28番　ピアノ演奏　北住　淳

11・18 「戦間期のリベラル」経済学から見たロマン・ロラン　本山美彦

一九九七

1・17 「主体的精神と普遍的人間愛」ロマン・ロランと魯迅　區　建英

6・6 わが青春と一生　岩淵龍太郎

9・19 ロマン・ロランと結核の時代　福田眞人

10・4 ピアノとチェロのための夕べ　ピアノ演奏　北住　淳

ロマン・ロラン記念コンサート　チェロ演奏　小川剛一郎

一九九八

6・8 ロマン・ロランと種蒔く人　柏倉康夫

9・25 ロマン・ロランと政治的魔術からの解放　柳父圀近

10・30 ロマン・ロラン記念コンサート　ピアノ演奏　小坂圭太

レクチャー　岡田暁生

11・25 ロマン・ロランと大佛次郎　村上光彦

一九九九

6・11 ロランと音楽　岡田暁生

10・8 日本・ロマン・ロランの友の会五十年記念コンサート　園田高弘

〝園田高弘ベートーヴェンを弾く〟

お話と演奏「ピアノとベートーヴェン」

12・1 ロマン・ロランとインドの精神　森本達雄

二〇〇〇

10・13　ロマン・ロラン没後五十五年と日本　佐々木斐夫

二〇〇一

2・23　ロマン・ロランと〈老いの豊かさ〉シンポジウム　青木やよひ　今江祥智　尾埜善司　神谷郁代

6・23　財団法人ロマン・ロラン研究所設立三十年記念コンサート〝神谷　郁代　ベートーヴェンを弾く〟

12・21　ロマン・ロランとヴィクトル・ユゴー　ディディエ・シッシュ

二〇〇二

4・20　ロマン・ロラン記念スプリングコンサート　ヴァイオリン演奏　ピェール・イワノヴィッチ　ピアノ伴奏　郁子・イワノヴィッチ　蜷川　譲

11・11　ロマン・ロランの後継者たち

11・16　宮本正清　没後二十年追悼詩集朗読会

二〇〇三

4・19　ロマン・ロラン記念スプリングコンサート　演奏　ピエール・イワノヴィッチ　郁子・イワノヴィッチ

5・10　ロマン・ロランの作品による音楽とレコード　尾埜善司

5・31　戦争と平和、科学を考える　ピアノ演奏　沖本ひとみ
　プリーモ・レーヴィを語る　ジル・ド・ジェンヌ
11・22　ロマン・ロランを読みながら　今の世界を考える　解説　西成勝好
　峯村泰光

二〇〇四

5・29　〝きょう〟を読む『京都、半鐘山の鐘よ　鳴れ！』
　朗読とおはなしの会　おはなし　尾埜善司　朗読　村田まち子

7・16　ロマン・ロラン記念サマーコンサート　演奏　ピエール・イワノヴィッチ
　郁子・イワノヴィッチ

9・11　抗日中国における中仏文化交流
　中国の知識人はロマン・ロランをどのように評価したか　内田知行

二〇〇五

1・29　現代の法とヒューマニズム
　加古祐二郎と瀧川事件　園部逸夫

6・12　ロマン・ロラン没後六十年記念コンサート
　梅原ひまり　神谷郁代デュオ　ヴァイオリン演奏　梅原ひまり
　ピアノ演奏　神谷郁代

6・25　生々発展する魂
　ゲーテとベートーヴェンそしてロマン・ロラン　青木やよひ

10・29　交差する肖像
　ロマン・ロランとクローデル　J・F・アンス　通訳　原口研治

二〇〇六

11・24　戦間期ヨーロッパとロマン・ロラン　山口俊章

二〇〇七

1・20　日本におけるロマン・ロラン受容史
　琴　笙　ヴァイオリンによる新春コンサート　シッシュ・ディディエ　通訳　シッシュ由紀子

2・3　歌と朗読の会歌
　「ピエールとリュース」朗読　大谷祥子

7・21　朗読の会
　第一次世界大戦とロマン・ロラン　豊　剛秋・増永雄記
　そして『母への手紙』　歌下郡由

10・13　中国研究を通しての日仏交流　尾埜善司　ほか　会員
　京大シノロジーの創始者狩野直喜の場合　村田まち子・宮本エイ子

狩野直禎

11・6　『ピエールとリュース』を演出して　今藤政太郎

二〇〇八

3・8　朗読の会　会員たち

親子で読む・聴く『ジャン・クリストフ物語』

6・28　中国におけるロマン・ロランの紹介者・傅雷　榎本泰子

9・16　前理事長尾埜先生への感謝の会・記念講演　尾埜善司

ロマン・ロランと日本人たち

10・4　ロマン・ロラン国際平和シンポジウム・フランス・ヴェズレー　尾埜善司

宮本正清の詩「焼き殺されたいとし子らへ」

「わらい」朗読

10・4　ロマン・ロランが愛したベートーヴェン　フランソワ・ラベット

ピアノ演奏　神谷郁代

二〇〇九

2・7　朗読の会とピアノ演奏『ジャン・クリストフ物語』　ピアノ演奏　岩坂富美子

朗読　下郡由ほか

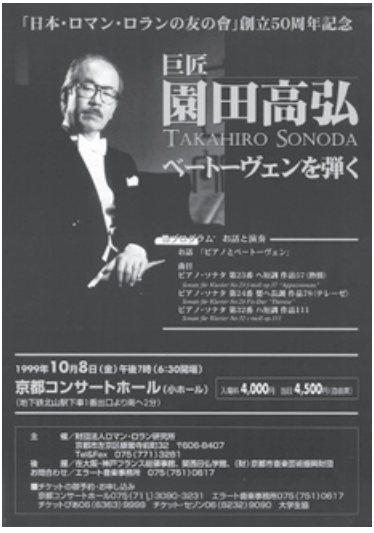
6・13　日本ロマン・ロラン友の会設立六十周年記念

西垣正信レクチャーギターコンサート

9・30　日本ロマン・ロラン友の会設立六十周年記念

フー・ツオン　ピアノリサイタル―三つの文明の出会い―中国・日本・ヨーロッパ

梅原ひまり　神谷郁代
デュオコンサート



50 周年記念　園田高弘（1999 年）

60 周年記念　フー・ツオン（2009 年）

西垣レクチャーギターコンサート

1989 年　加藤周一講演会
関西日仏学館館長ワッセルマンと尾埜理事長、加藤周一氏にサインを求める

1989 年　関西日仏学館再出発パーティー
左から　稲畑勝雄　池垣　勇　ワッセルマン　尾埜善司　野村庄吾

関西日仏学館講演
講師　中川久定　1989 年

1990 年 5 月　ロマン・ロランの足跡を訪ねる旅
クラムシー市長と参加者
ロマン・ロラン記念館

関西日仏学館講演会
講師　宇佐見英治　1990 年

関西日仏学館講演会
講師　新村　猛　1990 年

関西日仏学館講演会
講師　松居　直　1991 年

関西日仏学館講演会
講師　森本達雄　1990 年

関西日仏学館講演会
講師　青木やよひ　1991 年

関西日仏学館講演会
講師　鶴見俊輔　1992 年

宮本正清没後 10 年
記念追悼会 1992 年
関西日仏学館

追悼会
谷岡立命館総長
M・ヴァンチュール
A・ブリューネ
前フランス総領事

追悼会
田中阿里子（作家）
千　登三子（裏千家家元夫人）
宮本エイ子

ロマン・ロラン没後 50 年記念講演会
講師　ベルナール・デュシャトレ
村上光彦　1994 年

ロマン・ロラン没後 50 年記念講演会
講師　岡田節人　1994 年

ロマン・ロラン没後 50 年記念講演会
講師　河野健二　1994 年

ロマン・ロラン没後 50 年記念
ガーデン・パーティ　日仏学館　1994 年
館長ユドロ　村上光彦　デュシャトレ夫妻

映画上映会
尾埜善司　今江祥智
京都文化博物館　1994 年

ロマン・ロラン没後 50 年記念
デュシャトレ夫妻を囲むミーティング
ロマン・ロラン研究所　1994 年

掛軸は、為稲畑勝太郎、クローデル筆、山元春挙画。「馬来たれと願えば、馬来たる」

ロマン・ロラン没後 50 年記念
東山浄苑　旧役員・会員　大谷暢順法主訪問　1994 年
左より　村上夫人　佐々木斐夫　デュシャトレ　村上光彦　宮本エイ子　森本達雄
　　小尾俊人　大谷法主

関西日仏学館講演会
講師　片岡美智　1995 年

ロマン・ロラン研究所にて
小尾俊人　佐々木斐夫　1997 年

日本ロマン・ロランの友の会 50 周年記念コンサート
園田高弘
京都コンサートホール　1999 年

日本ロマン・ロランの友の会 50 周年記念コンサート
パーティ
みすず書房社長加藤敬事　園田高弘　1999 年

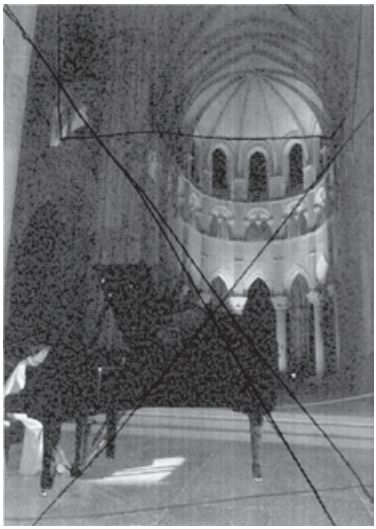
ロマン・ロラン研究所
　30 年記念コンサート
ピアノ演奏　神谷郁代
　コンサートホール館長　岩淵龍太郎
　京都コンサートホール　2001 年

関西日仏学館講演会
講師　ディディエ・シッシュ　2001 年

ロマン・ロラン記念スプリングコンサート
ヴァイオリン演奏　ピエール・イワノヴィッチ
ピアノ伴奏　郁子・イワノヴィッチ
関西日仏学館　2002年

関西日仏学館講演会
講師　ジル・ド・ジェンヌ
（現代のニュートンと称されるノーベル物理学賞受賞者）　2003年

関西日仏学館講演会
講師　園部逸夫　2005 年



ロマン・ロラン国際平和シンポジウム
ピアノ演奏　神谷郁代
フランス・ヴェズレー　2008 年

十、機関誌『ユニテ』総目次

第一期（一九五〇―一九五八）

第二期（一九六四―一九六六）

第三期（一九七三―刊行中）

機関誌『ユニテ』総目次

第一期（一九五〇―一九五八）

一九五〇年十一月　第一号

螺旋形に登り行く道　ロマン・ロラン
マルヴィダ・フォン・マイゼンブーク宛の書簡　ロマン・ロラン
クローデルとアンリ・プティによるロマン・ロラン批評
ロマン・ロラン友の會世界の情勢
日本・友の會の情勢
ロマン・ロラン文献
海外の最近の文献

一九五二年二月　第二号

ヘルマン・ヘッセの『戰争と平和』　片山敏彦
永遠のアンティゴーネへ　ロマン・ロラン
否定的平和主義に反對して　ロマン・ロラン
ロマン・ロランを偲ぶ（詩）　片山敏彦
ロマン・ロランの友の會の情勢
ロマン・ロランの年譜
一抵抗運動者への手紙（紹介）
宮本正清氏からの消息・ある會員よりの手紙・他

一九五二年四月　第三号

肉體勞働者と精神勞働者の同盟のために　ロマン・ロラン
平和への決意　野田良之
ダヌンツィオとドゥーゼの思い出　ロマン・ロラン
ロマン・ロラン頌　ゲーノー・ツヴァイク・他
ロマン・ロラン研究所　宮本正清
ロマン・ロランの友の會の情勢
ロラン夫人からの手紙・紹介・文献・會計報告

一九五二年九月　第四号

倉田百三への書簡　ロマン・ロラン
「魅せられたる魂」の性格　蛯原徳夫
一日本青年への手紙　マドレーヌ・ロラン
ダヌンツィオとドゥーゼの思い出　ロマン・ロラン
「五十年の友情」について　―ロランとシュアレヌ―　片山敏彦
ロマン・ロラン研究所（二）　宮本正清
ロマン・ロランの友の會の情勢
「インド」（新刊紹介）・文献・會員の聲・その他

一九五三年五月　第五号

特集ロマン・ロランの日記
學生時代の日記―一八八八年
ラインの旅―一八九九年
大戰中の日記―一九一六年
インドとの交流―一九二五年
日本の友たち―一九二九年
ロマン・ロラン研究所（三）　宮本正清
ロマン・ロランの友の會の情勢
文献・會員の聲・その他

一九五四年三月　第六号

幼時の想い出　ロマン・ロラン
最初の出会　E・R・クルティウス
ロランとタゴ　C・F・アンドリュース
日本の支部だより
ロマン・ロランの友の会の情勢
編集後記

一九五四年七月　第七号

特集・戦時の日記
「戦時の日記」（抄）　ロマン・ロラン
「戦時の日記」に寄せられた書評など
祖国と人類のあいだに立つロマン・ロラン　P・H・シモン
歴史家・証言者ロマン・ロラン　J・B・レモン
ロマン・ロランと戦争　クロード・ロア
シュヴァイツァーの手紙
ロマン・ロランの友の会の情勢
編集後記

一九五四年十月　第八号
日記抄　ロマン・ロラン
ロランとラファエロ　片山敏彦
ガブリエル・モノー氏と會う　蛯原徳夫
青年時代の印象　フランソワ・モーリャック
ヴェズレーの丘　宮本正清
ロマン・ロラン友の會の情勢

一九五五年六月　第九号
日本の青年たちにおくるメッセージ　ロマン・ロラン
フィレンツェにて―母への手紙―　ロマン・ロラン
抱き合え、幾百萬の犠牲者たちよ！　ロマン・ロラン
タゴールへの二通の手紙　ロマン・ロラン
モノー氏のこと　宮本正清
『内面の旅路』試論　ジャン・ベルナール・バレール
ロマン・ロランが與えるもの　宮本正清
センター「ジャン・クリストフ」　片山敏彦
ロマン・ロランの友の會の情勢
會の聲

一九五六年一月　第十号
日誌抄　ロマン・ロラン
―日本の友たち―　宮本正清
「パリ日記」から　D・K・ロイ
ロマン・ロランとの對話
海外からの手紙
會員の聲
ロマン・ロランの友の會の情勢

一九五六年四月　第十一号
ニオベ―未発表戯曲断片　ロマン・ロラン
ロマン・ロランとタゴール　K・R・クリパラニー
北国の友におくる
―ロマン・ロランについて―　小尾俊人
新刊紹介
会員の声
ロマン・ロランの友の会の情勢

一九五六年八月　第十二号
特集ジャン・クリストフと魅せられたる魂

一九五六年十二月　第十三号
戯曲『狼』の序文（未發表）　ロマン・ロラン
ロマン・ロランの宗教感情　清水　茂
ベルタ・シュライヘル女史のこと　南大路振一
ロマン・ロラン『回想録』について　宮本正清
会員の声
ロマン・ロランの友の会の情勢

一九五七年五月　第十四号
神と社会主義

—『回想録』から—　ロマン・ロラン
ロマン・ロランの青春時代　フランシス・ジュールダン
ロマン・ロランの思い出　ソフィア・ベルトリーニ
ロランの手紙
—『ファルネーズ宮に帰る』—　宮本正清
『魅せられたる魂』についての感想　和久和美
会員の声
ロマン・ロランの友の会の情勢

一九五八年一月　第十五号

ロマン・ロラン「機械の反抗」(要約)　蛯原徳夫
ロラン＝タゴールの対話　森本達雄
会員の声　池田隆正
ロマン・ロランの友の会の情勢
新刊紹介　クリパラニー「ガンジ・タゴール・ネール」

第二期（一九六四—一九六六）

一九六四年一月　第一号

再刊にあたって　宮本正清
ベルタ・シュライヘルさんの便り　南大路振一訳
ロマン・ロランの思想の根本（一）　池田隆正

一九六四年六月　第二号

ロランの手紙
ロマン・ロランの思想の根本（二）　池田隆正
現実と理想とのまじわり　宮本正清
宮本先生への手紙　坂本守正
暁紅女神が吹きならす笛　坂本守正
「ベンガン・デシ讃歌」序　南　宏
「ベンガン・デシ讃歌」
ロマン・ロラン友の会ニュース　坂本守正

一九六五年六月　第三号

旅の日記から　宮本正清
闇の星　大橋哲夫
ロマン・ロラン友の会ニュース
ロマン・ロランの思想の根本　池田隆正
ロマン・ロランに捧げる歌　菅井としお

一九六六年十二月　第四号

ロマン・ロラン生誕百年記念号
ロマン・ロランの生誕百年に際して　宮本正清
偉大な友の思い出　ベルタ・シュライヘア
日本からのあいさつ　蛯原徳夫
ロマン・ロランと私　高多彬臣
会員の声
読者からの手紙
神は平和の愛なり　池田隆生
—「ピエールとリュース」を読んで—
「愛と死との戯れ」について　波多野茂弥

第三期（一九七三—）

一九七三年十月　第一号

祖国と人類—ロマン・ロランの手紙より
財団法人ロマン・ロラン研究所について　蛯原徳夫
ヴェズレーのロランの家
作品紹介『三人の恋する女』　波多野茂弥

一九七四年六月　第二号

ロマン・ロランの言葉
ロマン・ロラン〝母への手紙〟　宮本正清
マルヴィーダとロランの往復書簡　南大路振一

戯曲「愛と死との戯れ」について
随想「モンパルナスの思い出」　宮本ヱイ子
ジャン・クリストフを再読して　織川和夫
友の会だより

一九七五年三月　第三号

ロマン・ロランの言葉
ロラン＝マルヴィーダ往復書簡　南大路振一
ロマン・ロランの個人主義について　宮本正清
ロマン・ロラン没後三十周年記念行事報告にかえて　織田和夫
《ビェールとリュース》を読むにあたって　波多野茂弥ほか
ロマン・ロラン研究所公開講演会報告
ロマン・ロラン友の会だより

一九七六年三月　第四号
ロマン・ロランの言葉
ロラン＝マルヴィーダ往復書簡（三）　南大路振一訳
『カイエ＝ロマン・ロラン十七』よりロランの手紙　宮本正清訳
「《Du holde Kunst in wie viel granden Stunden》…」　細川廣一
〈深い出会い〉への望み　下村　肇
ロマン・ロランと私　田中伸枝
『ロマン・ロランと音楽』ジョルジュ・オーリック
ユニテの広場
ロマン・ロラン研究所の近況
友の会だより
あとがき

一九七七年三月　第五号

ロマン・ロランの言葉
ロマン・ロランとゲーテ　南大路振一
ロマン・ロランに関する国際シンポジウムに参加して　宮本正清
R・Rのための覚え書きNo．1　椿　充代
ユニテの広場　山口三夫・名倉美津子　岡田淳平
ロマン・ロラン研究所から
友の会だより
あとがき

一九七七年十月　第六号

ロマン・ロランの言葉
ロマン・ロランと中国文学・附補遺　相浦　杲
ユニテの広場　中村佐多子・佐藤克子
友の会だより
あとがき

一九七八年三月第七号

ロマン・ロランの言葉
力に対する精神の闘い―ロマン・ロランの《政治》原理　山口三夫
ロラン＝マルヴィーダ往復書簡（四）の一　南大路振一訳
『ロマン・ロランの母への手紙』に添えて―想い出の師友　住谷悦治
Les Amis de Romain Rolland　宮本ヱイ子
ユニテの広場　杉本千代子・高畠敏郎
成田雅美
友の会だより
あとがき

一九七八年十月　第八号

ロマン・ロランの言葉
ロマン・ロランと魯迅『阿Q正伝』　相浦杲訳
ロラン＝マルヴィーダ往復書簡（四）の二

ふらんす随想五十年―その一―　南大路振一訳
ユニテの広場　宮本正清
友の会だより　塚本晴子
あとがき
研究所図書目録（一）

一九七九年三月　第九号

ロマン・ロランの言葉
クラムシー―一月三十日一九七七年―井土熊野
ロラン＝マルヴィーダ往復書簡（五）　南大路振一訳
R・Rのための覚え書きNo．2　椿　充代
ユニテの広場　大橋哲夫
ロマン・ロラン研究所から
友の会だより
あとがき
研究所図書目録（二）

一九七九年三月　第十号

ロマン・ロランの言葉
断章―『魅せられたる魂』　山口三夫
『魅せられたる魂』を再読して　垣内永至
アンネットの生き方―セミナーの発表から　中村佐多子
ロラン＝マルヴィーダ往復書簡（六）　南大路振一訳
ユニテの広場　西村太一
友の会だより
あとがき
研究所図書目録（三）

一九八〇年三月　第十一号

ロマン・ロランの言葉
ロラン＝マルヴィーダ往復書簡（完）　南大路振一訳
マルヴィーダ・フォン・マイゼンブーク
―B・シュライヘアをめぐって　B・シュライヘア
―B・シュライヘア、片山敏彦往復書簡
から―
仏独合作テレビ映画
《ジャン・クリストフ》の周辺から　宮本エイ子
ユニテの広場　古田泰子
ロマン・ロラン研究所から
友の会だより
あとがき
研究所図書目録（四）

一九八〇年十月　第十二号

ロマン・ロランの言葉
《ロラン体験》の持続と展開　山口三夫
ロマン・ロランに答える（G・ハウプトマン）
南大路振一訳
ロマン・ロランとミレー　大橋哲夫
ユニテの広場　井土真杉・森　満夫
友の会だより
あとがき

一九八一年三月　第十三号

ロマン・ロランの言葉
ロマン・ロランと中国文学Ⅱ　相浦　杲
ロラン＝マルヴィーダ往復書簡（補一）
南大路振一訳
ユニテの広場　寺田由美子
友の会だより
あとがき
研究所図書目録（六）

一九八一年十月　第十四号

ロマン・ロランの言葉
ロマン・ロランのみたバッハの面影　清水　茂
ロラン＝マルヴィーダ往復書簡（補二）　南大路振一訳
ユニテの広場（中村佐多子さんのこと）　大橋哲夫
ロマン・ロラン研究所から
友の会だより
あとがき
研究所図書目録（七）

一九八二年三月　第十五号

ロマン・ロランの言葉
ロマン・ロランについて思い出すこと　日高六郎
雑感：《ユニテ》への歩み　山口三夫
ロマン・ロランと王元化先生に捧ぐ　相浦　杲
『ジャン・クリストフ』について　王　元化
かさねて『ジャン・クリストフ』を読む　王　元化
ロラン＝マルヴィーダ往復書簡（補三）　南大路振一訳
ユニテの広場　寺尾文成・織田和夫
友の会だより
あとがき
研究所図書目録（八）

一九八八年十一月　第十六号

宮本正清追悼号
詩二篇　宮本正清
焼き殺されたいとし子らへ
わらい
〔追悼文〕
新しいヒューマニズムを　笠原芳光
宮本先生と英語　新道弘之
宮本正清先生の想出　谷口知平
追想―宮本正清先生のこと　H・デュルト
慈父のような先生　直木孝次郎
大地に平伏して　中江要介
宮本正清先生とロマン・ロラン　中川久定
私の宮本先生　長谷川治清
宮本先生と私　長谷川正海
宮本先生の「若さ」　原田　武
宮本先生　松下明治
宮本正清先生の思い出　宮崎市定
情熱の人　山田　忍
心の人宮本正清先生を偲んで　山口善造
お世話にばかりなった話　井土真杉
宮本先生と津高ロマン・ロラン友の会　小出幸三
宮本先生の思い出　杉本千代子
思い出　永田和子
心のアルバムから　成田雅美
宮本正清先生の想い出　森口康子
素顔の追想　宮本ヱイ子
財団法人ロマン・ロラン研究所だより
ロマン・ロランセミナーだより
編集後記　大橋哲夫

一九九〇年三月　第十七号

ロマン・ロランの反戦思想と現代　加藤周一
日本におけるロマン・ロラン受容史一　小尾俊人
インタビュー
ロマン・ロランを偲ぶ　（話し手）上田秋夫　（聞き手）永田和子
表紙雑感
一枚の屈出から　宮本ヱイ子
財団法人ロマン・ロラン研究所賛助会員
ロマン・ロラン・セミナーだより
編集後記　大橋哲夫

一九九一年五月　第十八号

ロランとガンディー　森本達雄
ロラン・片山・ヘッセ　宇佐見英治
日本におけるロマン・ロラン受容史二・終　小尾俊人
マキシム・ゴーリキーの悲劇
―ロマン・ロラン宛の手紙からみる　Tamara・MOTYLEVA　能田由紀子訳

一九九二年三月　第十九号

ロマン・ロランとベートーヴェン　青木やよひ
ロランとデュアメル　村上光彦
はじめにロマン・ロランあり　岡田節人
自伝的諸作品について　佐々木斐夫
ヴィルヘルム・ケンプ／ドイツ「ロマン・ロラン友の会」会長へ捧ぐ　M・H＝ケーディング　大出學訳
ロマン・ロラン
「私の擁護しているのはスターリンではなくソ連なのです。自由な諸国民の大義なのです。」　タマーラ・モトゥルオーヴァ　能田由紀子訳
編集後記　後記小尾俊人

一九九三年三月　第二十号

『大洋感情』と宗教の発端　岩田慶治
ロランとイタリア　戸口幸策
ロマン・ロランの革命劇をめぐって　鶴見俊輔
宮本正清没後十年記念講演
（一）静かにやさしき顔　佐々木斐夫
（二）ふしぎな静けさ
―宮本正清の世界　小尾俊人
（三）宮本正清さんと一人の学生　尾埜善司
〔第一五〇回例会報告〕
ベートーヴェンと私　河合一穂
賛助会員
編集後記　―カット・上田秋夫

一九九四年三月　第二十一号

詩・アンネット（原文と訳）　ロマン・ロラン　（片山敏彦訳）
「魅せられたる魂」を語り終えて　重本恵津子　尾埜善司
ロマン・ロランを語る　今江祥智
ロマン・ロランを語る
あとがき
ロマン・ロラン没後五十年記念の催し・御案内

一九九五年　第二十二号

ロマン・ロランの聴いた音楽彼の文章の背景にあるもの　中野　雄
神秘と政治　ベルナール・デュシャトレ
―ロマン・ロラン、その思索と行動とのあいだ　（村上光彦訳）
ロマン・ロランとフランス革命劇　河野健二
私の科学とゲーテ　岡田節人
ロマン・ロランとドイツ音楽　岡田暁生
ロマン・ロランと日本人たち（一）　小尾俊人
ロマン・ロランをめぐってデュシャトレ教授に訊く　ベルナール・デュシャトレ　（村上光彦訳）
ロマン・ロラン研究所の活動
ロマン・ロラン没後五十年記念一九九四年度賛助会員、寄付者名簿
あとがき
Mystique et Politique　B.Duchâtelet
Romain Rolland entre la Pensée et l'Action

一九九六年　第二十三号

私の歩んだフランス文学の道　片岡美智
ロマン・ロランとシュトラウスの周辺　岡田暁生
ロマン・ロランと日本人たち（二）　小尾俊人
ロマン・ロランの面影　落合孝幸
上田秋夫追悼　永田和子
―詩人上田秋夫の青春
ベートーヴェンで死ぬことについて　浜田　陽
阪神大震災によって再びロマン・ロランと…　島谷亜希
ロマン・ロラン研究所の活動
一九九五年度賛助会員、寄付者名簿
あとがき

一九九七年　第二十四号

経済学から見たロマン・ロラン　本山美彦
―戦間期のリベラル―
ロマン・ロランと魯迅　區　建英
ロマン・ロランとの出会いから　鄭　承姫
―なぜ、わたしは博士論文にロランを選んだのか―　（李　珣淑・濱田　陽訳）
韓国から講師、鄭承姫さんを迎えての覚え書
ベートーヴェンの二つのソナタ―ロランとアドルノ―　宮本エイ子
―ロマン・ロラン生誕一三〇年記念コンサートで―
「ロラン生誕一三〇年記念コンサート」に　岡田暁生
今、又、ロランの精神を必要とする時　井土真杉
トルストイの『クロイツェル・ソナタ』とロマン・ロラン　杉本峯子
ロマン・ロラン略年譜　清原章夫
ロマン・ロラン研究所の活動
ロマン・ロラン研究所設立趣意書
一九九六年度賛助会員、寄付者名簿

一九九八年三月　第二十五号

わが青春と一生　岩淵龍太郎
―ロマン・ロランと人生観
ロマン・ロランと結核の時代　福田眞人
ベートーヴェン『第九交響曲』（合唱付）フィナーレについて　森久光雄
［ロマン・ロラン研究所創設者・宮本正清生誕一〇〇年を迎えるにあたって］　金澤孝文
宮本正清さんの想い出
〈ユニテ・フォーラム〉
ロマン・ロランの読書会例会に参加して　新宮恵美子
『魅せられたる魂』とわたし　原摩利彦
『ジャン・クリストフ』のすばらしさ　杉本峯子
ロランとフラクタル
ロマン・ロラン研究所の活動
ロマン・ロラン研究所設立趣意書
一九九七年度賛助会員、寄付者名簿
編集後記

一九九九年三月　第二十六号

ロマン・ロランと「種蒔く人」　柏倉康夫
ロマン・ロランと「政治的魔術」からの解放
―マックス・ウェーバーの二〇世紀観との関連で―　柳父圀近
『最後の扉の敷居で』について　村上光彦
読書会のメモから　富田　武
ロマン・ロランと大震災　尾埜善司
ロマン・ロラン研究所ホームページ開設までの道程　清原章夫
インターネットについて　杉本峯子
墓碑銘
一九九八年度賛助会員、寄付者名簿

編集後記

二〇〇〇年四月　第二十七号

ピアノとベートーヴェン　園田高弘
ロマン・ロランとインド　森本達雄
ロマン・ロラン『最後の扉の敷居で』から　村上光彦
「愚鈍」の小詞華集　村上光彦訳
「文明化された野蛮」の時代に　小尾俊人
—映画『スペシャリスト』を観て—
魂の対話—ロマン・ロランの実験的精神　濱田　陽
ロマン・ロラン研究所と自然破壊
ロマン・ロラン研究所の活動・設立趣意書
新会員からのお便り
一九九九年度賛助会員、寄付者名簿
友の会創立五十周年記念コンサートへのお礼—
あとがきにかえて

二〇〇一年四月　第二十八号

ロマン・ロランと日本　佐々木斐夫
「ロマン・ロラン全集」の出発の頃　小尾俊人
—敗戦、占領、著作権、そして読者—
ロマン・ロラン『最後の扉の敷居で』から二　村上光彦
ブルゴーニュの小さな村で
ロマン・ロランのお墓を訪ねて　佐久間啓子
ロマン・ロラン研究所と自然破壊（続）
研究所だより
ロマン・ロラン研究所の活動・役員改選・設立趣意書
二〇〇〇年度賛助会員、寄付者名簿
あとがき

二〇〇二年四月　第二十九号

ロマン・ロランとヴィクトル・ユゴーディディエ・シッシュ
—フランス人の目から見る—シッシュ由紀子訳
人生の秋にロマン・ロランを読む　青木やよひ
ロマン・ロラン『最後の扉の敷居で』から三　村上光彦
『魅せられたる魂』の読書会を終えて　清原章夫
宮本正清先生の思い出　小田秀子
ロマン・ロラン研究所と自然破壊三　宮本エイ子
ロマン・ロラン研究所の活動・設立趣意書
二〇〇一年度賛助会員、寄付者名簿
あとがき　小尾俊人
Romain Rolland et Victor Hugo Didier Chiche
-un point de vue français I

二〇〇三年四月第三十号

ロマン・ロランへの新たな見方
訳・村永京介　ベルナール・デュシャトレ
はじめての翻訳をして　村永京介
ベルナール・デュシャトレ
『あるがままのロマン・ロラン』概要　村上光彦
ロマン・ロラン『最後の扉の敷居で』から四　村上光彦
〈没後二十年宮本正清を偲ぶ①〉
ロマン・ロラン随想　宮本正清
〈没後二十年宮本正清を偲ぶ②〉
四国の山間の小学校から　編集部
〈没後二十年宮本正清を偲ぶ③〉
追悼朗読会に参加して　能田由紀子
ロマン・ロランの後継者たち　蜷川　譲
パリから—「ロマン・ロランの友の会」の人たち　宮本エイ子
読書会報告　有馬通志子

ロマン・ロラン研究所ホームページ改訂について　清原章夫
小尾俊人著『本は生まれる。そして、それから』　濱田　陽
追悼
ロマン・ロラン研究所の活動・設立趣意書
二〇〇二年度賛助会員・寄付者名簿
あとがき

二〇〇四年四月　第三十一号

ピエール＝ジル・ド・ジェンヌ教授講演会
戦争と平和を考える
—プリーモ・レーヴィを語る　ピエール＝ジル・ド・ジェンヌ
訳注西成勝好
ロマン・ロランを読みながら、今の世界を考える　峯村泰光
ロマン・ロランの作品による音楽とレコード　尾埜善司
ロマン・ロラン日記の周辺と出版事情　宮本エイ子
『京都・半鐘山の鐘よ鳴れ！』（宮本エイ子著）を発行　編集部
ロマン・ロラン研究所の活動・設立趣意書
二〇〇三年度賛助会員、寄付者名簿
短信・あとがき

二〇〇五年四月　第三十二号

ロマン・ロラン没後六十年記念号
加古祐二郎と瀧川事件など
—加古日記を繙きながら—　園部逸夫
ロマン・ロランの燔柴（はんさい）
—その最後の歳月、最後の日々　村上光彦
抗日中国における中仏文化交流：中国の知識人はロマン・ロランをどのように評価したか　内田知行
〈ユニテ・フォーラム〉
ロマン・ロランが日本の新国劇に影響を与えた　徳永勲保
ロマン・ロランの肉筆が語りかけるもの　植松晃一
半鐘山開発問題・その後　宮本エイ子
ロマン・ロラン研究所の活動・設立趣意書
二〇〇四年度賛助会員、寄付者名簿
あとがき

二〇〇六年四月　第三十三号

生々発展する魂
—ゲーテとベートーヴェン、そしてロマン・ロラン—　青木やよひ
交差する肖像—ロランとクローデル　ジャン・フランソワ・アンス
ロマン・ロラン『最後の扉の敷居で』から五　村上光彦
〈ユニテ・フォーラム〉
『愛と死との戯れ』の校正刷りを譲り受けて　植松晃一
半鐘山開発問題報告　宮本エイ子
ロマン・ロラン研究所の活動報告
ロマン・ロラン研究所の活動・設立趣意書
二〇〇五年度賛助会員、寄付者名簿
あとがき

二〇〇七年四月　第三十四号

日本におけるロマン・ロラン受容史　ディディエ・シッシュ
訳シッシュ由紀子
戦間期ヨーロッパとロマン・ロラン　山口俊章
『最後の扉の敷居で』から六　村上光彦
新春コンサート東洋・西洋の出会いプログラム

ノートより　大谷祥子
歌と『ピエールとリュース』朗読の会から　下郡　由
歌い終えて　尾埜善司
『ピエールとリュース』をめぐって　岩坪嘉能子
『ピエールとリュース』と今藤政太郎さんと　清原章夫
「平和のカノン」　宮本エイ子
半鐘山開発問題和解
ロマン・ロラン研究所の活動報告
ロマン・ロラン研究所の活動・設立趣意書
二〇〇六年度賛助会員、寄付者名簿
あとがき

二〇〇八年四月　第三十五号

中国研究を通しての日仏交流
―京大シノロジーの創始者狩野直喜の場合―　狩野直禎
『ピエールとリュース』上演までのおはなし　今藤政太郎
世界ではじめてロマン・ロラン全集を出版した小尾俊人氏に聞く　編集部
『最後の扉の敷居で』から七　村上光彦
関西日仏学館八十周年記念とロマン・ロラン研究所
共催講演会にあたって　宮本エイ子
読書会報告　清原章夫
〈ユニテ・フォーラム〉
〔読書会に参加して思うこと〕四十五年後の感想
ロマン・ロラン研究所の活動報告
ロマン・ロラン研究所の活動・設立趣意書
二〇〇七年度賛助会員、寄付者名簿
あとがき

二〇〇九年四月　第三十六号

中国におけるロランの紹介者・傅雷　榎本泰子
ロマン・ロランを「あたま」でなく「からだ」でよみ、きく　尾埜善司
『最後の扉の敷居で』から八　村上光彦
新理事長ごあいさつ　ロマン・ロラン研究所と私　西成勝好
ロマン・ロラン国際平和シンポジウム二〇〇八　報告
ロマン・ロランの足跡を訪ねて　宮本エイ子
フランス　西尾順子
スイス　中田裕子
足跡を訪ねてに参加して　石川楢一
魂への旅　山下雅子
ロマン・ロランを訪ねて　永田和子
神谷先生コンサートプログラムにかえて　清原章夫
幸せな時間　神谷郁代
ヴェズレー旅情　園部逸夫
加藤周一さんを偲ぶ　奥村一彦
ロマン・ロラン研究所の活動
財団法人ロマン・ロラン研究所設立趣意書
二〇〇八年度　賛助会員、寄付者名簿
新役員名簿
あとがき　小尾俊人

六〇年史を編むにあたって

六〇年史を編むにあたって「日本・ロマン・ロランの友の会」設立当時の趣意書を見ると、委員、顧問、評議員の五〇名の役員で構成されている。当時第一線で活躍している著名人の名が綺羅星のごとく記されている。今、ご健在なのは佐々木斐夫氏と小尾俊人氏お二人だけである。いずれも当財団と深くかかわってこられた。そこで、みすず書房でロマン・ロラン全集を編集し、友の会のまん真ん中を歩いてこられた研究所の理事で「ユニテ」の編集委員でもある小尾俊人氏に六〇年史の編纂への助力をお願いした。残念なことは、九六歳の佐々木斐夫先生にご回想いただけなかったことである。

一九六八年、当時まだ学生気分の抜けなかった私は、友の会の会合、つまりロラン作品を輪読する会に参加させていただき、それ以来四〇年余り、「門前の小僧……」に至っている。

黴や紙魚にまみれ朽ち果てかけた古い資料に咳こみながら紙片の塊を探っていく。人生という川ならぬ会という川は誰のものでもない。川の流れのなかに人が現れ、消え、また結ばれていくような人々の夢幻現象が見えてくる。教えを導いていただいた懐かしい面々が生きているように今問いかけてくる。

京都支部の中には同志社大学支部として、児童文学出版・福音館社長となる松居直氏、童話作家となる今江祥智氏も学生で集まっておられ、この二人はのちに、ロマン・ロラン研究所の理事としてご協力いただいた。

森本達雄氏も同志社大学学生として、また和歌山支部のメンバーとしてお名前があり、インド研究の大家となった今も研究所の理事としてお力をいただいている。

大阪支部があったが、手元に資料がないので正確には言えないが、（一九五〇年代―一九八〇年代前半）まで活動

していた。朝日ビルの五階、滝川法律事務所で幸辰氏の秘書をされていた石田喜枝子さんが友の会や「ユニテ」の一切の事務を取り仕切られていた。たいへんな読書家でロマン・ロランの記述があるとすぐコピーして送ってこられた。今、怖がられている先生方もそのころ学生で才色兼備の彼女からはクンづけて呼ばれ頭が上がらなかったらしい。

波多野茂弥氏は一九四〇年代から宮本正清が病床につくまで常に宮本と行動を共にされ、大阪の会にも、中心人物として参加されていた。ふたりは夜更けの帰り道、当時終点の京阪三条で降り、大衆食堂でどんぶり程度のものを食べて、北白川界隈の家まで歩きながら話し続けていた逸話は今では遠い昔である。

京都市職員であった大橋哲夫氏は一九六〇年代から約二〇年間、京都の友の会の幹事役でお茶会なども催し、会員の親睦をはかられた。

中村佐多子さんは裏方事務を六〇年—七〇年代の亡くなるまでマリアさんのごとく献身的に尽くされた。

宮本正清死去に伴い財団法人が解散の危機に陥ったとき、監事の尾埜善司氏（弁護士）は「解散は許されぬ」と解散派を尻目に理事長に就任下さり二〇〇七年まで活動の先頭に立たれた。

船頭を失い再出帆に向かう尾埜丸の困難な時期、その第一号講演をお引き受け下さったのは加藤周一先生であった。おかげで再出発に弾みがついた。

以上は関西を中心に活動された人々を中心に、思い起こすまま簡単に記した。「私を無視して」とお叱りの声を聴かないわけでもないが。研究所のホームページを見ていただくとかなり詳細にお分かりいただけよう。ホームページ管理は上原徳治氏と清原章夫氏である。

六〇年ひたすらロマン・ロランだけをテーマに続けてこられたのはなぜかと、よく聞かれる。ロランの「どこから見ても美しい顔」は、色あせず、どこから見ても重要なテーマが宝の山のごとく掘りだせる。ロランは思索し、音楽し、何よりも社会に向けて行動した良心であった。作品は、専門家やごく一部の選良のためのものではなく市井に生きる

普通の人々の人生と重なる。苦しみ、悩み、克服する勇気を奮い立たせるところに感動が生まれる。こうして健全なロラン精神の普遍的神髄によって会が存続してきたものであるが、その核を支える外的要因も見逃せない。財団法人としたため手狭であってもホームグラウンドが確保され否応なく活動がとりおこなえること。文教地域にあって第一回会合から場所を提供していただいた関西日仏学館というフランス文化拠点の存在も忘れてはならないだろう。つねに支援が提供されてきた。経済的には稲畑産業株式会社が特別賛助金を変わることなく毎年振り込んで下さる。

はじめにロマン・ロランとポール・クローデルあり。ポール・クローデルと稲畑勝太郎、そして関西日仏学館と宮本正清に連鎖しユニテする。

「新聞でよく見ている。まだ続けられているのね」とか「今までずっと新聞で見ていたが、来れなかったけれど、やっと来れるようになった」と言って参加して下さる方も多い。

京都という盆地の狭い人的文化交流の風土も種を栽培養育しているかもしれない。

最後になったが小尾氏がくださった原稿を酷暑のなか研究所に所蔵している資料とつき合わせの検証をして下さったのは大出學氏と仲井道子氏である。パソコン入力は中西明朗氏、中田裕子さんと木下洋美さんである。

さまざまな関係者にあらためて深く感謝する。

なお、新・旧字体、表記の不統一、ご寛恕願います。

宮本ヱイ子　記

宮本ヱイ子　　小尾俊人
加藤周一氏お別れの会出席後に　2009年　東京有楽町

ロマン・ロラン研究所役員（二〇〇八年から任期四年）

理事

稲畑勝雄（新）	稲畑産業（株）会長
小尾俊人	元みすず書房編集長
清原章夫（新）	グンゼ（株）研究員
シッシュ・ディディエ（新）	甲南大学准教授
永田和子	元高校教諭
西成勝好（理事長）	大阪市立大学特任教授
野村庄吾	元奈良女子大学教授
長谷川治清（新）	同志社大学ビジネススクール教授
宮本ヱイ子	ロマン・ロラン研究所専従者
森本達雄	名城大学名誉教授

監事

池垣　勇	元稲畑産業（株）専務
西村七兵衛	（株）法蔵館会長

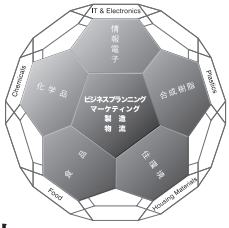
評議員

奥村一彦	弁護士
加藤澄子	主婦

シッシュ・由紀子	フランス語通訳
中西明朗	元会社員
能田由紀子	国際電気通信基礎技術研究所研究員
守田省吾	みすず書房編集長
和田義之	弁護士

価値創造の最前線から。稲畑産業

稲畑産業はIT＆エレクトロニクス、ケミカル、プラスチック、住環境、食品、
といった事業分野で常に斬新なソリューションやサービスを追求しています。
1890年の創業以来、高度な専門知識やノウハウに基づく
ビジネスプランニング、マーケティング、製造や物流を通し、
幅広いニーズに応えるべく努力してまいりました。
今後とも世界に広がるネットワークの総力を結集し、
変化し続ける時代の中で常に新しい価値の創造に取り組んでいきます。



稲畑産業株式会社
www.inabata.co.jp

全国の有名書店にて 好評発売中

野村萬斎主演・演出の
新作舞台劇「六道輪廻」の原作

講談社刊 六道輪廻

著者　大谷暢順
定価　1,575円(税込)

お問い合せ先／東本願寺 東山浄苑 075-541-8391

みすず書房 113-0033 東京都文京区本郷 5-32-21 http://www.msz.co.jp
tel. 03-3814-0131 fax. 03-3818-6435
（価格は税込です）

［好評の新刊書］
ピアノ・ノート
チャールズ・ローゼン「いまピアノを習っていたり、趣味で弾いたり、あるいは自分では弾かなくともピアノ音楽に関心を持つ人は、とにかく一度は本書を繙くべきだ」(朝日新聞書評)。絶賛の書。朝倉和子訳 ¥3360

［新装版］
ピエールとリュース
ロマン・ロラン　第一次世界大戦下のパリ。空爆のさなか地下鉄で出会った二人が、結ばれることは困難であると自覚しながらも想いを募らせる。平和への願いが込められたうるわしい恋の物語。宮本正清訳 ¥1680

型絵染作家
伊砂　利彦

お祝　六十年
賛助会員
森内　富美子

「日本・ロマン・ロランの友の会」と
財団法人ロマン・ロラン研究所　六〇年の歩み

発行日　二〇〇九年十一月一日
頒　価　一、五〇〇円
発行者　（財）ロマン・ロラン研究所
理事長　西　成　勝　好
京都市左京区銀閣寺前町三二
電話・FAX
（〇七五）七七一－三二八一
郵便番号　六〇六－八四〇七
郵便振替振込口座番号
〇一〇五〇－九－五九九九六
印刷所　（株）北斗プリント社

編集部
小尾　俊人
大出　學
仲井　道子
中西　明朗
西村七兵衛
野村　庄吾
宮本ヱイ子

URL　http://www2u.biglobe.ne.jp/~rolland/
E-mail　rolland-miyamoto@mtf.biglobe.ne.jp